戰史評論

成仁武夫補
無名戰士評

第十四回　永沼長谷川兩騎兵隊の挺進

大騎兵集團を以てする挺進の失敗は、前回に於て略述せる露軍挺進團の如きものであつて、之に反して小なる騎兵の挺進隊が、固より充分とは云へぬが兎に角成功したのは我軍に於ける事實である。即ち今から其一例として彼の有名なる、永沼秀文中佐（現少將）と長谷川戍吉少佐（現中佐）の挺進を研究し樣と思ふが。それと同時に敵に於ても少數なる騎兵を以て挺進したものは、何れも多少の成功を齎らして居るから、これも序に附け加へて評論して、此の回の終りに於て騎兵挺進に向つて、自分一己の斷案も下して見たいと思ふ、其斷案の當

不當は一に讀者の判決に任せるけれども、騎兵挺進としては少數なる騎兵を用ゆるのが、格外なる大兵團を用ゆるよりも遙かに利益なるべきは、動すべからざる事實であることは、此の研究の始めに於て評者の確信して斷定する所である、いでや左らば今より我が騎兵挺進の如何なる有樣であつたかを研究するの歩を進め樣。

三十七八兩年に跨がれる沙河の對陣中、我滿洲軍の左翼の方は如何にあつたかといふと。李大人屯より西方沈且堡を經て黑溝臺に至るの間は、之を全然秋山好古少將の騎兵を主力とする支隊に守備せしめたが、其延長は實に無慮二十餘吉羅米突に亘つて居たのである。然るに敵も此の方面には左して有力なる部隊を對向せしめざりしを以て、此の微弱なる秋山支隊も、左したる危險を感ずることはなくして、此の廣大なる地域も無事に警戒守備して居たのであるが。十二月の中旬から翌一月の始めにかけて、敵は頻りと其兵力を此の前面に集中し始めて、日一日と驚くべき程其兵力は增加して來る、丁度此頃此の方面の頭泡といふ一小村を守つて居た、評者の親友後備歩兵の中隊長、故歩兵少佐町野

惟君などは、

「渾の河底の流れは知れねども
日毎にまさる厚氷りかな」

といふ一首の和歌を自分に寄せて、我が左翼の頗ぶる薄弱なる所へ、敵の大兵力の集まり來らんとする形勢を非常に心配して書を寄せられたことがあるが。此の歌の詠出したるが如く敵の兵力は頗ぶる急劇に此の方面に增加して來たので、當の責任者たる秋山支隊長は、充分に前面の敵情を搜索せんとして、種々苦心慘憺たる謀を運らしたる結果。十二月の二十五日に至つて大冒險の敵背挺進を決行して、充分に敵情を明らかにすると共に、其後方を擾亂せしめて大に敵に恐慌を起させてやらんと決心した。

そこで直ちに其配下に直隸する所の、騎兵第一旅團の兩聯隊第十三、第十四の八個中隊と、騎兵第五、第八の兩聯隊から各、若干隊を集めて。即ち所謂秋山支隊の各隊から若干づゝの精兵を選拔して、就中最近に增加せられたる騎兵第八聯隊及同第五聯隊の中から最も多くの人員を採用して、第一挺進團を編成す

べきことを命令して、これを新來の第八聯隊長永沼秀文中佐に指揮せしむることにした。即ちその編成の下令が十二月廿五日であつて、此の挺進隊の成立したのは翌一月の三日であつた。然るに深慮なる秋山少將は此大冒險を行ふにも、決して頭から危險を冒す樣なことはせずして、それより數日の前に於て、大膽千萬にも騎兵第十三聯隊の飯田少尉と、同第十一聯隊の光田特務曹長とを以て將校斥候としてこれを奉天西北方の敵中に放ち。これを十二月二十三日に出發せしめて豫め敵情如何を搜らせた所が、彼等は首尾よく其目的を達して萬死を冒して歸來して、一月二日より四日の間に於て、綜合すれば大要左の如き報告を呈したのであつた。

『奉天の西方及西北方には敵の集團部隊なく、唯奉天―新民府街道及其南方には處々に三二百の步騎兵屯在せり。又西方に對する敵の警戒線は遼河左岸に沿ひて配置せられ、大民屯、長山子、鞠家窩棚、方家崗子、雙樹子、石佛寺等の各地には、何れも二三百の敵騎兵あり。遼河右岸には老達房に騎兵約三百あるの外、單に斥候の出沒するに過ぎず』

といふ有益なる報告を得たのであつて、此の綜合的報告より考へて見ると、充分に挺進隊の敵背に侵入し得べき見込ありと判斷したる秋山少將は。一月三日に編成を終りたる第一挺進隊を、其翌四日に蘇麻堡に集合せしめて、前揭の敵情を詳細に知らしむると共に其出發を一月九日と決定した。これと同時に奉天鐵嶺附近の地形を審かにせんとして、騎兵第九聯隊の建川中尉、同第十三聯隊の德永中尉(現少佐高須一萬太郎)、同第十四聯隊の乃村特務曹長を將校斥候として、愈〻敵中に向つて突入せしむることに命令したのであつた。

實は我軍に於ては既に旅順陷落の功を奏したので、此の三十八年の二三月頃に、敵に向つて大攻擊を決行せんとして其準備に全力を盡して居たので。此の挺進隊は豫め深く敵の背後に侵入して居て、此の本軍の攻勢移轉と相應じて其背後を攪亂せんと計畫して見たのであるが。少なくも寬城子即ち長春附近迄は入り込ませ樣といふのであるから、直徑にして見ても其距離は百里近いのである。況んやこれが左縈右回して敵の視目を潛み避けて、思ひの儘に其目的を達し樣といふ爲めには、少なくも數百里の道程を經過せねばならぬのはいふ迄

もない。左すれば本軍と此の挺進騎兵隊との連絡は到底不可能と見るが至當である。斯の如き不確實なる連絡線を頼みにして、巧に本軍の攻擊と相適應して敵背後を騷がせ樣といふのは、實際これは頗ぶる手違ひを生じ易い危險なる計畫であるといふので。斷然此の策應の計畫を止めにして、第一の挺進隊は長春東北約三十里張家屯附近の窰門河の鐵橋破壞を主要なる目的とし。此の大破壞を一月下旬から二月初旬の間に於て決行することに訓令して、愈、一月九日を以て蘇麻堡を出發して敵中に潛入することにしたのである。

此の時に當つて出發せしめたる第一挺進隊の編成と、其指揮官永沼中佐の受領したる挺進の訓令とは秘密ではあるまいが戰史には記載してない。知りたいと思ふ方々は思ふに澤山にあるであらふが、これはどうも評者も此の評論の紙上では發表し兼ねるのであるが、兎に角此の騎兵隊は頗ぶる微弱極まるものであつたのは事實である、これが指揮者が第八聯隊長である所からして考へて見ると、其兵力がどの位あつたかは略、推定し得られぬこともあるまいが。一見した所では秋山支隊の騎兵の數は頗ぶる多く、合計二十餘中隊を算して其聯隊は

九個聯隊に亘つて居るが。これ等の兵は若干の步兵と砲兵と相混合せられて、既に前にも述べたる如く、李大人屯から黑溝臺に至る約五里の間を守備して居り、中々手不足で困つて居た場合である。其の中からして少數づゝの精兵を選拔したのであるから、第一挺進隊の兵數は實は頗ぶる見すぼらしきものであつた。先づ最少限一中隊から最大限三中隊位の間であつたと思へば大差はあるまい。本より明瞭には知れぬが中數を求むれば二中隊であるから、多分それ位と見て置くがよからうと思ふ。又其受けたる訓令も頗ぶる不明であるけれども、大要左の如きものに過ぎまいと自分は推察するのである。

「一、滿洲軍は二月下旬に於て攻擊に轉せんとする希望を有す。

二、貴官は遼河の上流に沿ふて深く敵中に侵入し、敵の交通線を破壞し其糧秣を焚掠し、大に敵の背後を脅威し以て敵の前線の兵力を此の方面に牽制し、且つ本國よりの補充を妨害するに勉むべし。

三、貴官の行動は一に貴官に一任すと雖ども、概略其目標を長春北方窰門河附近の鐵橋と定め、一月下旬より二月上旬の間に於て、敵背後に大驚慌を

捲起せしむる如く、巧に行動するを必要とす。

四、一部隊を其挺進の途中に殘置して、折ある毎に其景況を報告すると共に支隊との連絡を通ずるを要す、而して一切の挺進行動實施に就ては一に貴官の獨斷に一任す』。

といふた樣なものであつたと想像する、而して評者は此の第一挺進隊の派遣に付ては殆んど一點の非難すべき點がないと考へる。既に半ケ年近い所ろの對陣の爲めに頗ぶる我軍は脾肉の歎に堪へぬのである、然るに敵は近頃盛んに其左翼たる我が秋山支隊前面に兵力を增加する而已か、一月一日の夜には小北河附近から我が背後に潛入したる敵の騎兵斥候は、海城北方の鐵道を破壞して少なからざる交通の不便を與へた。更に此一月の上旬には四方台方面に非常に大なる敵兵の集合するといふ情報は、頻々として櫛の齒をひくが如く秋山將軍の耳朶を打つたのであるから、此場合に於て大冒險的大挺進を決行して、新局面を發展して人心を新たにせしむると共に、前面に集合しつゝある大なる敵騎兵集團を此の挺進隊の行く先きなる敵の背後遠く牽制して、現在秋山支隊の前面

の壓迫を幾分たりとも輕減すると共に、敵の內部に騷動を釀させ併せて其の情況を搜索せんとして、同將軍が此の挺進を企畫したのは最も其時機が適當であると評者は思ふ。

其準備として先づ二將校斥候を奉天西北方へ派遣して、豫かじめ敵の有樣を偵知して充分に侵入し得べきを確めて、それから斷然大挺進を行なはしめたのは更に最も用意周密である。敵中を潛行して其情況を搜り得べき、極々少數なる將校斥候を放つて、此挺進の爲めに敵の背後の平常の警備を搜つたのは。一面頗ぶる愼密に過ぎる樣に感ずる人もあらふけれども、斯くして此の挺進隊が出發早々敵に其行動を妨げられぬ樣、又其挺進の勇氣を無益に減耗せしめぬ樣にするには、是非ともこれ丈けの準備をする必要がある、でこれは實に申分なき手の盡し方といふべきであつて。大膽極まる大々的冒險を實行する基礎としては、如斯極めて愼密周到なる計畫によつて其根本を堅固に固めねば、到底充分に其目的を達し得ぬのは目前である。で此の準備搜索は頗ぶる適當であつたと評者は思ふ、難者或はいはん此樣なことをすれば、これが爲めに敵を警醒せ

しめて、其の警戒を嚴にせしむるの虞れがあるから却て挺進を妨害するに至ると。如何にもそれは確かに一面の理由はあるけれども、去ればといふて敵に準備があるかないか、皆目夢中で敵中へ侵入するといふのは、これ蓋し頗ぶる暴虎憑河的の無謀である。敵は大抵此れ位の準備があるから、それで我が挺進もこれ位の部隊で、如何なる方面からするがよい位の大見當は、是非とも明らかにつけて居らねば、巧みに挺進を仕をほせることは出來ぬのである。からして馬鹿に念を入れ過ぎるのは固よりよくはあるまいが、其大要を知る爲めに挺進の直前に歸還する樣に、敵中に斥候を放つたのは頗ぶる機宜に適したる處置であると自分は信ずる。

更に永沼中佐に訓令を與へるに當つて、一度は我本軍の攻勢移轉と相策應せしめんとして見たけれども、熟考して見ると到底それの不可能なるべきを豫察して。更に豫めこれに一月下旬より二月初旬といふ期間を限つて、敵の背後を攪亂すべき時期を示したのは至當である。論者或はいはん果して然らばこれ挺進前行ではないか、前回には挺進は是非攻擊と同行するがよいといひながら、

今度はそれを前行する如く訓令したのを至當とするのは、評者に定見がないのであるといふ人があるかも知れぬ。それ然り豈にそれ然らんやである、如何にも前には挺進は攻擊と同じく行ふべしといふたに相違ない、併しそれは其の挺進を行ふべき時期と場合が頗ぶる相違して居るのである。露軍が我が背後へ侵入し得べき距離は僅々二三十里にしか過ぎぬのである、からして此の方面へ兵力を牽制するとしても、それは日ならずして直に舊位に復し、又鐵道を壞しても徒歩で駈け附けることを得るが。我挺進隊が敵の背後に侵入し得べき區域は、之に反して頗ぶる廣大無邊であつて、此の挺進を命ぜられたる永沼挺進隊も、其目標を約百二十餘里の松花江南方支流近傍に選んで居るが、其先の哈爾賓でも貝加爾湖附近でも、西伯利亞鐵道沿線數千百里間は悉皆我挺進可能の區域である。果して然らば大距離の挺進をして、戰線より遠隔せる距離に於て鐵道の大破壞を決行すれば、敵は殆んどこれが爲めに人員軍需の兩補充を全く杜絶せられる恐れがある。それであるから勝手にしろと暢氣に構へて居る譯にはゆかぬ、是非〳〵それを防禦するの方法を講じねばならぬ。然るに歐魯以東數百千

里の間が、悉皆危險界であるからには、一哩に一人を配布しても千や二千の兵はすぐ必要である、況んやそれが凹凸道邃道河川橋梁とかいふ樣に無數の大危險の場所へは、一小隊なり一中隊なりを配布するといふ事になると、忽ちにして一旅團や一師團はそれが爲めに使用する事になる羽目に陷る、斯くなれば前線に於ては爲めに忽ち一師團の兵力が減ずるのである。前回にも揭げたと思ふが數は頗ぶる我より優勢であるのは事實である、これを攻擊せんが爲めには是非とも百方手段を盡して其兵力を分割せしめねばならぬ。其必要から考へても大に敵に疑の念を抱かせて長い〳〵鐵道の全部に大なる守備兵を配布せしめる樣にするのは、我軍の爲めには非常に利益あるべき方法である。然るにこれが我攻勢移轉の時日と其時機が餘りに接著し過ぎて居ては、兎に角攻めかゝられた急場である前線の方を主として懸念する所から、一時後方の危險は抛擲するといふ處置に出るかも知れぬ。そこが即ち此の挺進なるものゝ同行と前行の孰れをとるべきかの考へ所であると評者は思ふ。長い後方連絡線の諸所方々へ脅威を加へて、日本の大兵力が蒙古から侵入して哈爾賓以北に向つだといふ、大

法螺貝を吹きたてつゝ、彼が背後を變幻出沒極まりなき騎兵別働の妙技を盡して攪亂したならば。如何に泰然自若たるべき筈のクロパトキン大將でも、何にほつとけと默まつて棄てゝ置く次第にはゆくまい。終にこれに欺むかれて一度これが爲めに兵を動かしたが最後、其後方交通線は頗ぶる延長して居るのであるから、其牽制された部隊はもう一日や二日では到底舊位置には歸還し能はぬ。これ即ち此の場合に於て攻擊と同じく挺進を行ふよりも、豫かじめその少し前にこれを行ふのが都合のよい所以である。よしや幾分このやり方が不適當であると考てからが、敵兵を遠方へ牽制せねば味方は利益はないのであるから、勢ひ可成遠く挺進する必要があるのであるが。遠く敵中へ進んだとして見れば到底本軍との連絡は不可能である。彼の露軍の馬賊使用者たるマトリドフ中佐が、先に韓國へ挺進した時に、鴨綠江の戰鬪は遠の昔しに落著したのも知らずして、間の拔けた時候はづれに定州附近に進出して兵站守備の一小隊と戰つた樣なものので。連絡が無い爲めに挺進隊は機を逸して、大切な戰鬪は味方敗北となりたる後に於て敵の背後を脅かすといふ滑稽を演する樣になり易い。からして少し

都合はよくないとしても、其情況を熟考したる上にて、凡そ隊の別働行爲の實行と本軍の攻擊とが、自然に期を同じくする如く、若し失敗しても戰機に遲れぬ樣に幾分本戰より先に時日を推定して出發せしめる外には詮方ないのである、況んや此場合には牽制の爲めにも先行が利益であるに於ておやである。これ蓋し此の場合に於ては最も適切なる處置であつて、即ち此の決行の時を我攻擊の稍〻前に定めたのは、聊かも非難すべきものでないと思ふ。

而して其進路を遠く西方に採つて、敵の背後へ進出する前に於て盛に流言を放つに勉めしめて、敵が風說の爲めに大なる幻視幻覺を見る樣に神經過敏になつて居る場合に。不意に猛然として敵の咽喉ともいふべき松花江から公主嶺、長春迄を頗ぶる執拗にひつかきまはさうとしたのであるから、其進路を遠く西方蒙古境の方に選んだのも最も適當である。此間何でも馬賊を使用したといふ風說もあるが、これは蓋し事實ではあるまいと考るのであるが、若しやこれを使用したとしてからがお互樣である。敵は公然マドリドフといふ鴨綠江材木公司以來有名な參謀中佐を馬賊指揮者として居たのであつて、我より前に韓國で

もこれを度々使用して居り、其他に於ても隨分と此の馬賊に依つて御便宜を謀つて居たのは事實である。又彼が中立地帶を扼して遼河の西方を勝手に使用したのも事實であれば、我日本軍がそれと同一なる行動をしても少しも支障はないのであるが。正直にして且つ義理堅い我戰友は、決して〳〵其樣な卑劣に近い行爲は致しません、これは評者が大鼓大の印を捺して保證する、暴を以て暴にかへるのは紳士の爲すべきことでない、武士道を生命とする我が日本軍は決して其樣な不都合は働かぬ。が併しそこに一ついふて置かねばならぬことは我れには忠君愛國の精神熱烈たる多數の志士が、軍人以外にも隨分と澤山にあるといふことで。それ等の勇士が遠く支那を經て蒙古に入り込んで居たのは、當時隨分と夥多だしいものであつたといふから、それ等が此の挺進隊と氣脉を通じて働らいたのは事實であらう。現に哈爾賓に於て不幸敵手に落ちた爲めに露軍の極刑に處せられて平然として甘んじて銃殺されたる、明治の大忠臣大勇士横川省三、沖貞介の兩君などは、即はちそれの事實であつた證據であるから、敵が馬賊と認めたのは全くそれは馬賊ではなくして、我が尊敬すべき憂國の志

士隊であつたらふと評者は信ずる。

斯く論じ來れば、其準備も、其出發も、其進路も、其目標點も、悉皆極めて至當である、適切である、而して其外に餘れるものは其編成であるが、これが何故か必要もないのに戰史には態と漏してあるが。既に前にも述べた通り各聯隊からの集成であり、且つ秋山將軍は今後第二、第三、第四と實は澤山の挺進隊を出すつもりであつたといふことであるから、さすれば決して其勢力は餘りに大なるものでなかつたのは明瞭であつて。戰史を附圖や何かに付いて詳細に調査して見ると、騎兵第八聯隊の第二中隊が行衞不明であるから、多分これが基幹となつて各聯隊から一小隊宛集めたとすれば、第三、第六、第九、第十、第十一、からは此挺進に出て居らぬといふから、第十三、第十四と第五の三個聯隊であつて、これで丁度集成の一個中隊位は出來る次第である、左すれば合計騎兵二個中隊位と見たならば當らずと雖も遠くはあるまい。何でもこれ以上では確かにあるまいと考へるのは、其戰史の上に名の揭げられたる大尉の數が、宮內、淺野、中屋の三人であるが、其中の宮內大尉は中隊を持つて居らぬ副官

の樣であるのに見ても、必ず二個中隊位であつたものと自分は認める。而して敵は四門の砲兵が附屬して居たといふて居る、これは全くの虛搆かも知れぬが當時秋山支隊には機關砲隊が屬して居たから、或はこれを同行せしめたかも知れぬが。併し此の挺進隊の出た跡の秋山支隊の配備圖には、騎砲も機關銃も居るからこれは全く何れも附屬せしめなんだのが事實であらふ。此の外にあつたとすれば例の愛國志士義隊であるが、これとても敵のいふた樣な何千といふ樣なものではなく、たか〳〵二百か三百のものであつたらふ。即ち評者が想定したる第一騎兵挺進隊の兵力は、單に騎兵二中隊位ではあるまいか、これは實際此の時の景況から考へて見ると少しく兵力が寡弱である。但し此の外に若干の例の義勇志士隊が同行したであらふが、それとて既に前にも述べたる如く敵の報告の樣な馬賊三千などといふ御大層なるものでないのは明かで、ほんの五十か百のものであつたらふから、先づ前揭の評者の想像の如く考へるのが至當である。果して然りとすればこれ實に極めて心細い編成である、何故なれば敵の騎兵に吃驚仰天せしむべき、最も大切なる砲兵が唯の一門もないではないか、

これが實に何よりの大缺點であるが。さりとて此樣な大膽なる計畫をする場合に、重量頗ぶる重くして運動快速を缺く野砲を之に附屬せしむることは出來ず、騎砲兵は僅に一中隊しかないのであるからこれも手離してやる譯にはゆかず、實に大に遺憾であるが之を携行するのを斷念したのであらふ。果して然りとすればこれの代りとして機關銃でも携行するの外はあるまい、然るにそれをも携行しなんだのは遺憾千萬である。騎兵總員が約二百足らずでは、百内外の小銃しか火戰に用ゆることが出來ぬ。さすれば此の騎兵團が歩兵一小隊の守備隊と戰を交へるには先づ支障あるまいが、それ以上の兵力を以て守れる地は容易にこれを侵し難い。然るに敵は諸所に約二三百の歩騎兵を配布して居る、斯の如くんば稍大なる部落や又は停車場などは、到底これを擾亂せしむるの手段を取るのは不可能である。であるから挺進は少數が有利とはいふものゝ程度がある、此場合に此兵力では實際寡少に失して居ると評者は思ふ。併し一方から考へて見ると秋山支隊の全騎兵が二十三中隊しかないのである、それが歩兵三個大隊、砲兵二中隊、工兵一大隊と協力して約五里に亘る線を守備して居るのであるから。過大な兵力を此の中から拔き取ることは出來ぬ、況んやこれ一個で挺進を止めるのではない、同將軍の考へでは場合によれば續々と同一手段を連發し樣といふのであるから、此の位の兵力で我慢するの外はなかつたのであらふが。自分の理想的の考へではせめては歩兵一大隊位の敵と對抗すべき銃數を火線に用ゆることを得るの兵力が欲しかつたと思ふ。勿論此の如き要求を入れた日には秋山支隊の全騎兵を出さねばならぬかも知れぬから、それは不可能であるけれども何分にもこれでは少し其力が微弱過るのは事實である。これでは到底敵の背後に大驚慌を捲き起させる資格がないと思ふ。然らば何程位のものを用ゐるがよいといふ意見かと問はるゝ人もあらふが、それは評者の考では彼の魯將バイゴウの說を最も至當とする。即ち彼は騎兵一旅團を以て適當と唱道したのであるが、是實に使用しよく駈けまはり易く最も手頃ではあるまいか。これに騎砲兵一中隊を附けたとしたならば、隨分と大なる後方交通線の大關節に打擊を與ることが出來樣。即ち騎兵は二個の佐官より指揮せられる八個中隊より成立するので、其將校の數も相當に多くあるから、これを分派したりこれを殘置

したりするにも都合よく、又其の銃數も約千七八百あるのであるから、相當に威力ある徒歩攻撃も決行し得るのである。からして自分は必要以外に大兵力を用ゐぬがよいといふが、それでも餘りに少ないのも不利である、つまり我軍などでは騎兵が少ないから我儘はいへぬけれども、充分に有効なる挺進を行なはしむるには少なくも一旅團を使用するがよいと考へるのである。

但し前論は自分の理想的希望であるが、此の場合如何にもがいても苦んでも何として其樣な贅澤が出來樣や。即ち騎兵二中隊内外でも容易ならざる苦心の結果に、これを各隊から集め得たのであるから、我軍の此場合の現況より推せば、これ實に是以上には出せなんだかも知れぬのであるから、不利であつても實に致し方はないのである。が評者は其場合がこれを許したならば約騎兵四個中隊位のものを用ゐたかつたと思ふ、これ位のものがなければ各地に散在する敵守備兵を到底打ち破ることは出來ぬではないか。バルク少將の說の如く「一定ノ目的ヲ以テ大企圖ヲ實施スルニハ、時ニ成功ヲ收メ得ル事アルモ、概シテ

小部隊ハ之ニ適當セズ」といふたのは、一面無理のない議論であつて大に參考とすべきものであると、評者も全く同意する次第である。

更にこれより少し遲れたる長谷川少佐の挺進隊の如きは、其兵力が二中隊以下であつたらしいのであるから、此の兩挺進隊の兵力は全く寡少に失して居ると評者は斷定するが。「時ニ成功ヲ收メ得ル」とバルク氏がいふた如き好運に挺進が運んだので、我軍の爲め大なる貢獻をなし得たのであつて、決してこれを例とすべきものでないと評者は思ふ。であるから此兩挺進隊の出發に方つての處置に就ては

一、將校斥候を放つて挺進準備をなせるは頗ぶる適當なり。

二、挺進の目標を長春以北に選定し、敵の大兵力を遠く後方に牽制せんと企てたるは最も可なり。

三、進路を遠く西方に執り、全く敵の不意に出づるを謀りたるは至當なり。

四、其兵力を二中隊内外とし、これを各聯隊より集成せしは其場合全く已むを得ざりしに出づと雖ども、其兵力寡弱にして且つ精神的統一を破るの害

あり、故に騎兵一聯隊に騎砲一中隊を編合して派遣せざりしは最も遺憾なり。

先づ以上の四項で結論を與へて、さてこれから兩挺進隊の挺進實行に就て研究することにし樣が。我が此の永沼第一挺進隊が愈〻一月九日豫定の如く、集合地なる蘇麻堡を出發し小北河の西南蝎蜡庶を經て、十日小北河西南五里の轉柚子に至りし時。敵の騎兵大兵團が營口へ向つて南進せしを知り、得易すからざる好時機に投じたるを喜こんで、其の大兵團の出拔けた跡へ巧みにうま〳〵と北進の歩を向はしめた。此の場合此の騎兵大兵團の南進の爲めに躊躇せずして、却つて其虛を利用して北進を始めたる永沼中佐の處置は、實に最も大膽にして且つ根據あり、評者は大に同意するに躊躇せぬ。此の樣なる機會をとり逃がさぬ樣に始終心を配らねば、挺進などゝいふ冒險事業は到底成功するものでない、此の一機會をとらへ得たのが抑〻の此の挺進の成功の基礎であつたと評者は信ずる。それにしても實に不思議千萬ではないか、敵は十一月頃から仕度をし、又我軍に於ても昨冬十二月下旬から準備をして居た挺進が、偶然とはいへ電話か

何かで充分に申合せをした樣に全く一日の相違もなく、三十八年一月九日に於て一は集合地たる四方臺を、一は同じく蘇麻堡を出發したといふのは。何だか天公が惡作戲で繰つり人形でも使ふ樣な、彼の青天井の上から絲を引いて居るのではないかと、頗ぶる奇異に感ずるのを止め得ぬのは評者而已ではあるまい。が此の偶然の奇遇を我が永沼挺進隊は、少しの油斷もなく直ちに利用して。敵が自己の大騎兵團を南進さした即日に、其の同じ方向から我挺進隊が進入し樣とは、先づ大概なる邪推家でもそこまでは氣をまはし得ぬ。其虛をはづさずしてずつと思ひ切つて北進を始めたのは、確かに永沼中佐の大慧眼であつて大手柄である。單にそれ而已でない我が永沼中佐は、敵の挺進隊が自軍の背後へ潛入したるを確知して、敵の背後へ進んだのであるから、敵を知り己を知るといふ兵法の奥義をしつかり握つて居るが。これに反して敵の挺進團長ミシチエンゴ中將は、我れに其樣な計畫ありとは少しも知らずに、頗ぶる悠々閑々と南進したのであるから。此邊にも大分挺進的豫備作業に日露兩軍間に大なる差異が見へるのは、何人もこれを首肯する所であらふ、去るにても實に不思議なるは

出發日の偶中である。

さて第一挺進隊は遠く遼河西方を北進して、途中本軍との連絡の爲めに一部隊を要所に殘置して、約一ヶ月の間蒙古地帶を潛進して二月九日に長春西方約二十三里の拉々屯に達したが。これ迄の間に通過したる土地に於て至る所に於て、大砲的の大法螺を吹き立て、其恫喝虚勢を以て極力其兵數の不足を補なふに努め。巧みに流言蜚語を放つたのであるから堪まらない、左なきだに露軍中にも凡愚等の親玉として知られたる、後方守備の總大將後黑龍江軍管區司令官チチヤゴフ中將は。まだ實際其日本騎兵の一人をも見ざる中に、全く左の如き大袈裟なる我挺進騎兵隊の空恫喝を眞にうけたのは、馬鹿らしくも亦氣の毒の至りであるが、これ蓋し我虚喝のみの爲ではない、彼が常に大兵力を挺進に用ゆる舊慣に過まられたものといふを憚らぬ。

『長春西北約十八里の伏隆泉には馬賊千餘人あり。營口西北二百餘里の照烏達に於ては、蒙古諸王族と日本との協約成立して、日本より教官たる士官と小銃五千挺を送り日本的馬賊の訓練をなして、露軍の背後を脅威せんとするものゝ如く。賓圖王府に日本軍の馬賊六百餘、新民府に約一千あり。而して其一部は日本兵一百馬賊四百より成り、二月七日蒙古境界なる哈拉巴山附近に達し、鐵道破壞の目的を以て公主嶺附近に集合中にして。更に其他に新集廠にも日本兵二百馬賊三百あり』

といふ情報を得たのであるが、例の蒙古王族と我軍との協約などゝいふことは全く例の痕跡もない大恫喝であるが、併し哈拉巴山と新集廠なる日軍支隊は、確かに我が此の第一及第二挺隊を指したものであつて。それは殆んど彼が偵察して得たる兵力と、大なる差異はなかつたのであるが。其後に至つて寛城子(長春)停車場守備隊長は、日本軍馬賊五百新集廠にありて、公主嶺附近鐵道破壞計畫中なるを報ずるあり。更に蒙古搜索隊として二月十日に長春から出したる、レニツキ大尉の騎兵三中隊、砲二門の搜索隊の將校の報ずる所によれば、

『開原及昌圖の間の高地に於て、日本軍馬賊一萬編成せられたる模樣にて、彼等は爾後盛んに露軍鐵道及經理部倉庫を破壞せんとす』

といふ樣な滅法界なる大法螺が飛び込んで來たものであるから、彼れチチヤ

コフ中將の狼狽は頗ぶる見物であつた程の有樣で。上下一同風聲鶴唳日夜電報を頻發して、クロパトキン總司令官に向つて其增援軍の派遣を急請したのである。

然るに丁度其前後である二月十二日に、永沼挺進隊は長春西南七里にある新開河の鐵橋を、戰史第七卷第四章三七六頁に詳記する如く極めて巧みに破壞したので、『それ一大事と』其周章狼狽の度は殆んど絶頂に達したのであつた。此の破壞に對する永沼中佐の處置は頗ぶる巧みに適當に計畫せられたと評者は思ふ。同挺進隊は最初計畫した如く例の長春北方三十里の窰門河の大鐵橋を目ざしたけれども、これには實に少なくも中隊以上大隊位の守備隊が居るといふ風說なので、到底現在の騎兵二百足らずに馬賊隊百や二百の兵力では、此の守備隊を擊破して鐵橋破壞を成就するといふ見込がたゝぬ。即ちこれが先に評者が編成に不同意を唱へた所の、兵力微弱に過ぎたる缺點は此の大事の瀨戸際に至つて、遠慮なく發現して來た次第であるが。去りとて躊躇逡巡して居れば、兼て本軍と約束して來た一月下旬から二月初旬の間に於て、實行すべき鐵道破

壞が遷延して本軍との豫約に背くのであるから、永沼中佐も非常に心配して見たが到底例の豫定目標の破壞は不可能であると見切りを付け。終に意を決して此の新開河が頗ぶる其守備兵が寡少であり、且つ潛行に極めて都合がよいといふ所から、少し初旬よりは遲れたけれども、此の二月中旬の初めたる十二日の夜に於て、愈、鐵橋破壞を斷行したのであるが。其の準備から其實施から極めて適當に實行せられたと思ふ。固より窰門河鐵橋を目標としたのは、先づ此邊に於ける著名な破壞しよいものを目標としたので、必ずこれでなければならぬことはないのであるが。一方本軍と約束して來た破壞時期たる、一月下旬か二月初旬といふ期日は、必ず本軍の方ではこれを幾分心當てにして待ち居るべきは必定である。然るにこれを稽緩したる場合には、如何に我滿洲軍の攻勢移轉の方に大なる手違を起させるかも知れぬのである。これ實にゆゝしき一大事であるのであるから、よしや多少其場所が重要なる破壞點にあらずとも、速にこれを決行して敵の荒ら膽をひしぐと共に我本軍の爲めに其計畫に齟齬を來させぬ樣にせねばならぬ。此の理由からして躊躇せず永沼中佐が新開河を破壞點と決

定したのは同感である。況んや此の橋梁が相當に重要なる點であつて、且つこれに近接するに容易なる而已ならず、此附近に於ては此所が一番守兵の少なくして下士が其守兵の長であるといふのが、頗る付け込み所であつて挺進隊の爲めには大好都合であるから、即ち斷然此所に破壞點を決定した。併し其破壞の決行の日を我が神武天皇御即位の當日なる、我國三大節の第一に推すべき紀元節に選んで、此日を以て、敵の心膽を寒からしめんと企てたのは、斯く迄遠く敵中に深入りして意氣兎角に萎靡し易い場合に於て、神明の加護を信頼する人心の幾微を洞察したる、實に古名將の志氣激勵作興の眞諦を會得したるやり方であつて、其の破壞點も其決行の時日も共に其選定に就ては、實に一點の申分がないのである。

更に其實行に方つて先づ破壞點に遠からざる袁家屯に於て、殘月西に沈み四顧暗澹たる時に於て、手馬の掩護から諸破壞の手筈迄殘る方なく順序を定めて、別働隊たる橋口馬賊隊長は其部下を引率して懐家屯附近の露兵哨舍を襲撃し、南方より進來すべき增援兵に豫め備ふると共に、此處にも少なからざる破壞を

決行せしめ。挺進本隊は香房北方から新開河の河床中を作業隊を進ましめ、其騎兵を二隊として一隊を右岸一隊を左岸に置きてこれを掩護し。永沼中佐の挺進隊本部は右岸の掩護隊と同行して、枚を銜んで肅々として新開橋の鐵橋に向つたが、此の手筈萬端評者は少しも遺漏なしと考へるのである。殊に南方へは有力なる馬賊隊を出し、南方范家屯停車場の守備兵の來援に備へ、北方には挺進隊長自かち其掩護隊を率ゐて、窩門河方向の敵大守備兵の來援に備へた注意は、頗ぶる評者の意を得て居るのであるが。併しこゝに一つ評者の最も遺憾に思ふことは、不意に起つて極めて少數なる鐵道守備兵を掩撃するの手筈が狂ふて、彼れ等を堅固なる守備石造舍中に籠城さして仕舞た爲めに、田村少尉以下數名の戰死を出す而已ならず、彼れ曹長の指揮せる二十足らずの守兵の爲めに。作業隊の破壞作業も敵彈の下に於て實施せねばならぬ樣な羽目になり、勇敢殆んど超人的なる宮内參謀や小堤少尉の沈著を極めたる注意によりて、破壞作業の點檢や不充分なる作業のやり直しをやつたに關せず。其破壞が十二分の効を奏して橋桁を倒壞し得る迄に至らなんだのは、栗田少尉の作業班が破壞のこと

に稍、熟練を缺いたのが其の原因ではあらふが、要するにこれ最初に於て新開河右岸を進んだ掩護隊の鐵道守備兵舍の掩擊に於て、確かに餘りに敵を侮り過ぎたる結果であつて。若し巧みに敵の不意に乘じて守兵を掩擊して殲滅するか、若しくはこれを驅逐して散亂せしめて仕舞たならば。大に沈著して此の破壞を實行し得て、敵の交通に對して頗ぶる大苦痛を與へ得たであらふに、僅かに二十時間內外の交通を遮斷しただけに終つたのは、如何にも殘念千萬であつた。此の場合此の守備兵を少數の我斥候の如きものを以て、巧みに其兵舍外におびき出してそれが追かけて來る所を、不意に多數の掩護隊を以て之を掩擊し盡すか。又は驚駭せしめて遠く潰亂せしむる樣にするか。或は又竊かに兵舍に近接して其不意に乘じて彼等を悉く捕虜にして、其後に於て落ついて作業をやる樣にすれば申分はなかつたと思ふ。但しこれは評者の望蜀の聊か無理に近い希望であつて、先づ〳〵これだけでも大手柄である、不知案內なる地形特に敵中に於て、これだけのことをやるのは中々容易な膽力や覺悟では到底出來ぬ。それを兎に角これ迄にやり遂げたのは實に大なるお手柄であるが、慾をいへば今少

し守兵を巧に掩擊して充分に破壞をやり遂げたかつたのであつた。此の破壞の場合に於て手馬を掩護する任務に當つた人々が、爆聲の爲めに馬の驚擾奔逸せんことを豫め慮ばかつて、これを悉皆圍墻ある土民家屋の庭內に入れて、其門を閉鎖して置き。其爆聲を聞くと共に直ちにこれを門外に出して、速に其退却の準備をしたのはこれ實に用意周到なる致方であつて。此の樣なことは少しく注意を怠たると、必らず忘れ勝ちになるものであつて、それが爲めに大不利益を招くことになるのは、此れより後に於て研究する第二挺進隊の失策でも明かである。此の樣に萬事に注意が行き屆いた爲めに、此の破壞は先づ〳〵目的の大部分を達成したのは、實に永沼中佐殿の大手柄であると、評者は頗る同君の膽氣と熱心に深く敬服する次第である。

此際此の范家屯停車場北方一里半にあつた新開河の鐵橋を守備して居たのは、北淸事變に於て驍名ありし「ゲオルギー」勳章の佩用者たる露軍步兵曹長ハリマンといふ男であつて、敵ながらも頗ぶる勇敢なる行動をしたのは實に健氣なものである。彼は其部下四十名の中約半數を范家屯停車場に置き、更に若干の

斥候を橋梁の附近に潜伏せしめて。自身は其殘り十八名の兵と共に、橋梁の北の橋詰にある石造兵舎に休憩して居たのであるが。十二日午後三時半頃我軍の右岸掩護隊約一中隊が接近したのを知つて、例の潜伏斥候が射擊を以て急報したので、それ敵襲とばかりに何れも武器を執つて門前へ飛び出すと。最早日本兵は七八十名許りで其古枕木で作つた圍墻の邊に迫つて居る、曹長の氣轉で門を閉ぢんとしたが、それは咄嗟の間に合はず、一同兵舎へ逃げ込んで家屋内で防禦する。日本兵は其煉瓦壁外まで逼迫して、其の窓から銃口をさし込んで無暗に射擊するといふ大亂戰。此時例の元氣無類の田村馬造少尉は、自分の帽子の上から手拭で頰かぶりをして、帽子を落とさぬ用意をして我掩擊隊の先頭に立ちて、無敵にも兵舎の窓から敵中に飛び込んとしたので、中から第一番に射擊されて戰死したが。我が掩擊兵はこれが爲め顏ぶる指揮の統一を缺いて仕舞て、終に敵を全滅すること能はずして退ぞき。漸くにして兵舎より突出するの隙を得たる曹長は、直に部下を率ゐて門外に出でゝ。今や橋梁を破壞せんとして必死に作業しつゝある、我栗田博愛少尉の作業班に向つて烈しく猛射を浴せたので、作業全く意の如く行なはれざるに立ち至つたのであつて、此の田村少尉の突進が餘りに極端に無鐵砲過ぎたので、彼等をして驚慌の極餘儀なく兵舎に據るの原因となつて、それが却て彼等に大なる利益を與へたのであるから、守兵は過ちの功名をしたといふが至當であるが、一面確かに此の曹長は「ゲオルギー」勳章の佩用者に恥ぢぬ勇士であつたのは事實らしいのである。戰史の記述する所によると此處の接戰は頗ぶる見物であつたらふと、評者は壯烈なる有樣を想像して其勇ましさに肉動くを禁じ得ぬのである。

斯くて先づ相當なる約十七時間の交通止めの事業を成功した報酬として、將校一名卒二名の戰死と、將校二名通譯一名兵卒七名の負傷と、兵卒二名の失跡とを生じて、合計十五名の損害即ち約挺進隊の十分の一に近い事故者を以て、此の一大壯快事をなし遂げ。十二日午前六時三十分袁家屯を出發して、悠々として三道河に引きあげて、此處に約三時間の休憩をなし、更に出發蓮花山を經て十三日早朝八寶湖に達したが。此の一活動は露軍後方に大々的大驚慌を捲き起して、チチヤゴフ中將などの喫驚のし方は法外至極で、殆ど日本軍數萬が天

から降つて來た樣な騷動を始め。クロパトキン大將に向つて間斷なく救援を求めて、其報告の誇大なる實に如何に其擾亂の甚だしかりしかは、これを見ただけにても明らかに知れる程である。市に三虎の世の諺曾參人を殺すといふたる言も、度重なれば終には事實かと信ずるが如く、流石の名大將クロパトキンも此の我が挺進隊の一擊に、非常に後方に鬼胎を抱くに至つたのは、露軍の爲めには神佛にも見放なされたる不運であつて、我軍の爲めには實に天祐とも神助とも稱すべきであるが。此の天祐も神助も決して自然には降つて來ぬのであつて、つまり秋山支隊の騎兵本能的冒險なる企畫と、永沼中佐の大膽至極なる行動が、終に此の天祐を招き降したといふのが至當であつて、評者は此の一破壞の功能は本戰に於ける一旅團や、一師團の奮戰に幾倍すると考へる。それ程の大事業を僅々將校以下十五名の損傷を以て購がひ得たのは、實に廉價至極なものであつてこれ全く、此の挺進に從事したる永沼騎兵部隊の將校士卒及馬賊の熱心と努力と勇武とによると信ずる次第である、『嗚呼健氣なる騎兵諸君の振舞ひかな』と双手をあげて賞贊の辭を惜しまぬのはこれが爲めである。

永沼挺進隊は八寶湖に於て他の日本騎兵の昨十二日新集廠に到著したる報を得たので、これぞ間違ひもなく長谷川第二挺進隊と判斷して、此夜これと連絡を通ずる爲に佐久間中尉を派遣した、がこれは終に彼れ第二挺進隊と相遇ふを得なんだ。一方この十三日に於て長春方向から敵騎の我挺進隊附近に到著したる報をも得たので、中々油斷して居れぬ。非常に警戒を嚴にして十四日の未明に八寶湖を出發して、新集廠に向つて行進したが。同日午後四時頃柏家窩棚附近に於て端なくも俄然敵と衝突して、非常なる大激戰を交へたが。其の戰況は戰史第七卷第四十四章三八一頁に詳記してある如く、寒月皎々として中天に懸かれる蒙古の荒寥たる荒野に於て、兩軍騎兵の精鋭の接戰は實に目ざましきものであつて、讀むに壯快の氣紙表に溢るゝを覺へるのであるが、此の戰鬪は頗ぶる自分は挺進隊の爲めに不利であつたと考へる。何故なれば此の敵騎兵たるや先に長春停車場に於て、レニツキー大尉指揮の下に編成せられたる、護境哥騎兵第十六、第十七中隊及第四十七、第三十五の各半中隊、即ち騎兵合計三個中隊と外に騎砲二門から編成せられて、二月十日に出發して此の挺進隊討伐に

向つたのであつて。其八寶湖西南五六里の地に百騎及楊家屯に百七八十騎到著したのは、既に八寶湖に於て永沼中佐は聞いたのであるから。此の挺進隊たるものは此處を昨今第二挺進隊が通過したらしい、彼の新集廠に向ふて進むのは頗ぶる無謀であつて。自分は寧ろ思ひ切つて敵の意表に出てゝ、農安か又は伏隆泉の方へ北進して、其途中から急に西方に轉進して其踪跡を晦ますべきであつたと思ふ。然るに其策こゝに出でずして彼の鐵道破壞點から、眞西に向つて退避したので敵の爲めに其進路を遮ぎられたのであつて。これ實に挺進隊の進路の選び方としては、頗ぶる智惠のなさ過ぎたる進路選擇のし方であつたと思ふ。而して此夜の戰の最初に於ても敵は頻りと我れを避けて退ひたのであるから、挺進隊は勉めて大正面を占めて我に大兵力のある如くこれを大に威嚇するに止めて。眞面目の戰鬪を交へて砲を分捕したり、又は敵の後衞に襲擊を決行したりする樣な、勇敢ではあるが無謀極まる決戰を交へずして、其の兵力を事實よりも數十倍にも數百倍にも見へる樣に、巧妙を極めて使用して益敵に驚怖心を增大せしめたならば。無論それは壯快でもなければ、又實際面白いことも

向つたのであつて。其八寶湖西南五六里の地に百騎及楊家屯に百七八十騎到著したのは、既に八寶湖に於て永沼中佐は聞いたのであるから。此の挺進隊たるものは此處を昨今第二挺進隊が通過したらしい、彼の新集廠に向ふて進むのは頗ぶる無謀であつて。自分は寧ろ思ひ切つて敵の意表に出てゝ、農安か又は伏隆泉の方へ北進して、其途中から急に西方に轉進して其踪跡を晦ますべきであつたと思ふ。然るに其策こゝに出でずして彼の鐵道破壞點から、眞西に向つて退避したので敵の爲めに其進路を遮ぎられたのであつて。これ實に挺進隊の進路の選び方としては、頗ぶる智惠のなさ過ぎたる進路選擇のし方であつたと思ふ。而して此夜の戰の最初に於ても敵は頻りと我れを避けて退ひたのであるから、挺進隊は勉めて大正面を占めて我に大兵力のある如くこれを大に威嚇するに止めて。眞面目の戰鬪を交へて砲を分捕したり、又は敵の後衞に襲擊を決行したりする樣な、勇敢ではあるが無謀極まる決戰を交へずして、其の兵力を事實よりも數十倍にも數百倍にも見へる樣に、巧妙を極めて使用して益敵に驚怖心を增大せしめたならば。無論それは壯快でもなければ、又實際面白いことも

永沼挺進隊月下ニ激戰ス

九十九道人石原白道畫

ないけれども、挺進の効能としては非常なる大好果を收め得たに相違ないのである。然るに永沼中佐を始め選拔されて挺進隊に加はりし連中は、實に向ふ見ずの命知らずの猪武者が多いのであるから、敵と一度戰を交へて彼が退却をするのを見ては、最早面白くてこたへられぬので何としても更に策略を運らして彼を更に〳〵大に驚駭せしむるといふ樣な、巧妙なることをして居るのが手緩るくて齒痒ゆくてならぬので。勢に乘じて其退路に迫つたる中屋大尉の部隊は、何千米突も急驅追擊して敵の砲を奪ふといふ樣な大接戰をやり。又一方淺野大尉の部隊も敵が退却掩護の爲めに殘さんとして居た後衞に向つて、其力をも顧みずして遮二無二大無謀なる襲擊を決行したので。こゝに月下で槍と刀でなみ足の大搭闘をやりはじめたのは、これ實に近來絕無の好戰爭畫題を遺したのではあるが、顏ぶる永沼挺進隊の爲めには不利であつて。爲めに敵には非常なる大打擊を與へたけれども、味方も亦極めて少ない挺進隊の人員を五十人近く損傷したのは、實にこれ餘りに勢に乘じ過ぎたる顏ぶる拙なるやり方であると評者は思ふ。

但し此時此の挺進隊の攻擊が非常に猛烈であつた爲めに、敵の騎兵三中隊と砲二門は殆んど散々に打ちなされて、終に砲一門を我挺進隊の手に奪はれて命から〴〵退却して、我が此騎兵を歩兵四中隊、騎兵四中隊、砲四門と、外に馬賊隊三千餘人の有力なる支隊である如く報告して居る。これが爲め敵は愈此の方面に侵入したる我が騎兵を重大視し始めたのであるから、此の點から考へて見ると此の戰も決して無益ではなかつたが、兎に角挺進隊が眞面目の戰鬪を交ゆるといふことは、何れの場合に於ても決して至當でない。況んや此場合の如きは全く退路を閉がれて一條の血路を開くといふ樣な場合ではない、敵は最初から我を大優勢と見てとつて退却しつゝあるのであるから、前後左右からこれを脅威して、非常な大兵力の居る如く見せたならば、挺進隊が追躡を受けて危險に瀕する患もなく、敵をして更に〴〵大騷動をさせ得たのであるが、餘り勇氣を振ひ過ぎたので非常な高い代價を拂つたのは殘念であつた。僅々將校の數が十人前後の此の挺進隊は、此の一戰に於て小堤少尉と淺野大尉を失なつた上に、可惜下士卒十七名は戰死して仕舞ひ。負傷者としては佐久間中尉及川中尉

沼田少尉の三人と下士卒四十一名といふ多數であるから、戰死は一〇%强であつて負傷は二六%に當り。總損害は鐵橋破壞の際のものを加へて、殆んど挺進隊の約略半數といふ大多數に達したのである。これ決して廉價なる支拂とは認め能はぬのみか、これが爲めに頗ぶる今後の活動力を減殺したのは爭そはれぬ事實である。からして評者は騎兵の挺進の如き冒險任務に當つたものは、十二分ではいけぬ十四五分に警戒して敵と不意に衝突せぬ樣にするは勿論、若し敵と相接著しても策略を以て彼を驚かすを專一とし、急場の危險を脫する樣に窮地に陷つた場合の外は、可成眞面目の戰鬪を避けるがよいと思ふのである。但し此戰に於て敵は將校一、卒二十七を失なふたといふが、其負傷の數が不明瞭であるので、全損害は知れぬけれども我軍よりは多くはなかつた樣に考られるのである。

既に以上の如き多數の怪我人を作つたので、此夜から翌十五日にかけて戰場を掃除して、內田少尉の部隊に負傷者を護衛させて先行せしめ。比較的傷の輕いものは何れも傷を包んで、平氣で今一戰やらんものと馬を馭して行くといふ

有樣であつたが。同夜新集廠へ到著して此所に一泊して、最早到底此附近では仕事が出來ぬと考へたので、全隊を率ゐて歸途に就いて二月廿八日後五家子に著したが。此附近では我が此の挺進隊の背後脅威が効を奏して、非常に大なる兵力を有する敵兵が、此の方面に出動しつゝあるを知り大に滿足すると共に、非常に其の退路が危險なので愈〻警戒を倍加して、三月三日既に奉天會戰が始まつたとは夢にも知らず、連絡の爲め途中に殘置したる部隊と出會し、此に始めて黑溝台大會戰のあつたことを知つて。更に一日間退却して二月廿七日から奉天會戰が始まつたことを知つたのであつた。

此の報に接したる永沼中佐は此の會戰の最中に於て敵の退路を脅かし、以て此の挺進隊の掉尾の大破壞を決行せんと決心して、こゝに左の如く三部隊を分進せしめることにした、即ち

中屋大尉部隊　開原、双台子間鐵道破壞
宮内大尉部隊　双台子、以北鐵道破壞
沼田少尉部隊　開原附近の電信、鐵道破壞

これ等の諸隊は非常なる決心を以て、奉天會戰の最中たる三月六日を以て、勇ましくも敵の背後近く突進したが、永沼中佐は負傷者や其他のものを引き纏めて、更に本軍の情況を知つて爲す所あらんとして、三月七日新民府に向つて歸還したが。前に掲げたる三部隊は巧みに敵中を潛行して、四平街、沙河子、廟子溝等の停車場附近に於て、奉天會戰は愈〻敵の敗北と決定して、非常なる大狼狽を以て退却を始めたる、九日十日十一日の間に於て連續破壞を決行したので。左なきだに志氣沮喪せる敵兵は、これが爲めに非常なる驚慌を來したのは事實であつて、此の最後の破壞作業は實際上の損害は大したことはなかつたが、敵の志氣上には非常に大なる打擊を與へ得たのである。

斯の如くにして永沼中佐は奉天西北の大石橋に於て、三月十三日本隊に歸還し、其他の三部隊は中屋大尉全部を率ゐて三月二十日大石橋に到著したが。此の挺進隊は實に敵中にあること出發以來六十八日間にして、其踏破せる里程も日本里程四百二十里を下らぬといふことであつて。其行動がこれに次げる第二挺進隊の行動と共に、如何に露軍の心中の平靜を失なはしめて、我軍の攻勢移

轉に大利益を與へたかは、更に第二挺進隊の研究を終つた後に於て論ずるつもりであるが。其行程の四百里は古來類のないこともない樣であるが、二ケ月以上も敵中に潛伏活動したといふ挺進は、蓋しこれ世界の騎兵挺進の「レコード」を破ぶつたものなるは確實であつて。如何に永沼挺進隊の堅忍にして且つ勇敢であつたかは此の一事でも知れると思ふ。さてこれからは更に第二挺進隊たる長谷川戊吉少佐の挺進に付いて研究の歩を進め樣。此の第二挺進隊も其行程は四百里以上であつて、其行動日數も六十餘日を費やして居るから、此點に於ては第一挺進隊と殆んど同一なる勇敢なる行動をしたのである。

此の長谷川少佐の指揮したる第二挺進隊は、一月十二日に編成を命せられて三日間に編成を完了すべき手筈であつて、其兵員は騎兵第三、第六、第九、第十一、第十三、第十四の各聯隊から、精兵を選拔して編組したのであつて。聯隊の數が六個であるから各聯隊から一小隊宛出せば六個小隊、又二小隊宛出せば十二個小隊であるが。此の隊の方が第一挺進隊より兵員が寡弱であつたのは事實であるから、多分は二中隊內外のものであつたらふ。その上十九日には騎兵第十一聯隊から來て居た騎兵を、原聯隊が鳴軍に所屬を變更した爲めに歸還せしめたから、結局此の長谷川挺進隊の人員は二中隊以下であつたと見るが至當であると評者は思ふ。かくて此の挺進隊は其發令の三日後に於て、即ち一月十五日の午後五時三十分に創台子に集合した。當時津川支隊は牛莊西方に於てミシチエンゴ騎兵團の歸路を擁して、これを北方に擊攘したがそれは一月の十四日で、まだ敵騎の一部分が大台附近を退却中である樣なので、長谷川少佐はこれが背後を脅威せんとして、十六七の兩日老鶴坨の附近まで前進したが。其前後に秋山少將から急速準備を整へ出發すべき命令を受けたので、先に營口方面に前進したる大敵騎兵團の悉皆北方へ退却したのを確めたる上、一月十九日午後一時三十分愈〻創台子を出發したが。途中敵の視目と注意を避ける爲めに、遠く西方を迂回潛進して、二十三日間を費やしたる二月十一日に於て、始めて蒙古堺の少衝衝に到達して愈〻これから目的の實行に著手した。由來此の第二挺進隊は遠く北方に向の敵の背後深くに活動する筈であつたが、此の附近に至れる時に於て諸方面に敵兵及敵の馬賊の散在警戒し居るを知り。先づ取り敢へず

此の少衛衛の土民の言によりて、其詳細を知り得たる張家屯停車場西方約十里の農安附近に至り、更に敵の鐵道守備の情況を偵知したる上、此邊に於ける鐵道線に破壞を加へたる後、再び遠く北方に向つて松花江以北に活動せんとし。其手始めとして農安方向へ二月十三日を以て出發したが、當時積雪頗ぶる深くして馬脚を沒し、非常なる困難を冒しつゝ、晝休夜行して農安北方約五六里の秦柴崗に達して。此地から約十里東北方にある四馬架の鐵橋を破壞せんと決心し、此の秦柴崗で諸準備を整頓して日は蒼然とくれかゝれる、午後の六時に勇ましく出發したが、地理頗ぶる不明なる上に、夜色非常に暗かりしが爲めに路を失なふて、同地より遙か南方の張家油房へ迷つて行き。更にそれから方向を變へて郭家屯にたどり付いたが、まだ此所から四馬架迄は七八里あるのに、夜は既に十八日の午前一時半となつたので。到底夜の中に該地までは到著出來る望みがないのみか、該地には一中隊以上の守備兵が、近頃配置せられたことを、此の郭家屯で聞知して到底これに達して破壞を企つることの不可能なるを察して。更に其南方三里餘にある張家灣停車場附近に出でゝ、長凹道をなせる部分

に大破壞を決行することに計畫を變更して、午前三時過ぎ張家灣停車場北方約半里の地に達し。そこで其隊を二つに分つて一隊を以て破壞に從事せしめ、他の一隊を張家灣停車場の守備隊の來り妨ぐるものに備へ。約四五十分間を以て鐵道三ヶ所と電線とを破壞し、其爆聲の起ると直に敵に先を越されぬ樣に例の掩護隊は停車場に向つて猛烈に射擊を始めたが、敵は我が勢に呑まれたか少しも之に應射せずして、例の信號火の棒が糧耀として明滅するに過ぎぬので、敵と相接することなく速に退避して、其西北方約三里にある馬家城子に到著したのは午前七時であつて、ここに暫時の休憩をして人馬の疲勞を休めたが。此の破壞は遺憾ながら頗ぶる不充分なるやり方であつたと評者は思ふ。始め秦柴崗を出發する時に此の長谷川挺進隊は四馬架の位置を充分に知らなんだらしい、それが不知案内の夜中に於て潛進してこれを見付け出さうといふのであるから、此は實に難中の難事であつて路を失なつたのは當然である。若しも郭家屯に到著して到底今夜中には四馬架へ著き得ぬと知れたならば、更に一日を延ばして翌夜に於て四馬架を襲ふのも一方ではあるが、敵に近いこの邊にうろ〳〵して

居ては敵の包圍に陷る恐れがあるから、已むを得ず其破壞點を更に張家灣附近の凹道に變更したのもよいが。今少し其の破壞の程度を重大にして敵の交通に大支障を與へ、更に其勢に乘じて停車場を襲ふて彼守備兵に大狼狽を起させて、敵が非常に恐慌して停車場を死守する隙に乘じて遠く北方に退避したならば、思ふに敵を驚かすこと容易ならねものがあつたであらふ。それを僅々三四十分間に鐵道にほんの少しの破壞の跡を殘した迄で直に退却したのは、何となく自分は物足らぬ樣に思はれるのである。但し此の長谷川少佐が思ひ切つて四馬架に向ふことの出來なんだ抑〻の根元は何かといふと、此の挺進隊の兵力は百二三十かたか〳〵四五十にしか過ぎぬので、四馬架に二百の守備兵あると聞いては何としても之を襲ふの勇氣が出ぬのは尤千萬な次第で。若し此の少佐に少なくも五六百騎と砲の二門も持たせてやつたならば、思ふに夜が明けても日が暮れても少しもこれに頓著せずして、大々的に四馬架の鐵橋を破壞するに勉めたであらふ。然るに兵力が微弱である上に十二日夜に於ける永沼中佐の新開河の破壞以來、敵が橋梁といふ橋梁を非常に堅固に守備したので、小守兵しか居らぬ

ことをつき止めて出かけたのに、途中に於て其の兵力の增加を聞き、愈〻其目的を達するの困難なるべきを察して、終に此の樣な頗ぶる輕微なる破壞に甘んじて退却するの餘儀なきに至つたのは。其の兵力の微少が抑〻の原因であるはいふ迄もないけれども、長谷川少佐が秦柴崗出發に方つての注意と準備とが不充分であつたのが、これまた少なからぬ副原因をなしたのであるのは事實である。

但し此の破壞は極めて輕微であつたが、二月十二日新開河を破壞した敵は南方遠く退却したと思ふて居た矢先へ。又ぞろ此の十七日夜の破壞が其北方の張家灣に起つたので、例の大恫喝を全く事實であると考へて、松花江の二大鐵橋を少なからず懸念し始めて。更に一方蒙古地域は、我騎兵と我が馬賊隊とで充滿して居る樣に想像して仕舞た。これ蓋し其の破壞の程度は少ないが其及ぼしたる影響は決して小さなものではなかつたのである。更にそれから西方に退避せずして、馬家城子へ敵の斥候が追躡して來たに關せず、愈〻此地から北方に向つて松花江の南方支流を渡過して、二月二十一日午前六時には松花江右岸の深井に達し。二十二日午前一時には小城子——伯劫訥街道上の社裡站兵站を夜襲し

て、敵の背後に頗ぶる危險の大なるを感せしめたのは。前に行ふたる張家灣の鐵道破壞よりは、頗ぶる其効果が大であつたと評者は思ふ。

但し此の社裡站の夜襲の時に手馬を保護する注意が足りなんだ爲めに、兵站焚掠の火光に恐擾して奔逸したる馬匹が數頭あつたが、終にこれを悉く收容し得なんだので農馬を購入して其不足を補なふたが。この放馬が双隆門に退避したる二十三日に、跡をしたひ來れる土人の手によりて屆けられたので、頗ぶる危險の身に迫るを感せざるを得なんだ。其踪跡は到底晦ましをほせぬものとすれば、前後左右に大敵を控へて此地に居るのは危險の極であると考へて、長谷川少佐は終に更に遠く北進せんとしたる活動を中止して仕舞ふに至つた。これ蓋し此夜戰に於ける手馬保護の不注意が、延いて挺進隊の勇氣を沮喪せしむるの因を作つて。敵が非常に心配して居た大松花江の橋梁には、殆んど全く指を染むる能はずして退却せざるを得ざるに至つたのは殘念であつた。但し此の長谷川挺進隊の社裡站夜襲は、哈爾賓の敵大兵站に大驚慌を捲き起さして、爲めに非常に大なる補充兵を此の邊に下車せしむるといふ、大々的牽制の効を奏し

たのであるから。此の以上に危險を冒す必要がなかつたのであるけれども、挺進隊自身は今少し何か敵を驚駭せしめねば、確かに物足らぬ樣に思ふたに相違ないと自分は思ふ。斯くて長谷川少佐は四方よりする敵の大兵力の壓迫は、到底永く此の敵の前線より百二十里餘の背後に止まり得べからざる危機に近いたのを察して。三月三日は白市に三月四日は八面城西方十二里の積興窩棚に移り、こゝから東進して八面城、昌圖間に大破壞を企てんとせしが。敵の馬賊の附近に迫れるを聞いて、更に西方の西「シュルガ」に逃避して、此所で松村大尉をして挺進隊の大部を率ゐて歸途に就かしめ、自己は約二小隊程の兵を握つて此の地に踏み止まり。愈これから最後の大飛躍を決行せんと準備して居た三月九日午前十一時、忽ち敵から先制の利を占められて包圍の厄に遇ひ、巧みに其包圍を脱して一方に血路を開いて本軍に向つたが。此場合に於ける長谷川少佐の處置は頗る沈著にして要領を得て居る、即ち左に其概要を研究して見樣。

當時我本軍が大勝を博してゐるを知らざりし長谷川少佐は、九日夜此西「シコルガ」を出發して鐵道破壞に向はんと準備して居ると、例の風塵漠々濛々と

して咫尺を辨せざる八日午前十一時少し前に敵の一部隊は南方より進來して其兵力我に數倍するものあり。更にそれより少し遲れて其東方より又々一部隊近接して來たのを見て、此の分進挺進隊は圍壁を利用して防戰を始めたので、敵は容易にこれに近迫する能はずして、殆んど其大多數を下馬せしめて東西の高地に散開し、盛んに射擊を開始して漸次にこれに近迫せんとする。こゝに於て此の徒步戰部隊の近接せぬ中に其隊を整頓して、此の死地を脫出するより外に生の道がないのを知つた長谷川少佐は。直ちに命を傳へて半數宛交代に裝鞍せしめて、正午前後に於て大急驅を以て此の敵中を脫出した。此場合に於ける此の處置は、大膽に過ぐる樣には見えるが、九死に陷りたる此の小部隊は斯くする外には、全く處置がなかつたであらふと評者は思ふ。若し少しく時機を誤まつたならば、此所で此の長谷川少佐の部隊は確かに全滅になつたであらふ、それを五六人の損傷で脫し得たのは、此の大冒險の英斷のお蔭であると評者は思ふ。

以上兩挺進隊の活動は敵の背後に豫想以外の大騷擾を起さしめ、特に其の新

開河の橋梁破壞と張家窪子附近の激戰とは、我が第一挺進隊たる永沼中佐の騎兵をば、敵をして馬賊五千日本步騎砲約一萬の大兵の侵入なりと信ぜしめ、其飛報は敵の背後に非常なる速力を以て傳播せられ、チチヤゴフ中將の如きは滿洲鐵道の大危機に瀕せりとして、滿洲軍交通部長を經て騎兵一旅團、步兵二大隊、砲兵一中隊の增援を急請し。其第二挺進隊たる長谷川少佐の張家灣に破壞を行ひ、社裡站に不意の夜襲を決行して敵の糧秣を焚掠するや、敵は更にこれを以て哈拉巴山を中心とせる、日本兵一萬馬賊二萬の第一第二松花江の二大鐵橋破壞を企圖するものと誇大に誤認して。奉天兵站司令官及び輜重兵監其他各所の護境兵より、總司令官に向つて頻々として報告を呈するに至り、此に忽ちうま〳〵と我が秋山將軍の術中に陷つて仕舞ひ、今や奉天南方に於て大會戰の機日一日と切迫せる、極々大切なる天下わけ目といふ場合に於て。莫大なる兵力をこれが爲めに北方に分割せざるべからざる羽目に陷り、終に逐次に派遣せるものを合計すれば、驚くべし實に左の如き大兵力を後方警備の爲めに第一線より分割したのである。

歩兵十二大隊
護境兵四中隊
騎兵八中隊
哥騎兵三十四中隊半
補充兵約一萬人
重砲二十四門
騎砲十二門

斯の如き實にすばらしい大兵力を惜氣もなく後方に赴援せしめたのは、これ實にクロパトキン大將一生の不覺であると共に、永沼長谷川兩挺進隊の比類なき拔群の大手柄であつて、就中この兩挺進隊を驅逐せんが爲めに、敵の右翼遼河渾河附近を警戒せしめ置きたる、「ドン」哥騎兵第四師團其他の騎兵を此の要所からひき拔いて急遽後方に發向せしめた爲に、此の大切な敵の右翼は全く空虛に近く、殆んど我騎兵よりも少數なる騎兵が居るに過ぎぬ有樣となつた。そこを目がけて乃木第三軍が猛然として突進したので、敵は此の乃木軍の右翼繞

回運動を、頗ぶる時機の後れたる後に於て覺知するといふ樣な大不利に陷つて、こゝに奉天大會戰は全然敵の敗北に終つたのであつて、此の合計騎兵たか〳〵三四中隊に過ぎぬ二挺進隊は、實に日露戰中比類なき大光榮を我が戰史の上に赫々として輝かし得たのであつた。

敵に於ても其少數なる兵力を用ゐたる挺進は、何れも多小の成功を齎らして還つたのは事實であつて、三十八年一月一日敵の少數なる騎兵部隊は小北河附近から巧みに我背後へ潛入して、海城北方に於て鐵道橋の破壞をやつた爲めに、我軍は少なからず交通を妨げられたる上に、これが掃蕩の爲めに若干の兵力を該方面へ派遣せざるを得ざるに至つた。又ミシチエンゴ中將失敗の直後黑溝台會戰の直前である一月十八日から二十二日にかけて、北清事變に於て挺進に勇名を輝かしたる「テレククバニー」騎兵聯隊長ギルレンシミット大佐は、騎兵四中隊、乘馬工兵一隊を率ゐて我軍後に侵入し。巧に我が守備隊間を行動して一月二十日の夜に於て、海城河の鐵道橋を一小隊弱の我守備兵を擊退して破壞に著手し、悠々一時間半の作業をなして二十四ヶ所に綿火藥を裝し、四回の爆

破を以て美事に鐵橋に大破損を生せしめた。此隊は五日間に三百七十露里を踏破して、死傷人三十六名馬六十七頭に及んだが、爲めに我軍は數日間の交通を妨碍せられたのは人々の知る所であつて。露軍も上述の如く少數の騎兵を以て挺進した時には、毎回矢張相當なる効果を收めて居るのを見ると、これ蓋し明かに莫大なる騎兵を挺進に用ゐるの愚を無言の中に天が指摘教訓して居るにあらずして何ぞや。

讀者諸君既に熟知せらるゝ如く、敵は目に餘る七十二中隊半の騎兵を使用し、何等大なる妨碍を我が交通線や兵站に與る能はずして、其牽制し得たる兵力も僅に歩兵一聯隊砲兵一大隊に過ぎざりしに反して。我は第一挺進隊の約略二中隊を以て、十七時間の交通を杜絶したる而已か、其兵力を萬以上のものと誤認せしめ。更に第二挺進隊は僅々二中隊弱の兵力を以て、兎にも角にも松花江二大鐵橋破壞に向へる、矢張萬以上の大部隊であると敵に誤想せしめ得たのは、抑、果して如何なる理由によるのであるか。これ實に一は莫大なる兵力を狹小なる地域間に使用したので、其の行動かけひき頗ぶる敏活を缺き何等の得る所なかりしに反して。一は廣大なる區域に向つて極めて輕捷なる二挺進隊を放つた爲めに、其行動が自由自在で活動に目ざましきものあり、敵をして應接奔命に暇あらざらしめたのであつて、其結果は敵の大兵力を巧みに後方に控制し得たのである。更に敵に於ても小部隊は確かに今述べた如く成功して居る。故に評者は此の彼我兩軍に於ける如上の研究によりて、騎兵挺進なるものの性質と實施に對して綜合的に、左の如き自己一流の定義を下し、以て此の騎兵挺進の研究を終らんとす、曰く

一、騎兵挺進成功の如何は、一に其指揮官の選擇に存す。

二、騎兵挺進の眞目的は事實上の打擊にあらずして、敵の志氣を挫折せしむるにあり。

三、騎兵挺進の兵力は軍後方の要地守備兵と豫想すべき、歩兵一大隊內外の敵と對抗し得るを以て限りとし、可成建制部隊を用ゆべし、但し聯隊(三中隊)以下の兵力を使用するは特別の場合を除くの外適當ならず。

四、槊架機關銃隊を附屬せしむるは缺くべからざる要件にして、成し得れば

騎砲二門以上一中隊迄を附屬せしむるを必要とせん。

五、挺進の行動は迅速秘密にして、神出鬼沒殆んど端睨すべからざるを要訣とし。其攻襲は果敢にして敵の不意に乘ずるを要し。戰不利にして追擊を受くるに方つては、敏速に分離して急退し、各個に豫約せる地點に集合すべし。但し可成眞面目の決戰を避くべきは勿論なり。

六、挺進騎兵は一地に久しく駐まるべからず、其運動は多くは晝宿夜行を必要とせん。地域大にして森林多く住民地少なければ、其進退行動を、秘匿するに便なり。土人の同情を得ば更に萬事に付きて一層の利益あり。

七、遠く敵の後方を擾亂せしむべき時は、本軍の開戰に先だつて挺進せしめ、其行動を輕捷にする爲めに、比較的其兵力を寡少にするを要し。近く敵の側背を脅威するが如き場合には、本軍の作戰と相策應して派遣し、且つ比較的大兵力を用ゆるを利とす。

八、挺進騎兵の實力は兵數の夥多にあらずして其素質の優良にあり、故に機敏勇敢なるものを以て組織し、最良の馬匹に跨がらしむるを緊要とす。而

して騎兵には現在に於けるよりも、更に一層綿密に破壞作業を敎育し、如何なる大破壞をも巧妙迅速に實施し得るの技倆と器材を有せしむるを要す。

九、挺進騎兵は輜重を携行すべからず糧に敵によるべし、鹵獲物は燒夷し其武器は埋匿すべし。成し得れば敵より離隔せる安全なる地を選み、傷病者及鹵獲金品の保收場を設くを利ありとす、

十、挺進騎兵は多くは本軍と連絡を通ずる能はず、又本軍の來援を期待すべき性質のものにあらず。從て全滅に陷ることあるべきを覺悟せざるべからず、よし全滅に至らずとも其挺進に任じたる部隊は、當分これを他に使用する能はざる如き困憊を來すべきは必然なり。故に猥りにこれを決行すべきものにあらず。

先づ大略以上の十ケ條で其大切なる要義は盡きたと思ふが、假初にも籍を騎兵に置くものは就中その將校たるものは、此の壯快にして偉勳を奏し得べき挺進隊長に適當なる所の。其居常極めて冒險的にして熱心、勇敢、剛毅、堅忍なる上に、尙更に膽略あり沈著にして機智に富み、獨斷事を處するの大英斷を養

なひ。以て常に此の樣なことのある場合毎に、必ず其選に當るを得る樣に心かけて居られたいと、評者は青年騎兵將校方にくれ〴〵も切望する次第である。

序にいふが露國參謀中將ドウロブ氏は其戰術學に於て、挺進は運動を輕捷ならしむる爲め可成騎兵隊を以て編成し、五百乃至一千を以て適度とする旨を述べて居るが、自分もこれには大に同意である。但し同將官は一萬乃至一萬五千迄は增加する場合があると附記して居るが、これ實に前揭リツチヒ將軍の九十六中隊說と同じく、露國一流の無闇に大兵力を消費する弊害に流れるものと評者は思ふ。又露將バイゴウは騎兵一旅團を以て適當と論じたのは既に述べたる所の如くであるが、獨のバルク將軍が小部隊は適當ならずと其戰術書で論じたのも、其意味を聯隊以下の樣な小部隊では駄目であるといふたものと解釋すれば、これも大に評者の意見と接近するものであらふと思ふ。蛇足の樣ではあるが近頃見た書物の中にあつた挺進の兵力を書きあつめて、讀者の參考の爲めに此の末尾に附記すること如件。

大正三年四月廿五日印刷
大正三年四月廿九日發行

戰史評論奧附

著者　無名戰士

發行者　東京市麹町區平河町四丁目十一番地　宮本林治

印刷者　東京市京橋區築地二丁目三十番地　川崎佐吉

發行所　東京市麹町區平河町　宮本武林堂
振替東京一〇九一二

不許複製

講兵會校纂　馬城生著

原則之圖示

第一篇　戰鬪一般ノ要領附諸兵種戰術
第二篇　攻擊ノ部
第三篇　防禦ノ部
第四篇　持久戰、夜戰、追擊、退却ノ部
第五篇　局地戰ノ部

須要ノ問題凡ソ壹百五十ヲ選ミ之ヲ最モ正確ニシテ鮮明ナル三色刷石版印刷トナシ其圖示シ難キモノハ註記ヲ以テス

體裁四六版二倍大
製本上等洋布製美本
價壹圓五拾錢
郵税　内地八錢
外地拾貳錢

戰術の研究に於て最も直覺的理解を得せしむるは簡略なる圖示に依るを以て最善最良の方法とすは苟くも戰術研究に志す人の等しく否認しなるべき能はざる確定の事實なれども文章を以てする戰術書の汗牛充棟も啻に事業の容易ならざるに反し未だ圖示的戰術書の隻影だも見ざるは抑も何故ぞと蓋し其容易ならざるもの著者深く之を遺憾とし其多年摯實なる研鑽と慘澹たる工夫とに成れる本書を『講兵會』に提供し該會に於ける參謀官五氏の熱心なる合議的批評を經て公開し以て我軍學界多年の渇望を醫せられたる未曾有の一大福音なり切に愛讀を希ふ

發行所　東京市麹町區平河町二丁目一九〇番地　振替東京一〇二一　宮本武林堂

如風居士著

戰史摘例　步兵操典證解

全三册

揃一部　四圓五拾錢　每册　壹圓五拾錢　内地郵税　一部二十錢　每册拾貳錢

第一卷綱領第一部　第二卷戰鬪一般ノ要領、攻擊、防禦、追擊及退却　第三卷夜戰、持久戰、山地、河川、森林、住民地ノ戰鬪、他兵種ニ對スル步兵ノ動作

總紙數千三百餘頁
引證戰例戰話約六百條
戰鬪實況繪畫六十葉
地圖戰圖大小五十二枚
製本本綴洋布製最美本

我操典の條項は本書によりて頗る易解且つ耽讀手を釋く能はざる好讀物と一變し了れり、即ち其意義を講釋する爲めに、快刀亂麻を絶つ底の筆鋒を揮ひ、更に其理由を證明する爲めに内外古今多數の戰例就中日露の最新戰役を最も多く最も適切巧妙に引用し、一々不動如山の大鐵案を下し、一見其原則のよりて生ずる所以の根原を知得せしむる而已ならず、内外有名なる戰畫の尤物多數を網羅して一層讀者の興味感激を甚深からしめんとす勉めたるは、我日本は勿論殆ど世界萬國にも其比類を見ざる良著と稱するに躊躇せず、果せる哉本書を一讀せば、當時の英國大使館附武官ソマーヴィール氏、獨國大使館附武官ベルネキッ男爵及佛國大使館附武官ベルタン大尉は何れも大賛辭を贈りて、著者が多大の勞力に酬いられたり、寔に必讀の最好著なり。

發行所　東京市麹町區平河町二丁目一九〇番地　振替東京一〇二一　宮本武林堂

豫告

五月刊行
戰史評論

第十五回（十三里台子戰鬪）

成仁武夫 無名戰士共著 ●代金は前金を振替口座へ拂込みを乞ふ

戰史評論

第一卷合本完成
第二卷分冊續刊

嚴正なる批評と。壯快なる戰さ物語と。鮮麗なる繪卷物とを兼備せる。世評無類なる

第一卷（價郵稅內地二圓外地三十二錢）
第二卷（分冊一冊二十錢郵稅二錢）（十冊前金二圓（無遞送料））

●第一卷目次大要
定州騎兵戰　鴨綠江戰鬪其一　鴨綠江戰鬪其二
南山戰鬪　得利寺戰鬪其一　得利寺戰鬪其二　楡樹林子戰鬪
機子嶺戰鬪　三塊石山夜戰　萬寶山敗戰

●第二卷　毎月一回分冊出版。但シ第一回ヨリ連續購讀者ニハ第十回目ノモノト共ニ表紙ヲ贈呈ス

公平の前に强敵なく、至誠の向ふ所鬼神も之を避く、萬古不易の戰略戰術の原理と、晝夜兼行の兵器軍事の進歩とを標準として、親疎を論せず權貴を憚らず、侃々諤々嚴霜烈日の如き筆鋒を揮ひ、以て日露戰役に對して明快直截なる大結論を與へつゝある、本堂發行の戰史評論は、既に第一卷を完成し、更に大正第三回の新年と共に引續き分冊第二卷を刊行しつゝあり。本書が大正二年軍事出版界唯一の發行高を占有し、比肩するものなき盛況を以て第一卷を完成したる如く、此第二卷も亦本年出版界の白眉たるべきは、既に陸軍大學校に百數十の熱心なる愛讀豫約者を有すると共に、英國大使館を始めとして獨佛其他各國大公使館武官の、發刊期日を待ち兼ねつゝ競ふて之が研究に熱中するに見又畏も各宮殿下より毎回御買上げの台命を拜しつゝあるに徵しても、本堂が確信して疑はざる所なり。伏して大方の一覽を希ふ。

發行所　東京市麹町區平河町　東京振替口座一〇九一二　宮本武林堂

大正三年五月(十三里臺子附近戰鬪)

戰史評論

宮本武林堂發行

大正
3. 6. 1
內交

戰史評論

成仁武夫補
無名戰士評

第十五回　十三里臺子附近の戰鬪

諸君今度は明治三十七年の今月中旬に於て、當時一般に鹽大澳と稱したる張家屯の海岸から上陸したる、奥元帥の指揮する第二軍が最初に於て敵と戰を交へたる、十三里臺子の戰鬪を評論することにし樣と思ふ。いふ迄もなく此の戰鬪たる餘りに面白い計畫があつたでもなければ、また左までに壯快なる勇戰をやつたといふ次第でもないが。第二軍が敵地上陸後始めての初陣の戰鬪である所から、外見甚だ面白くない壯快でない樣に見へる戰鬪の間に於て、頗る多くの教訓を見出し得ると評者は考へるのである。からして丁度本

戰史評論の發行と相前後して決行せられたる、此の戰鬪を今月に於て評論を試みて、其以後に於ては可成其月其月の出來事を其月發行の評論紙上に於て研究する樣にしたいといふ、評者の希望を今月から實行して行くつもりである。いてやさらばこれから第二軍司令官が上陸後直に如何に敵情を判斷して、其判斷よりして生じたる決心により如何なる處置をしたかに就てそろ〳〵研究の歩を進めて見樣。

三個師團と砲兵一旅團の戰鬪部隊の大部分を率ゐて、五月上旬より鹽大澳に上陸を開始して、第三師團第一師團第四師團の順序を以て敵前上陸を決行したる奥元帥は、其第一次の輸送部隊の全部を五月十三日の夜半に於て、左したる敵の妨害を受くることなく上陸せしめ終つて、右は大沙河より左は李蘭河に至る貔子窩——金州街道南方の地區を頗ぶる堅固に占領したのである。然るに同軍はこれより先き四月二十一日に於て第五、第十一兩師團と騎兵第一旅團を、其戰鬪序列の中へ增加せられたる而已か、まだ其上陸したる部隊の後方勤務に當るべき諸部隊は殆んど全部上陸地へ到著して居らぬのであるから。今占領して居る樣な極めて狹隘なる地區にうろ付いて居ては、後續部隊の上陸に如何なる不便が生ずるか知れぬのは勿論である上に、速に其軍を進め敵と對等なる地形を占めて相戰鬪し相對抗し得る樣に、充分に其占領區域を擴張して置かぬと。北にも南にも少なからざる大敵を控へて居る場合であるから、如何なる不意の大壓迫が敵方から進來せぬとも請合へぬのである。からして奥元帥は輜重の大部分及兵站司令部の如きは、未だ全く上陸して居らぬにも係らず、此の三個師團一砲兵旅團の戰鬪部隊を以て、取敢へず領土擴張の大活動に著手したのである。當時奥元帥が知り得たる敵情は頗ぶる不充分なもので、殆んど左の如きものであるに過ぎなんだらしい、曰く

『金州附近にある敵は歩兵約一旅團、騎兵若干と砲兵約三中隊より成る混成旅團にして、其大部を以て南山を守備し他の一部を以て十三里臺子東西の高地、及金州城貔子窩街道上劉家店附近を占領し居るものゝ如し』

これが即ち最も我が第二軍の上陸地に近接したる、旅順方面に在る所の敵に對する元帥の敵情判斷であつた。而して此の外北方に於ける敵の主力軍方面の情況に就ては

『普蘭店及南瓦房店には少數の敵兵あるも、近く大なる兵力の南進するが如き模樣殆んどなく、情況未だ全く急迫に至るの虞なしと雖ども。聞く所によれば遼陽、海城、蓋平附近の敵の一部が、五月五日以降東方及北方に向つて移動を始めしは事實にして、此の情況により考察する時は、敵が我第一軍の方面に轉進を企てたるの徵候と認め得られざるにあらざるを以て、我軍の前面情況未だ切迫せずとして棄て置くべきにあらず。軍は速に北進を起して第一軍に策應し、以て彼が東進の企圖を遙かに妨害せざるべからず』

これが即ち北方の敵に對する元帥の情況判斷と、其判斷より生じたる決心であつたのである。そこで此の兩敵情判斷を綜合して深思熟慮を費したる後、左の如き處置をなすに決心したのである。

『第三、第四師團を以て北進大沙河、普蘭店の線を占領せしめ。第一師團を以て金州附近の敵を擊攘して、大連灣附近に確實なる軍の根據地を選定し、將來の上陸及軍の北進の準備を完成せんとす』

此場合に於ける奥第二軍司令官の情況判斷と其處置は頗ぶる至當である。北方面には左して危險を感じぬのであるから、此方面に一師團を向はしめ之を北方の押へとして置き。二個師團を以て金州附近の敵を旅順方面に壓迫して、速に上陸に便利なる根據地を大連灣附近に成形するといふのも一方法に相違ないが。北方の敵が頻りに東方及び東北方に移動するといふことは、此際決して輕々に看過して置くべき些細な事柄でない。若しも此の敵が續々東方に集まつて第一軍が不利の地に立つに至つたとすれば、第二軍今後の作戰計畫は決して豫定の如く都合よくは決行せられぬ羽目になりゆくのが當然である。からして何れにして見ても比較的兵力の少ない近傍の敵には先づ一師團を向はしめて、北方の遠くして大なる敵をして勝手に第一軍の方へ其力を割き得

ぬ樣に、これを遠くから牽制して不動の金縛りをかける爲に、二個師團を以て、廣大なる五里餘に亘る正面を占めつゝ速に北進を企だてたのは。これ實に此の場合に於て最も至當なる方策を採用したものであつて、此初陣に於ける奥元帥の情況判斷及びそれによりて下されたる、五月十三日午後八時に於ける第二軍の命令は評者は全然同意である。

然るに金州方面の敵の兵力が頗ぶる不明であつた上に、此敵は近き旅順要塞から鐵道を以て迅速に增加せられ得べき位置にあるを以て、今現在此所に一旅團しか居らぬとしても、明日はこれが或は一師團かそれ以上になるかも知れぬ。實際旅順には今何程の兵力が貯へてあるか、これは事實まだ奥元帥にも知れて居らぬのであるから、爲めに命令を下してから少しく元帥は其胸中に決心の動搖を感じて來た。これが今少し前であつて十三日夜の軍命令を下さぬ先であつたらばよかつたが、十三日夜前揭の命令を下したる後に於て、急に金州附近の敵は或は第一師團の獨力では擊攘し得ぬかも知れぬとの杞憂を起し始めたので。翌る十四日に於て其胸中の考案を第一師團長の許へ、石坂參謀少佐を遣はして豫め內意を傳へしめて置いたが、即ち其軍司令官の意圖といふものは

『若し金州附近の敵兵强大なる時は、直ちに第四師團の主力を轉進せしめて第一師團の攻擊に參與せしむ。斯く計畫を變更したる場合には十六日に於て攻擊準備を完了し、十七日を以て兩師團協力して金州附近の敵を擊攘する考』

此の命令變更に就ては評者は頗る不同意である、決して〳〵其計畫が不當であるからそれで不同意であるといふのではない、一度命令を下してから後左したる敵情の變化もないに係はらず、これを輕率に變更するといふことが評者の不同意を唱へる所以である。若しも旅順方面の敵情が不明であつた爲めに、充分の決心がつかなんだとしたならば、十五日朝に於て運動を起させる爲めの命令であるから。何もそれを非常に急いで無理にまだ軍隊の全部が上

陸し終らぬ所の、十三日午後八時に於て軍命令を下さずとも今少し熟考して見たらばよかつたらふ。左までに金州方面が心配てある氣がかりてあるとしたならば、北方には一師團を向け金州方面にも一師團を向け、他の一師團を豫備師團としてどの方面の敵情變化にも應ぜられ得る樣に、軍司令官自身がこれを握つて其中央に位置する樣にしてもよかつたらふ。然るに一度北方に二個師團金州方面に一個師團と確然決定して、其命令を下して仕舞てから後大切な其決心に動搖を生じて、忽ちこれを變更し樣としたのは尊敬すべき奥元帥にも似合はぬ、頗る適當ならぬ處置てあるといはねばならぬ。よし又此の命令を萬不得已變更するに決したとしたならば、翌十四日の中になるべく早く、まだ兩師團が運動を起さぬ先に決然として、きつぱりこれを變更して仕舞へばまだよいのてあるが。明敏果斷なる奥元帥の平素に似もやらず、單に此十四日には其變更の内意を第一師團長而已に内示して、第四師團長の方へは愈運動を起したる十五日の朝に至つて、其意圖を傳達さしたに至つては、

これ實に軍司令官の過失てある決心動搖てあるといふを憚らぬ。此の軍司令官の決心の動搖が此十三里臺子の戰鬪に、始めから終りまて少なからざる不利なる影響を波及せしめたのは、最も著明にして掩ふべからざる事實てある。歩兵操典第二部第四の第二項に曰く

『指揮官ノ決心ハ須ク堅確ナラザルベカラズ決心動搖スレバ指揮自ラ錯亂シ部下從ヒテ遲疑ス』

と宜なる哉言や、この操典の條文を以て我が尊敬すべき奥元帥閣下の評言に用ゆるのは失敬てあり無禮てあるが、確かに此場合に於ける果斷を缺けるが如き不確實に近い命令變更のやり方は、幾分此條を以て律せられても苦情のいへぬ傾向があつたのは事實てある。からして命令變更の後に於て行なはれたる十三里臺子の戰鬪には、此の指揮官決心の動搖が其終りに至る迄波及したのてある。て評者は實に何故に奥元帥が一度斯うと決定したる命令を變更せられたのてあるか、又變更するならば翌十四日に於て確然ときつぱりと、

何故に明瞭に其變更を決行せられなんだかを疑ふのであるが。併し同元帥とても兵力莫大なる數個の師團を一手に握ぎつて、大規摸の大計畫の戰鬪の實行を指揮せられたるのは之が實に皮切りの初舞臺であるから、これ位のやり損じのあるのは到底免がれぬ、不慣れ不案内の間の手ぬかりに過ぎぬのではあらふが、如何に此命令の變更が此の十三里臺子の戰鬪に大なる影響を齎らしたかは、これから後に其場合場合に於て研究するつもりであるが、決して見のがすべき底の些細なとではなかつたのであつて、これ實に不慣れから來た過失であるとして之を默々に看過すべき程度のものでないのである。故に評者は考へるのである此場合敵情の更に一層明になるまで、即ち翌十四日の正午頃まで此の命令の下達を見合せたらば最もよかつたらふ。左すれば一度下達した命令を變更する樣な不都合は起らなかつたであらふ。或は又多少の懸念はあつたとしても一度命令を下した以上は、斷じてこれを改めなんだらばよかつたらふ。これが評者は此場合に處する第二の適當な手段であつたと

思ふ。更に愈以上の二方法を採用せなんだとしたならば、これは以上の二方法よりは頗ぶる下策ではあるが、十四日の夜までの間に於て第一、第四兩師團に對して、斷然として十三里臺子を協同して十七日に於て攻擊する樣に新に改めて命令するのである。現に北方面は今情況が切迫して居らぬのは事實であるから、左すれば第四師團を第一師團に加勢をさせて、金州附近の地區を占領したる後に於て、更にこれを普蘭店方面に轉進せしめても少しの危險も少しの支障もない。又敵が第一軍の方へ向ふのを脅威し樣といふにしても多くの騎兵を遠く北方に進出せしめて我が大軍の急北進を聲言せしめ、彼れ等を欺瞞して置きさへすればそれで牽制は澤山である。强がち二個師團を此方面に進ましめねばならぬといふ必要は少しもないのである。からして十三日の命令を全く反對にして北へ一師團南方へ二師團とすればよかつたのである。然るに奥元帥は前述の三策の何れをも採用せずして、十四日に於ては單に第一師團長に向つてのみ其命令變更の内意を通じて置き。更に翌十五日既

に各師團が運動を起して、第四師團の勇ましく普蘭店方向に行進し出してから、これに急遽轉進を命令したといふのはこれ確かに指揮官の決心の堅確でなかつた證據であつて、いはれなく其決心に動搖を來したる過失を評者は彈劾するを躊躇せぬのである。

第二軍司令官が兎やせん角やと考へて居る中に、間諜や其他の報告により北方には益敵兵が少なくなり、これに反して金州附近の敵兵は愈增加して一師團近くなりつゝあることを知つて。こゝに愈十三日午後八時の命令を變更することに決心して、第四師團の主力に砲兵第十三聯隊を屬して、これを五十里堡の方から普蘭店——金州街道を經て金州城北方高地に迫らしめ。第三師團と第四師團の一部を以て普蘭店大沙河間を占領せしむることに、十五日午前六時三十分に於て命令を下したのである。第一師團は既に昨十四日に於て此の內意を受けて居る上に、全く方面が違ふて居たのであるから少しもその命令變更の爲めに困難はなかつたが。十五日の早朝から運動を起して中途に於て此の新命令を受領した第四師團の非常な困難を惹起したのは事實である。今迄の前衞を廢して新に前衞を設けるやら、此の日に於ける軍隊區分は一時滅茶々々に破壞せられて仕舞て、何等の豫定も計畫もして居なんだ五十里堡の方へ、傳騎以外少しの騎兵も持たずして步兵の搜索を以て轉進するのであるから、其困難と混雜とは容易でないのみか。其通路は頗ぶる不良であつたので砲兵などの困難は言語に盡されぬ。一方北方面を占領したる第四師團の一部はもとより、これに連なる第三師團も此の轉進の影響を受けて昨夜までに豫定して居た占領地區は、殆んど全く全線に亘つて變更を來すといふ大騷動。唯何等これが爲めに影響を蒙むらずして十五日に豫定の如く行動し得たのは、金州に向ふたる第一師團而已であつたのである。そこで評者は考へるのであるが、若しも昨十四日に於て第一師團に例の命令變更の注意を與へる必要を感じたならば、何故に軍司令官はそれと同時に第四師團卽ち自から其大部分の行動を變更すべき、第四師團に向つても其內意を告げなんだの

てあるか。若しも普通の考からすれば命令變更の場合に最も多くの計畫の相違を生じて、其行動に大困難を來すべき第四師團にこそ第一番に其命令變更の內意を含めて。それから後に第一師團には十七日に攻擊をする如く計畫せよとさへいふてやれば、それでよいのではないかと評者は思ふ。つまり此の內意の豫告は第一よりも第四師團の方へ豫め知らせて置くのが必要であつた。左すれば第四師團では其考て若し五十里堡の方へ轉進の場合には、其左側支隊を前衞に變更するとか、それ〳〵相當な命令變更の場合に都合のよい樣な處置をして置くことが出來たに相違ない。てあるから此豫告は確かに必要なるものを後にして、其の必要の度の稍薄い方に早くした樣な傾きがある。勿論命令が變更せられた場合には全然異なつたる方向に進む樣になるべき第四師團へ、豫かじめ場合により轉進することあるべきを告知したならば、同師團は十五日の朝になつても其運動を起すのに躊躇する樣なことがあるかも知れぬ。若しも命令を變更せぬ場合に此の第四師團に躊躇されては都合がよく

ない、からしてこれには其間際まで知らせなんだのてあらふが。これ實に指揮官の決心が頗ぶる堅確てないことを證據だてたるものてあつて、この場合に於ける奧元帥の處置は頗ぶる適當を缺いて居たと評者は考へるのてある。

更に今度は十五日の各師團の行動に移ることにし樣か、此の十五日に於ける第三師團の處置は概して至當てある、特に軍司令官の命によりて其騎兵の大部と步兵第六聯隊の半分を南部聯隊長(現中將)に引率せしめて、遠く支隊を北方に放つたのは最も適當てある。斯くして此の大沙河々盂からと今一つ蓋平街道の方からも、これと同じ樣な支隊を遠く北進せしめたならば、それだけて北方に於ける敵の移轉を牽制するには足りたのてあらふ。此場合に於ける南部支隊の前方派遣は頗る適當な處置てあつて、爲めに北方の敵は少なからず此方面に懸念をせねばならぬことになつたのてある。て第三師團はもとより第一師團も、又北方に面したる第四師團の步兵第十九旅團も、此の十五日には左したる困難なく、豫定の如くそれぞれ其日に於て占領すべき地域を

占めて宿營に就いたが。唯獨り此日午前七時二十分北進の途中周家溝に於て西方轉進の命令を受けた第四師團而已は、此轉進の命令を受領すると同時に行進しつゝある師團に對して、其前衞及左側支隊等の軍隊區分を解いて、步兵第九聯隊の第一大隊と同第三十八聯隊の二大隊とを軍司令官の直屬としてこれを第十九旅團長安東少將(現中將)に指揮せしめて。其主力を以て普蘭店南方高地を占領せしめ、一部を以て孫家屯附近の高地を占領せしむることに命令を變更し。師團本隊の先頭にあつたる所の步兵第八聯隊(第三大隊欠)と舊前衞に屬して居た所の、工兵第二中隊を能美成一中佐に指揮せしめて前衞として、三房身屯を經て大王溝の方へ轉進せしめて、舊前衞は其隊を集めて本隊の後尾に入ることにして、漸くにして其轉進を始めるには始めたけれども。何をいふにも運動を起した後に於て、師團の任務と目標が變更して仕舞て、既に十三日より命令してあつた軍隊區分を、出發後僅か二時間にして全然其編組を解放して、更に全師團を二部に分割して兩方面に分進したのであるか

ら、大隊や聯隊の樣な小さな部隊でも其困難は非常である、況やそれが人二萬馬五千を以て數ふべき大なる師團のことであるから、其混雜と其困難の絕大であつたのはいふ迄もあるまい。軍總豫備隊たるべかりし步兵第八聯隊第三大隊及砲兵第十三聯隊本部並に第一大隊の如きは、餘波をくらつて第四師團に急に追及せばならぬことになり。就中砲兵は不知案內なる上にしかも砂堆ばかりが澤山て其行進の頗ぶる捗らぬ所の、川か道路か不明瞭なる最惡路を進んで、此の十五日の夜は徹夜行進した而已か。步兵第九聯隊の二中隊に加勢をしてもらつたが、それでも豫定の大王溝附近よりはずつと後方の李家屯附近にしか到著せぬといふ始末。其段列の如きは後方數里の間に處々方々に散亂しつゝ晝夜兼行して目的地に進むといふ、實に頗ぶる慘澹たる恐るべき大危險の狀態になつたのは事實であつて。これ全く一に此の急遽なる命令變更が持ち來したる、無用なる大勞力無益なる大混雜であるといはねばならぬのである。

以上述べたる如く軍命令を此十五日早朝に於て變更した爲に、北方面に行くべきを轉じて西方面に行進したる第四師團の如きは、現在如何なる狀況になつて居るやは實は軍司令官に於てもたしかに疑問であつたに相違ないと思ふ。然るにも關せず此の十五日の午後五時三十分に於て、奥元帥は漫然各師團各隊に向つて何れも本日の姿勢にあるべき旨を命令したが、これが又頗る適當でない樣に評者は思ふのである。北方面諸團隊は無論それで支障ないけれども、第一師團は衣家屯に留まつて居ては十七日の攻擊の爲めには距離が遠過ぎる、で十六日には今少し其位置を西方に進めて置く必要があり。又昨日に於て最も困難なる任務を突然課せられたる第四師團の主力の如きも、其行進困難なりし爲めに途中に甚だしく遲滯して居る砲兵を收容したる上、更に三四里を南進して兎に角十六日に十三里臺子北方の高地を占領し、第一師團と確實に連絡して明十七日の攻擊に協力せねばならぬと思ふ。然るに軍司令官が無頓著にも一般に十五日の姿勢にあることを希望したる命令を下したのは、これ實に非常なる無責任なる處置のし方であつて、評者が頗ぶる當を得ぬやり方であるといふのはこれが爲めである。最も第一師團は既にそれより前に態々派遣されたる石坂參謀から聞いて、軍司令官の眞意圖をも知りぬいて居たので、此の命令があつたに關せず敵情を威力偵察するといふ名の下に前進をしたが。そんなことは夢にも知らぬ第四師團の如きは、十六日一時其出發を躊躇して居たのは事實であつて、彼師團は其の本隊を五十里堡附近に集合したに關せず、前哨をも撤せずして何等か軍の指圖のあるのを待ち構へて居たらしい。丁度其所へ軍の小野寺參謀少佐が到著して始めて明かに軍司令官の意圖のある所を知つたのである。これ全く此の第四師團に對する軍司令官の都ての處置が、常に悉く手遲れ〳〵とばかりなつて居たのであつて、此戰鬪の爲めには實に遺憾千萬であつたと評者は歎息に堪へぬのである。

果して然らば此の場合に處するに如何にすればよいかといふと、評者の考へる所を以てすれば今朝第四師團に轉進を命じた時に、それと同時に軍司令

官の意圖を傳て置くが必要であつたと思ふ。單にこれに轉進而已を命じて其眞目的を充分にのみ込ませて置かぬと、第四師團長は爲めに如何なる誤解した行動に出るかも知れぬ。からして後に小野寺少佐を遣はして其意圖を傳へる位ならば、何故に十五日朝に於て第四師團の命令を變更する場合に、明瞭に軍司令官の意圖を傳へることをせなんだのであらふ。若しそれが都合上出來なんだとしたならば此日午後五時半の命令を下す時でもよいから、早く其意圖を知らせる樣にするが至當である。然るに軍司令官はこれを全く等閑に附した、これ實に第一の手ぬかりであると評者が考へるのも無理ではあるまい。更に十五日の午後に於て敵情に就き何等の得る所なくして宿營の命令を下すに當つて、單に本日の姿勢にあることを各師團に要求する樣な、そんな手ぬるい不確實なことをせずして、何故に左の如き意味を以て其の各師團に命令を與へなんだのであらふ。即ち北方面の第三師團と步兵第十九旅團に對しては正に明に本十五日の姿勢に有るべきを要求して。さて第一師團に向つ

ては河口又は關家店附近まで更に其位置を進めて十七日に於ける攻擊の準備位置を取らしめ。一方急轉進を命じたる第四師團に對しては、遲滯せる其砲兵を急進せしむると共に、十六日中に少なくも三十里堡南方周家溝より石門子に亘る高地線を占領すべきを命じて。此兩師團を三十里堡川の河盂に於て相連絡せしめて、以て明後日の協同攻擊に都合のよい樣に命令を下すべきが至當であると評者は考へるのである。然るに軍司令官の處置が此所に出てなんだ爲めに砲兵の遲滯した上今後の行動の不明なる第四師團は躊躇する、第一師團は威力偵察といふ名を借りて敵に向つて前進するといふことになり。爲めに軍司令官をして十六日の正午に非常に周章狼狽せしむるに至つたのは、其根元は敵情の不明が第一の原因をなして居るには相違あるまいが、それと共に奧元帥の十五日夕に於ける命令の下し方が至當でないから起つたのであると評者は思ふ。先づ十五日のことはこれ位にしてきりあげて置いて、今度は更に翌十六日のことに移つて研究して見樣。

第一師團長は十五日夜に衣家屯附近に於て、幾分有力なる敵の行動に就て信すべき情報を得たが、それは殆ど十七日の攻撃の參考になる樣な程度のものでない、て其前面には敵が果してどれ位のものを出して居るか皆目知れぬのである。そこて愈攻撃實行といふ十七日との間に明日一日の餘裕があるのであるから、それを利用して今少し敵に接近すると共に威力を以て敵を偵察し、以て十七日に於ける攻撃實行の決心に資する所あらんとして、十五日午後九時に於て明十六日に關する命令を下したが、これ等の處置に就ては評者は何れも適當であると思ふが。併し此場合軍司令官は此師團にも十五日の姿勢にあるべきを命じて居る、もしや其命令がまだ距離が遠い爲めに此の師團司令部に到著して居らなんだならば、今少し師團命令下達をさし控へこれが到著を待つべきてはあるまいか。よし軍の命令を待つて居ては夜半以後でなければ師團命令が下せぬかも知れぬから、大體に於て十七日第四師團と相連繫して攻撃するといふ軍司令官の意圖は、既に十四日に於て傳へられて居るのてあるから、その意圖に反せぬ樣に豫め命令を下してもさし支はあるまいが。その命令を下した後に於て十五日の姿勢に在るべき軍命令が到著したとしたならば、何故に第一師團長は之に對して既に下したる命令を取り消さなんだのであらふ。この師團命令が其眞意味に於て軍司令官の意圖に合うて居るから、其儘にして置いたといへばそれも理由のないことはないが。果して然らば何故に速に師團の明十六日に於て執るべき處置を、明瞭に軍司令官へ至急に報告を呈して置かなんだのであらふ。これ實に何れにしても此邊に第一師團長の手ぬかりがあるのは爭ふことは出來まい。評者の計算する所では軍の命令は遲くも十時か十一時には來る筈であるから、それを待て明日の命令を下してもよいと思ふが、それでは頗ぶる命令下達が遲れるからといふならば、午後九時に於て一先づ命令を下すと共に、直ちに其執りたる處置を軍司令官に向つて報告するが至當なる處置てある。此の如くにして置いたならば明日に至つて軍司令官が無益な大心配をする必要もなければ、又第四師團

が揉みにもんで無闇に早駈けをやる樣な大騷動も出來てこなんだのであるが、第一師團長が獨斷で勝手に命令を下してそれを少しも軍司令官に報告せなんだので、十六日には諸方で大手違を演ずるに至つたのであつて。其威力を以て敵情を偵察するといふ事柄には、全然評者は少しの不同意もないけれども、此場合に於て實際に執られたる第一師團長のやり方に付ては、評者は何としても之に同意を與へ得ぬのである。同意する所ではない或は場合に依つてはこれを命令違反の罪に問はれても、一言の申開きも出來まいと考るのは强ち評者ばかりの酷論ではないと信ずるのである。

以上の如く此十六日に對する命令の下し方に付ては大なる非難があるけれども、前にも述た通り其命令の內容に就ては評者に於ては更に異存はない。其命令の要旨は戰史第一卷第五篇第十四章三九五頁の示す如くであるが、此命令中前衞に目標として示されたる關家店北方千二百米突の高地といふのは、自分等の目では戰史の附圖中には見出し得ぬ、後に砲兵第一大隊の布陣した地のことかとも思ふが、左すれば左して有利なる地形でもない樣である。又河口北方千二百米突の標高一一四米の高地かとも思ふが、それなれば關家店北方と示すのは至當ではない。忌憚なき所を申上げると文字通りの關家店北方千二百米突の地は、後に師團本隊の開進したる前劉牢溝南方の凹地が丁度それに當るのである、まさかに水平曲線をあべこべにして高地と低地と讀み違へをしたのでもあるまいが。頗ぶる此の指示せられたる高地の所在は不明である而已か、到著の後に於て此の高地は地形不利なる爲め更に前衞を其前方標高一四五米の高地に進めて居るが、これ實に頗ぶる不注意なるやり方ではあるまいかと評者は思ふ。勿論日露戰爭時代とは既に十年も過ぎ去つて居るのであるから、日清戰役に第一師團に居た人々は一人も殘つて居らなんだかも知れぬが。此附近は日清戰役にも第一師團が花々しい初陣の戰鬪をやつた地方であつて、又相當に詳密なる地圖も其際に於て作つてあつた筈である。果して然らば此の前衞に其樣な低地やら高地やら知れぬ樣な、且つ到著後に

役に立たぬ樣な所を指示してやつたといふのは、如何にも不注意千萬疎忽の至極であると評者は思ふ。況んや前衞は此の關家店北方千二百米突といふ高地を特に示されたるが爲めに、強いてそれに向つて進まんとして極々行進のしよい所の貔子窩——金州街道を棄てゝ、殆ど全部道路でない凹凸多き該街道北側の山地の中を行進すると云ふ困難を冒すに至つたが、斯の如きは實に敵に近づいてから無益に將卒を疲勞せしめた外に何等の得る所はなかつたに相違ないと評者は信ずる。第一師團長の考では敵に近づいて長隘路を成形する所の、彼の金州街道を通過するのは危險である、からして之を避けて其北側の高地上を進ましめるのが安全であると、斯く單簡に考られたのでもあらふと思ふが。それが一大隊や一聯隊の步兵なればそれでも支障あるまいが、進むべきものは師團である砲兵其他澤山の馬や車があるのである、それを輕率にも道路外を通過せしめんとしたのは評者は大不同意である。若し敵に近くして長隘路を成形する金州街道を危險であると考へたならば、其兩側の高地上

を有力なる警戒隊を進ましめて、矢張主力は此の金州街道を進むのが至當である。況んや前衞の占領すべき目的の地點は此の道路から僅かに千米突少し餘北方にあるばかりである。これを占領せんが爲めには河口からでも我龍全からでも關家店からでも、隨意にこれに轉進することが出來るのであるとしたならば、決して衣家屯から約二里の間ろくな道もない波狀地の岡の尾をつたふ必要が何れにあるか。此前衞の進路の選定し方は實に愚中の愚て拙中の拙てあると評者は思ふ。

戰史の上には劉家店北方の高地附近が、野砲の通過困難であるといふことが明瞭になつたので、急に貔子窩——金州街道上を偵察さしたが適當な分進路がないので、遂に已むを得ず前衞の進路を工兵により修繕させてそれへ本隊の砲兵を進めたとあるが。此劉家店北方の道路修繕の半分も四半分もの手間を費やさずして、目的の地點に達し得べき道路は前にも述べた通り澤山にあるのである。然るにそれを充分に研究せずして道なき山上を野砲を引きずり

まはつたので、其困難や混雜は實に非常なものであつた而已か、終に砲兵がこれが爲めに適當の時機に戰鬪加入をなし得ぬ樣になつて仕舞たのは、全く此の進路の選定が其宜しきを得なんだ爲めである。これ實に此の十六日に於ける第一師團の行動に就て、これが先づ第一の失態であると評者は認める。

左側支隊は燒酒溝附近の宿營地を發して、午前八時五十分夏家溝東方高地に到著して見ると、寡婦屯西方から背陰寨に亘る高地上は既に敵兵が占領して居て、其一部は寡婦屯東方の高地に出て居て我に向つて射擊を開いたので。支隊長渡邊祺十郎大佐(現少將)は先づ其二中隊を以て夏家溝東北の高地を占領せしめ、其一小隊を寡婦屯北方標高一一四に出し、更に今一小隊を背陰寨東方に出して、兩翼から前方の敵を監視せしめて、さて其本隊を河頭溝に開進せしめたが。此場合此の歩兵第二聯隊(一大隊欠)の處置は頗ぶる同意である。此日の戰は偵察をやるのであつて眞面目の攻擊ではない、であるから支隊が先づ示されたる目的地に達したならば、充分に警戒して其示されたる地を占領して、若し敵が近傍に居つたならば手を盡して之を監視して、本隊の動作に應じて威力偵察を巧に行ひ、以て明日に於ける攻擊準備の爲に充分に根據ある敵情を探得せねばならぬ。此場合輕率なる戰を開いては如何なる不慮のことが起つて來ぬとも斷言出來ぬ、からして愼重に構へて本隊の現時の有樣を考へて然る後行動するの必要がある。即ちこれが爲めに其一部を以て所命の地を占領せしめ、更に其兩翼の前方に一小隊宛を進めて、敵の行動を監視せしめて充分に警戒し。其間に於て其本隊を開進せしめて待機の姿勢を取り以て師團の行動如何を待つたのであるから、此の場合に於ける渡邊大佐の處置は一點の申分はないと評者は考へる。

此の前後に於て第一師團の三縱隊は何れも昨夜の命令の地點に到著し、前衞は更に進んで標高一四五の高地を占領し、又右翼隊は後劉半溝西方の高地を占領して、其本隊の先頭は二臺子附近に達したが。此場合十三里臺子に敵砲八門と歩兵若干、又前衞の前方たる鐘家屯左右の高地に歩兵若干の占領し

て居るといふだけの敵情は知れたが、其兵力も其配備もまだ〳〵詳細には知れなんだので。師團長は先づ十三里臺子の敵を搜索せんと考て、前衞及右翼隊は其儘其地に停止せしめて、砲兵第一大隊を以て前衞の占領したる陣地後方より十三里臺子に向て砲擊を開始せしめ。次て左側支隊たる渡邊聯隊を進めて敵の退路を脅やかし、以て彼が之に應ずる爲に如何なる有樣を呈するかを見んとした。この威力偵察の爲めになしたる第一師團長の處置は大に同意である、敵は十三里臺子から背陰寨に亘り約五千米突の廣正面を占めて居るので、果して何程位の敵兵が之を占據して居るものか鑑定は容易でない、又それが敵の本陣地であるか或は一時的に我を拒止する前進陣地であるかも頗ぶる不明である。して見ればこれ以上の敵情を探ぐる爲めには、勢ひこれを攻擊して見るの外に手段はないが、それが爲めに多くの兵を動かして、それが動機で本戰をひき起す樣になつてはならぬ。これが爲めには遠く砲兵を以て敵砲兵を誘なふて其砲兵の位置と兵力とを探り、更に敵の最も苦痛を感ず

べき方面へ餘り多からざる兵力を進めて、敵が痒がるか或はどんな顏をするかを探りを入れて見るのがよい。只今の場合彼の左翼は非常に北方に突出して居る、若し此の際に我左側支隊を進めて條鬼溝から晌水寺の方へ向はせたならば、必然敵は其退路に對して頗ぶる不安を抱く樣になるべきは當然である。左すれば彼は何等かの處置をせぬ譯にはゆくまい、其れが爲めには其兵力を移動せしむるか又は前線に現出せしむるてあらふ、斯くなれば我が第一師團の目的は達せられるのである。てあるから此の威力偵察を爲すに當つて遠方よりする砲兵と、比較的兵力の少ない左側支隊とを使用し、且つ其の左側支隊を彼れの最急所たる退路に近い敵の右翼に進めたのは最も至當なるやり方であつて、これは實に最も時機に適したる處置てあつたと思ふ。

然るに此の威力偵察の大切の場合に至つて、其進路の選擇を誤まれる報酬は遠慮會釋なく現はれて來た。砲兵第一聯隊は今朝師團出發後其進路が困難なので衣家屯の集合地に空しく二三時間を待ち合せて居り、工兵や步兵が道

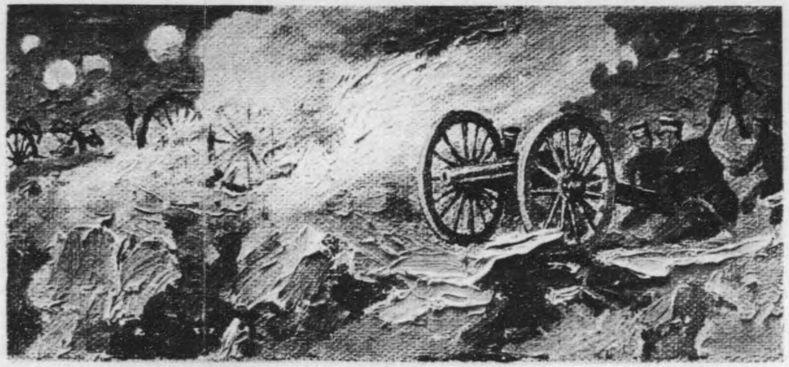
路の工事をしてくれたのでそれから出發したけれども、殆んど道路外の樣な山地へ急造の道路を開いたのであるから、其行進に時間を費やすことが容易でないので。午前十一時二十分の師團長の陣地進入の命令を、關家屯北方千二百米突の師團本隊の開進地附近で受領したのが、最早彼れ是れ正午の頃であつたらふか。土のぼか〳〵する耕地や岩石の多い山地を其西方の陣地へ進入するのは非常な大難事である。けれども其樣なことをいふて居るべき場合でないので、全力を盡して零時半頃までには放列を布いたが。此地方は土質頗ぶる堅硬なりしが爲め工事が非常に難儀であるので、土囊を以て砲の掩體とする計畫であつたが、其中に目敏とき敵から烈しく砲擊せられるといふ困難に陷いり、僅に左翼の一中隊が其工事を終た而已、他は全然曝露して敵と砲戰を交へるの已むを得ざるに至たので、此砲兵第一大隊は初陣の一戰で非常莫大なる損傷を被むり、水谷大隊長以下實に慘憺たる目に出會ふたが。砲手一人になる迄も大勇戰を繼續して其目的を貫徹したのは、實以て勇猛てあつてまた健氣なる戰鬪ぶりてあつた。が併し飜つてこれを考へるとこれ果して何人の罪てあるか、いふ迄もなくこれは砲兵を無理に道なき山地方面へ導びいたる師團長の責任にあらずして何ぞやてある。若しも此朝前衞をして金州街道兩側の高地を進ましめて、本隊が前にも評者のいふた如く金州街道を前進したならば、前衞の先頭が標高一四五高地へ到著して一時間も經たぬ間に砲兵は關家店附近まて到著の出來る計算てある。そこで鐘家屯兩側高地の敵の步兵の射擊が、此の砲兵の陣地進入に危險てあると思ふたならば、前衞を以て一押し壓迫さして少し敵を押しさげるのてある。其間に進入道路の修繕もやり砲兵陣地に肩墻の築造をもするのてある、左すれば如何に遲れても十二時前までには、屹度立派に準備したる陣地へ就いて敵と砲戰を開くことが出來る。萬一敵が前衞の一押に退ぞかずして關家店北方の砲兵陣地に進入し難いとしたならば、今日の戰は本攻擊てはない其準備の威力偵察てあるから、必ずしも此師團戰線の中央に砲兵を置かねばならぬことはあるまい。關家店

南方街道南側の高地には、一大隊位の砲兵陣地は澤山にあるから、先づ不取敢それを占領して左側支隊と共に敵の退路へ迫るの大氣勢を示すのも一手段である。何も無理やりに例の關家店の北方高地へ砲兵を引ずりあげねばならぬ必要はないと思ふ。それでも愈明日の本攻擊には是非此現在の砲兵陣地に砲兵が置きたいならば、今此十六日から今夜にかけて、十二分に工事の準備もしてそつと夜中に於て陣地に就かしむれば、明日は敵の不意に乘じて思はぬ所から砲擊を喰せることも出來る。若しも今迄評者のいふた樣にしたとしたならは敵は非常に其退路を氣遣ふて、十三里臺子方面に對しては少しも砲擊せずとも、其三縱隊となりて進める大規模の前進と、此退路方面に迫れる金州街道南方の我が步砲兵の攻擊動作の爲めに、彼は忽ちにして其眞面目を我眼前に露出して、必ず第一師團長の希望を滿足せしめたであらふのに、返す〳〵も砲兵を此山逕から進ましめたのは、頗ぶる不利であつた頗ぶる理由がない又其必要も少しもないと評者は信ずる。此の行進の遲滯からして陣地を構築することが出來ずして、毅然として曝露した儘敵と勇戰したる砲兵は實に强いものであつたが、彼れ等をして無益に大隊長以下多數の將卒を失なはしめたのは、確かに此の進路選擇を適當にせざりし師團長の過失に原因するといふが至當である。

評者は日清戰役に於て實は此の邊に永く居つたことがあるので、少しく此邊の地理には通じて居るつもりなのであるが。衣家屯から關家店に至る間に於て此の金州街道の北方高地へ上る道は、頗ぶる不充分なものではあるが六條ある。就中河口より二臺子の方へ通ずる道路は少しあと戻りする樣については居るが、約十二分一內外の傾斜であるから、三百米突弱の間少々の手入れをすればさしたる困難なく野砲を高地上へ進めることが出來る、また關家店から前劉半溝へ通ずる道路は、前の道よりは少し傾斜が急て約十分の一位であるが、これは二百米突ほどの修繕をすれば確かに高地上の現在此の日の砲兵陣地に直ちに出られる。が此の方は敵の鐘家屯西方高地の步兵からは瞰

制を受けるが、距離は二千二三百米突ある上に此の關家店の人家と其川縁りの樹木とで、左程に損害を被むる程の心配はあるまいと思ふのである。此の兩道の何れかを選んだならば、此の日の砲兵陣地へ砲兵を布陣せしめるとしても、彼の道なき波狀山地を無理に進んだよりは、何程容易であつて且つ何程速に其陣地へ進入し得られたか知れまい。これは自分が知つて居る地形であるから、それで序に此所に其梗概を述べて參考とした次第である。

さて砲兵第一大隊の水谷少佐は非常な困難を爲して、此の曝露陣地を占領し十三里臺子附近の敵砲と大砲戰を始め、同大隊長以下將校四名死傷し下士以下の損傷甚だしくして、砲手一名を殘すの外悉く死傷せし砲車が二門もあつた程の激戰であつたが。堅忍勇敢に其砲戰を繼續して、午後一時二十五分敵砲兵の退却を始むるまで、聊かも其速度を緩めることなく奮戰したのは實に天晴れなる初陣の大手柄であつた。午後一時三十分からは砲兵第二大隊が其左翼に放列を布き、これは鐘家屯南北兩側高地の歩兵に向て烈しく砲擊を



月山東方ニ於ケル露軍歩兵ノ退却

關家店北方高地ニ於ケル水谷砲兵大隊

して、前衛及び左側支隊の前進に少なからざる援助を與へたが、この大隊を指揮したのは評者の友人故町田中佐其人であつた。これで此の日の砲兵のことは先づ切りあげることにして、さてこれからは今日の一番の大役に當つた る所の、左側支隊たる渡邊大佐の歩兵第二聯隊に就て少しく研究することにし樣と思ふ。

前にも述べたる如く渡邊大佐の歩兵第二聯隊の第一、第二大隊は、第一中隊と第八中隊を散開して、夏家溝東方標高一二五高地を占領せしめ。更に第八中隊の一小隊を寡婦屯北方標高一一四と、第七中隊の一小隊を背陰寨東方高地に出して、敵の動靜を油斷なく監視せしめて。其他の諸隊即ち歩兵六中隊、工兵一小隊、機關銃六挺を河頭溝に開進して師團の命令を待つて居る所へ、午前十一時四十分頃直ちに寡婦屯南方高地へ前進せよとの命令が來たが。同高地には標高一二四から標高一三八に至る間を占めて、敵兵が嚴然として構へて居るのであるから、おいそれと輕率に前進するとは許さぬのである。そこ

て渡邊大佐は前衞たりし第七、第八中隊をして低地をつたふて、大和尙山東北の勝水寺北方の斜面に進出せしめ。外に第六中隊をして寡婦屯の東北高地から、第五中隊をして寡婦屯の東南高地から、射擊を以て前衞を援護させつゝ攻擊したけれども。敵は地の利を占めて退ぞかず大に瞰射を擅まゝにし、更に金州街道を隔てたる標高一四〇の大房身北方高地から、盛んに側射を我が攻擊部隊に加へるので其困難は容易でない。そこで本隊たりし第一大隊の第二、第三中隊を前衞の右翼に增加し、第一、第四中隊、工兵小隊を豫備隊として、逐次凹地を進んで敵の據れる高地麓に迫り激戰を交ゆると四十分、午後一時五分に於て寡婦屯南方の高地を全く占領し得て、更に敵の退却に對して追擊を始めたが。敵は再び葛大溝西南の險峻なる高地を占めて頑强無双に抵抗する上に、一方例の街道の北の標高一四〇の高地から愈〻烈しく側射を浴びせかけるので、追擊前進容易ならず大困難である。そこで渡邊大佐は今まで敵が據つて居た所の、條鬼溝北方の標高一二四の高地に第六中隊を配置して、これをして敵の側射をする部隊に對向せしめて支隊の右側を掩護し。歩兵一小隊と工兵一小隊を除くの外、歩兵六中隊と二小隊機關銃六挺を悉く第一線に出して、激烈を極めて葛大溝西南高地の敵と交戰して居たが、敵も去るもの中々退却すべき模樣がない。斯くして彼我猛烈に小銃戰を交換して居る所へ、恰かもよし午後一時四十五分とも覺しき頃砲兵第二大隊は、大隊長町田少佐の指揮の下に關家店北方の高地から、百雷一時に落下する凄まじき勢を以て、此の渡邊左側支隊を苦しめつゝある大房身左右兩側の敵歩兵の頭上に、雨霰れと榴霰彈の火の雨をふらし始めたのである。これに勢百倍したる渡邊支隊の主力は、時機來たれりと雀躍して愈〻烈しく射擊する、敵は我が銃砲火に得堪へずして浮き足になりたる機に投じて、其の左翼たる第五、第八、第七中隊を第一の諸中隊は機關銃六挺を中央にして、依然舊位置からして前進しつゝある三中隊を射擊を以て掩護したので。流石の敵もこらへ切れずして陣地を棄

てゝ退却したのが、たしか午後二時十分前後のことであつて、此方面の敵は東石門子から肖金山に亘る線へ匆惶として退却して仕舞ふた。

此の歩兵第二聯隊の二個大隊がなしたる行動は、其處置頗ぶる適當にして土地の嶮難凹凸なる上に、要害堅固を極めたる地を占めて瞰射する敵に向つて、勇敢無双の攻撃を決行して聊かも躊躇逡巡することなく。以て第一師團長が威力偵察の爲めに希望したる、此の附近一帶の敵の退路を危からしめて、敵が餘儀なく其兵力を移動せしむる模樣を見んと謀られたる意圖の通り、最も適當に最も勇敢に且つ最も巧に攻撃せられたのは。流石に天保錢學閥でないに係はらず、戰術家として名聲高き渡邊將軍、實に其の名に背むかずと稱賛の辭を呈するも誰れも不同意はあるまいと思ふ。果せる哉此の渡邊支隊の一戰に敵は過早にも全く此の附近一帶の地に見きりを附けて、全力を擧げて退却を決行するといふことになつたのであつて。如何に此の一猛進が敵に大打撃を蒙むらせたかはこれを見ても知れるではないか。であるから此の第一師團の初陣戰に於ては、此日舊佐倉の歩兵第二聯隊の左側支隊としての行動が、十六日中の最も立派な見ものであつたのは事實である。

師團の前衞は此間何をして居たかといふと、歩兵第三聯隊の第二大隊が其第七中隊を右とし其第六中隊を左として、標高一四五高地を占領して他の二中隊は其後方低地に據り、爲すこともなく漫然と前面の敵と相對して遙に緩徐なる射撃を交換して居つたが。町田砲兵大隊が其後方に放列を布かんとするのを見て、少しく活動の色を現はし更に第八中隊を第七、第六兩中隊の中間に增加した。すると間もなく十三里臺子の敵砲兵が退却を始め、次て其前面に居た敵の歩兵も北の方から漸次退却を始めたが、まだ前衞司令官は別に處置をする所がなかつたが。前兵大隊の最右翼に位置したる第七中隊長は機逸すべからずと考へて、歩兵操典第二部第三十九の『前線ニ在ル指揮官ハ射撃ノ成果其他敵ニ對シテ獲得シ得ベキ利益ヲ最モ速ニ判別シ得ルヲ以テ機會ヲ逸セズ直ニ突撃ヲ決行スルヲ要ス』とある原則を守り、獨斷を以て猛然起て前進

して月山東方高地の敵の散兵壕を占領した。此の勇進に勵まされたる第三聯隊の第二大隊は第六中隊の二小隊を豫備とし、第八、第五、第六中隊の一小隊を第一線として勇ましく敵を追擊した。て餘り大なる勞力と犧牲を拂ふことなくして月山から泡子山に至る間の、敵の陣地を苦もなく占領することを得たのは午後二時四十分頃であつた。これ即ち此の前兵大隊長高松少佐の前進は、前に引用したると同條の『此際後方部隊ハ直ニ前線ニ跟隨シテ之ヲ推進シ其效果ヲ完ウスルコトヲ圖ルベシ』とある操典の明文に其やり方が全く符合して居るのである。

元來此の日の戰鬪は威力偵察である上に、前衞はまだ師團長から前進の命令を受けて居らぬのであるから、前衞司令官が其前兵たる前述の高松大隊而已に其戰を任せて置き、爲すこともなく關家店附近に休憩して居たのは不都合と咎むべきではないか。併し月山東方高地から鐘家屯南方高地にかけて、我砲兵の布陣や左側支隊の攻擊を妨害する敵が居た以上は、あけらかんとして居らずして今少しは活潑に行動してもよかつたらふ。若し此の前衞が何事もせずして唯砲兵と左側支隊の攻擊而已であつたならば、これが今少しく剛性我慢なる敵兵であつたとしたならば、敏く其攻擊の威力偵察なるべきを推察して、其兵力を現はさずして默つて見て居たかも知れぬ。左すれば到底此日に敵の兵力や配備を知るとは出來ぬ筈である。であるから自分は前衞司令官が今少し之に兵力を加へて砲兵の砲戰を開くと相前後して、其前衞の第一線を月山東方高地から其左の標高一二六高地の間に進めて見るのが、此場合に於ける前衞司令官の處置としては適當ではあるまいかと思ふ。敵はてんから此地を守るの覺悟でなかつたのであるから、忽ちにして過早に退却を始めたからよい樣なものゝ若し眞面目に此の陣地に據つて我と相對して居た場合、此の前衞が砲兵及左側支隊と協力し烈しく攻擊するの氣勢を示さぬ以上は、決して敵は其兵力や其配備を見せてはくれなんだであらふと評者は思ふ。さすれば前衞の動かずに居たのは決してこれは過失といふことは出來ぬけれど

もが、要するに前衞に司令官たる人が頗ぶる氣のきかぬ活用のない人であつたことを表明するものであらふ。

此樣に血のめぐりのよくない前衞の中にも、前述の第七中隊長の樣な機を見るに敏なる人があつて、獨斷率先して先づ月山東方の高地を占領し、更に進んで泡子山を占領して以て步兵第三聯隊の第二大隊の前進を誘致したのは天つ晴てあるが。この中隊長に獨特の名を成さしめぬ樣にそれより前に、前衞司令官からして餘りに進み過ぎぬ程度に、適當なる限界を確かに示して其第一線を進める樣に命令するのは、此場合最も必要な處置であつたと評者は信ずる。

第一師團長は十三里臺子の敵砲兵の退却を見て、直ちに前衞及右側支隊に前進を命じたが、其命令の屆かぬ中に前衞は第七中隊に誘なはれて前進し、右側支隊も亦前衞の進むに誘はれて前進を起したが。此場合の此の師團長の前進の命令は如何なる意味のものであつたらふか、一寸と評者には其眞意を知ることが出來ぬのである。最初は威力偵察のつもりであつたのであるが、敵が退却を始めたから直にこれを攻擊せんとしたのであるか、眞意果してそれならば攻擊の命令を下して前衞及び右側支隊を進めるが至當であらふ。若し又左にあらずして一推し押して單に敵の如何なる應じ方をするかを見樣としたのであつたならば、此の兩隊に向つて其一部を前進せしめて敵の應否を試むるが至當ではあるまいか。然るに第一師團長は唯漫然として前衞及右側支隊に前進を命じた、これ實に頗ぶる適當なる處置でないと評者は思ふ。若しこの前面の敵兵の移動が眞の退却にあらずして、前進陣地を引き揚げたものであつて、前衞及び右側支隊が何れも前進を起したる際に、南山、月山、泡子山から大房身に亘り大兵力を顯はして、猛烈に應戰を開始したとしたならば何とする、今日の威力偵察戰は全く本戰と變化するの餘儀なきに至つたであらふ。果して然らばこれ第一師團長は全く軍司令官の意圖に反した戰を開くの責は免れまい。軍司令官は既に十四日に於て十七日に第四師團と協力して

攻撃するの内意を傳へ、更に昨十五日に於て同十六日は十五日の姿勢にあるべき旨命令を下して居るではないか。からして此日軍司令官は第一師團が威力偵察をもして居らぬと信じ切て居たので、突然急轉進を命じて混雜を極めて居る第四師團を、全力を盡して同日中に十三里臺子北方高地まで進出せしめて、明朝自から之を指揮して攻撃を開始せんとして大に意氣込んで居るのである。それを何ぞや其命令なり内意なり一切を無視して　此日前進して威力偵察をしたのもよいが。其威力偵察の結果がまた〳〵頗ぶる不明であるに係はらず、十三里臺子の敵砲兵の退却を始めると共に、漫然殆ど其全力に前進を命じたのは、これ實に如何にしても第一師團長の考のある所が評者には解釋し得られぬのである。幸にして敵は此地で眞面目の戰を交へるといふ覺悟がなかつたので、第一師團はやす〳〵と明日の本攻撃を今日何の苦もなく濟して仕舞て、第四師團に大奔命に疲れさせて大骨折損をさせた位で濟んだけれども。若し萬一にも敵が今少しこゝて頑强に抵抗をしたとしたならば、

此日正午軍司令官の考た樣な大不利なる情況が現出せぬとは決して保證出來ぬ。敵が意外にも我第一師團に萬事都合のよい樣に、此の陣地を棄てゝ退却してくれたから何の危險もなかつたが、萬一にも其全力を此附近に集めて眞面目に逆襲を企たてたとしたならば、或は各個撃破の危險に陷らぬとは何人と雖ども斷言出來まい。其結果が如何に好都合に終了したからとて其過失は過失として之を研究するが戰術學の上からは必要である。つまり偶然にして第一師團の此日の戰は勝を得たのであつて、軍の計畫が巧妙であつたのでもなければ又師團の運用が適當であつたのでもない眞に偶然である天幸である。軍の計畫は頗ぶる適當を缺いて第四師團が非常に遲滯して居る最中に、第一師團は勝手氣儘な威力偵察を決行し、それが偶然にも成功したといふ丈けであつて。深くこれを研究して見た場合には非常に危險なことをしたのである、頗ぶる無謀に近い戰を交へたものであると評者は思ふ。

第一師團が其獨立騎兵を最初から北方に使用し、更に此日にもこれをして

北方から敵を搜索せしめて、併せて第四師團との連絡に任ぜしめたのは同意であつて。其騎兵隊長名和中佐の行動も大體に就て非難すべき點はないのであるが、評者をして今少しく望蜀の慾をいはしめてもらいたい。それは何であるかといふと此の十六日に第四師團は都ての行動が非常に遲れた。それであるのに敵の十三里臺子附近のものは退却を始めたが、これ或は金州街道の方から第一師團が進迫したので、其急に赴むかんとして此の方面の守備を撤するのかも知れぬ。敵が眞に退却するなればすてゝ置いてもよいけれども、若し第一師團の向つた方面に兵を集めるのであるとすれば。これ決して棄て置くべきものでなからふ。即ち此場合名和騎兵聯隊は韓家嶺から平山、元寶溝の方へ向つて、多少の危險は顧みずして深く敵の左側背に侵入したならば、眞に退ぞくものならば愈〻急遽退却して仕舞ふたらふし。若しまた一時其兵力を金州街道に集めんとするものであつたならば、この騎兵の勇敢なる行動に牽制せられ餘儀なく停止して之れに對抗するに至るであらふ。何れにしても

此の騎兵は單に敵の左翼前にばかり居つて、敵を監視しつゝ第四師團と連絡を通ずる而已を以て足れりとせず、尙ほ今一歩ふみ込んで敵の左側背に侵入したならば頗ぶる大なる效果があつたに相違ないのに。この名和中佐が餘りに大事を取り過ぎたのは、冒險を以て本能とする騎兵の獨立行動としては少しく物足らぬと思ふのは、決して自分而已の無理なる注文と一概に排斥すべきものではあるまい。

第一師團はこれ位にして置き更に今から立ち戻つて此十六日の朝からの第四師團の行動に就て研究をして見樣。此日此師團の如何に行動すべきかゞ確實に決定せぬ上に、砲兵はまだ一日程以上も後方に停滯して居るのであるから。昨夜の儘で前哨をも撤せずに其主力だけを午前六時から五十里堡に集合して、砲兵の來著を待つて三十里堡附近の敵を攻擊せんとして仕度をして居ると、午前九時頃軍參謀の小野寺少佐が遲播きながら始めて軍司令官の意圖を齎らして到著したので。これに依りて師團長の此の日の決心も愈〻出來かゝ

つた所へ、三十里堡附近には敵の居らぬといふ第一師團の騎兵からの報告を得て、午前十時に近い頃大王溝で下したる第四師團の命令は　戰史第一卷第五編第十四章四〇七頁に載する如くであつて、其處迄はさして之といふ申分はないと自分は思ふ。此命令は下したけれども其砲兵の有樣は實に憐れ千萬なるものであつて、到底明日の本攻擊迄に全部三十里堡附近まで到著するかせぬかは大疑問であるといふ、非常な大延長と大遲滯とを來し歩兵と工兵とがこれに加勢をして、晝夜兼行死力を盡して前進に熱中して居るといふ、苦しい〳〵甚だなさけない有樣であつたのである。

此の樣に此朝第四師團の萬事が大手遲れになつたのは、要するに軍司令官が突然十五日朝に於て轉進を命じたのが原因であるが、それでも今少し前に其意圖を第四師團長に傳へたなれば、まだ少しは都合よく行つたに相違ないのであるが。奥軍司令官の腹の中では十七日に攻擊するといふことを、第一師團には疾くの昔に知らせてあるのであるから、此の十六日には斷じて本戰の始まるべき氣遣はないので、此日第四師團に追い付いたる後自から情況に應じてこれを指揮せんとの考があつたので。それで委細は直接師團長に話す方が間違がないといふ所から、參謀の派遣し方も遲くなり隨て第四師團は何の爲めに此方面に轉進をしたのか、それを充分にまだ會得して居なんだのて益〻不便が多かつたのであるが。それでも師團の前衛は歩兵第三十七聯隊の第一大隊、即ち竹迫少佐(現少將)の大隊を前兵とし、其の左側衛たる歩兵第八聯隊の第三大隊は其第十二中隊を前兵として、十六日午後零時五分には前衛の先頭は西三十里堡、同左側衛の先頭は東三十里堡東南標高一〇二高地附近に達して、師團本隊は小東山後と宮家屯の中間附近に達して居たが。其砲兵の先頭に至つてはまだ〳〵ずつと後方の龍口附近に其先頭が進出したばかりであつた。此の時南方第一師團の方面に當つて熾烈なる砲聲を聞き、頗ぶる其戰況の如何を心配しつゝ其歩を速めて前進を繼續した爲めに、午後二時半頃には前衛と左側衛とを以て、周家溝東方高地から石門子西方に亘る高地を占

領して、師團本隊は西三十里堡の北側畑地に開進を始め、砲兵第十三聯隊は殆んど其戰砲隊の大部だけが此時やつとのことて、小東山後南方の高地迄達したが。實際此の砲兵聯隊は諸段列が各車輛毎に前進するといふ樣な非常手段をとつて、漸くにして中隊段列の全部及び聯隊段列の前車だけが、翌十七日の朝師團本隊に追及し得たといふ程の大混雜の爲體てあつた。併し師團長は此の西三十里堡に達すると間もなく、前衞の占領高地附近に急派したる金久保參謀(今月少將に昇進す)少佐の報告によりて、十三里臺子の敵の退却し第一師團右側支隊の前進したのを知つて、少なからず其心を安んじ得たのてあつた。

第四師團に斯の樣な大困難の生じたことも、又第一師團が勝手に戰鬪を始めて居ることも少しも御存知ない奥軍司令官閣下は。今日第四師團の位置に進んて兩師團を確かに手中に掌握して、直接巧妙に兩師團を運用して大に初陣の手柄をせんものと。北方面の指揮一切は第三師團長に委任して、十六日

の早朝に勇ましく第四師團の跡を追ふて車家屯の宿營地を出發したが、行くこと幾何ならずして十六日の午前九時頃三房身屯に達して見ると、昨日急轉進を命じたる自己の過失の報酬は的觀。砲兵第十三聯隊の聯隊段列は道の惡るいのと泥の深いのと砂堆の多いのとで行軍非常に大困難、其長徑は殆んど數里の間に延長して居た。否延長といふよりも寧ろ散亂といふ方が至當の形容で、徹夜の難行軍に疲れ果てゝ各處に停止して居るのもあれば、必死身命を惜まず惡路と奮鬪して居るのもある。これは實に一大事と考へたので軍直屬の歩兵第三十八聯隊の第三大隊を殘して、沿道行進に惱みはてたる砲兵を援助せしめて置き。其砲兵の大困難中をのり越へて、午前九時三十分土門子に達した時に、第四師團が今日三十里堡を占領せんとしつゝあることを聞き。こゝて直に第三師團に傳騎を走らせて、歩兵彈藥半縱列及び砲兵第一旅團より、砲兵彈藥半縱列を此の土門子へ向け即時派遣して第四師團長の指揮に屬せしむるを命じたが。此の軍司令官の彈藥補給を事に先だつて、其手近の第

三師團と砲兵旅團に與へたのは大同意である。兎角此樣なことは少しく油斷すると怠りがちになるものであるが、奥元帥が此附近に於て思ひもかけぬ砲兵第十三聯隊の遲延したる不體裁を實見すると共に、今日及び明日に於ける費消彈藥に聯想を及ぼして、直に臨機の處置を決行したのは頗ぶる機宜に適したるものであると評者は信ずる。

其間に第四師團から還つて來た小野寺參謀の報告で、山嘴屯附近に第四師團の現在せることゝ、今より小東山後南方高地を占領して、大遲延をして居る砲兵の進出を掩護せんとしつゝあることをも知つて。軍司令官は其儘前進を續けて正午五十里堡に達して、そこで少しく休憩して居ると思ひがけなくも南方遙に砲聲を聞いた。それはたしか午後零時半前後であつたが、それが中々少々のものではない般々として遠雷の南天に轟鳴するが如く、時と共に更に愈猛烈を加へて來たのには、軍司令官始め幕僚全體一人としてあつとばかり膽を冷さぬものはなかつた。

元來軍司令官の腹案では、多少のことはあらふけれど、今十六日は兩師團ともに、大砲擊を決行する樣な戰を開くべき筈がないと考へて居た。であるから五十里堡で午食を仕舞て悠然と構へて居り、今一二時間の後第四師團の位置に至り、よく敵情を得たる上に於て明日に於ける兩師團の攻擊命令を下さんと考へて居たのである。然るに突然にも南方遙に第一師團の方面に於て百雷一時に落下するといふ猛烈なる大砲聲の音を聞いたので、こゝに今迄自己が突然なる命令の改正をやつた爲めに、其手筈が所々方々に喰ひ違ひを生じたるを回想して。且つ現に今の先き彼の砲兵第十三聯隊の必死の困難を見たばかりの奥元帥は、さてこそ一大事全く事を誤まつたりと頗ぶる平素の沈著に似もやらず、少かならざる心痛をせられたのは尤至極である。こゝに於てか奥軍司令官は忽ち其心中に於て左の如き判斷を下した

『南方の砲聲は漸次猛烈を加ふ、然るに既に我意圖を了解したる第一師團長の如何にするも今日に於て眞面目の戰鬪を交ゆるの筈なし。想ふに是敵が

聰くも我が第四師團砲兵の遲延せしを偵知して、猛然起つて第一師團を攻撃しつゝあるものならん』

自己が少しく無理なる命令變更を決行し、其結果として第四師團砲兵の非常なる遲滯せるを見て、少なからず心中に自己の命令變更のやり方の適當ならざりしを感じて居たる場合。更に思ひがけなき南方の烈しき砲聲を聞いては、さてこそ敵に各個撃破の手に乘せられたりと、頗ぶる今日の戰況を不利に觀察したのは無理ならぬことて、爲めに所謂疑心暗鬼を生ずることは英雄と雖ども免がれぬ。そこて其戰況の最も不利なる場合に應じ得る如く、此の地に於て直ちに急使を第三師團長に十十十の大至急を以て送り

『貴官は即時內山砲兵旅團長に命じて歩兵第十八聯隊(二中隊欠)及砲兵一聯隊を率ゐしめ、貔子窩——金州街道上亮甲店に向つて急行せしむべし』

といふ命令を下すと共に、元帥は直に其司令部を隨がへて出發し、馬腹の破るゝばかりに拍車を加へて、まつしぐらに第四師團司令部の位置に向つて前進したが。其心の急くことは容易てない大焦りにあせつて前進する中に、午後一時半から二時頃になるとさしもに烈しかりし砲聲も少しく衰ろへて、何となく情況一變の模樣があつたが其儘急進を續けて行くと。午後三時三十分に第四師團長から第一師團の右側支隊が十三里臺子に前進したる報告を得て、此所に始めてやれよかつたと今迄の大心配を消却して、軍を九里庄より大房身の線に停止せしめんとして、直ちに其命令を下してこゝに全く十三里臺子の戰を終了した。

即ちこゝに此の研究の終りに於て、西南の役に於ける熊本連絡以來勇名智名天下に隱れなき奥元帥閣下の處置に關して、且はいふも恐れ多き第一師團長殿下の處置に關して、批評非難がましき言を出すは頗ぶる失禮千萬であるのみか、後輩たる我々のいふべきことではあるまいと思ふが。偏に學問上の研究としてこゝに其非禮を容認するの雅量を切望して、さて今から一言以て此戰鬪の結論をし樣と思ふ。前來既に述べたる如く彼元帥は十三日夜に於て下

せる軍命令を、其後に於てさしたる敵情の變化ありしにあらざるに、其金州附近の敵兵力の多寡不明なる爲めに疑懼を生じて、終にそれを其翌十四日に於て變更せんとするの心を生じたが。其變更の爲めには大なる影響を蒙むるべき所の第四師團の方へは其の意圖を知らせずして、却て大なる影響のない方の第一師團に而己知らせるといふ、固よりそれには都合もあつたであらふが確かに不條理なることをやり。愈十五日各師團が行進を始めると同時に、何等其轉進を必要とすべき奥元帥の意圖をも知らせずして、突然第四師團に西方急轉進を命じたのが、抑此の戰鬪をして頗ぶる齟齬行違ひ而已に終らしめたのであつて。此の一人の軍司令官決心の動搖が其部下全般の師團長以下の下級指揮官の多數の心に其動搖を波及して。一方始め獨力で金州附近の敵兵を擊攘すべく命ぜられたる第一師團長は、既に十四日に於て態々參謀を派遣して軍司令官が其意圖のある所を知らしめたるに關せず。先入主となりし微妙なる心理の作用からして、十六日に眞面目の戰鬪を交へてはならぬとの

軍の希望を熟知して居りながら不明の敵情を威力を以て偵察せんとして、終に少しく其偵察戰が本物になり過ぎ。加ふるに敵が又頗ぶる腰拔けであつた爲め、終に十三日夜最初に受けたる命令の如く、全く殆んど獨力で金州附近を占領して仕舞ふたといふ、軍司令官の意圖外の行動を決行したると同一の結果を來し。更に他方に於ては不意に轉進を命ぜられたる第四師團長は、軍司令官の眞意を知らずして大困難を冒して西進はしたものゝ、これが爲に其編組は一時非常に混亂し。屬せられたる砲兵第十三聯隊の如きは、惡路と急轉進の爲めに其隊伍全く紊亂して、實に手のつけられぬ有樣に陷つた。これ實に軍司令官の豫め其意圖を師團長に告げ置かざりし過失より、此の如き恐るべき大失態を生ずるに至たのであつて。此際若し敵に活眼を有し機動に富める將軍が有つたとしたならば、或は奥元帥の非常に恐怖したる如く、各個擊破の快擧を決行して成功したかも知れぬ。左すれば我第一師團は思ふに其擊退する所となり、第四師團は全く戰機に遲れるに至たてあらふ。而して自

己の決心の動搖より命令變更を行ふたる奥軍司令官は、十六日朝砲兵第十三聯隊の困難と延長と亂雜とを見るに至つて、初めて其命令變更の部下軍隊に及ぼしたる影響の大なるを悟つて。少なからず其善後の策に苦心しつゝ五十里堡に到著すると同時に、南方に猛烈なる砲聲の遽に起るを聞いて、愈〻益〻其の命令變更の過失に敵が乘じたるものと思ひ込み。深くも先の過失を悔悟すると共に其の失敗を回復せんとして、終に内山砲兵旅團長支隊の亮甲店急行を命ずるに至つた。斯くまで沈著なる軍司令官が非常に殆んど狼狽に近い臨機の處置をするに至つたのは、其の命令變更のやり損じを悔ひたのも一つであるが、併しこれは第一師團長が其威力偵察をするといふことを、豫め軍司令官に報告せずして勝手に戰を交へたのが大原因であつて、彼の沈著せる元帥を斯くまで心配させ驚愕させたる罪は決して輕くないと評者は思ふ。斯かる種々樣々なる失態を生ぜざらしめんが爲めには、歩兵操典は其第二部の第十二に於て左の通りのことをいふて居る

『戰況ノ變化ニ應ジ適當ニ動作セシメンガ爲ニハ戰況ノ變化及之ガ爲取リタル處置ヲ絶エズ下級指揮官ニ知ラシメ下級指揮官ハ觀察セシ敵情、地形及自己ノ行動等苟モ戰鬪ニ影響ヲ及ボスベキ事項ヲ速ニ上級指揮官ニ報告セザルベカラズ』

即ち此の十六日の十三里臺子の戰に於ては、軍司令官も第一師團長も更に第四師團長も(これは少し罪は輕いが)此の歩兵操典の教訓を守らなんだ。それが則ち此の樣な初陣の大手違を生ぜしめたのであつて。先づ第一番に軍司令官が操典第二部第四の決心に關する教訓に背ひたのが、此の戰の手違を生ずる抑〻の源となり、それから後は軍司令官も各師團長も同第十二の前掲の條項を閑却したので、各個各別なる行動をなすに至つたのであるが。以上の外に今一つ我軍の計畫に手違を生ぜしめたのは、敵たるフォーク將軍が頗ぶる大なる腰拔けであつて、我が第一師團の威力偵察に腰を拔かして、我が豫想よりも非常に早く陣地を棄てゝ逃げ出したので、愈〻益〻我軍の各師團は一致の行

動をなし得ぬ樣になつたのである。此の戰たる其結果は頗ぶる立派なる第一師團の初陣の勝戰となつて戰史の上に現はれては居るが、併し其の實戰術上から之を研究して見ると少なからざる缺點が連發して居たのは事實である。故に評者は其戰勝の效果の大なるを確認すると共に、其高級司令官の處置の上に置ける缺點及過失と認むべきものを、忌憚なく列記して以て後進に其覆轍を踏まざらんことを望まんとするのである。我れ豈に猥りに言を好まんや我れ豈に高貴の人に對して輕侮の念を抱くの理あらんや。切に評者の誠心のある所を諒とせよ。

更に終りに少しく露軍に就て研究して此回の評論を終らふと思ふが、一體此方面に旅順から派遣されたるフォーク少將は、如何なる任務を課せられて居たかは明かでないが。何故に我が第二軍が鹽大澳附近に上陸し始めたのが頗ぶる顯然たる事實となりしに關せず、少しも其方面に力を用ひずして、相當の兵力を持て居りながら金州附近にまごついて居て、何等上陸を妨害する手段を取るに至らなんだのであるかこれは實に不思議である。最初第二軍が鹽大澳に上陸を始めたばかりの時は、これが本物やらまたは他に眞實の上陸點が、もつと旅順に近く選定せられて居るものやら。或はずつと方面をかへて渤海東岸の方に豫定せられて居て、單に牽制の爲に張家屯附近に上陸を始めたものやら知れぬから。其眞實虛實の知れるまで金州附近で愼重に構へて居て、其騎兵及乘馬獵兵を用ひて之を探せたのは、それは至極適當なる處置のし方であるが。其上陸事業の大規模にして且つ其時日を費やすこと少なからず、確かに日本第二軍が彼の地から上陸するに相違ないと知れた以上は、何とか之に向つて妨害を加ふべきはいふ迄もあるまい。此の鹽大澳から日本の大軍が上陸した以上は、如何に露軍が骨を折つても早晩滿洲にある露軍主力と、此關東半島に居る旅順附近の關東半島守備の露軍とは、全く其連絡を斷絕せられて仕舞ねばならぬ運命に陷ることは目前である。これを一日でも二日でも遲くすればそれだけ旅順守備軍の爲めには利益である。これが爲め

には今敵前に於て大つぴらに上陸しつゝある日本軍に向つて、其上陸を妨害して其事業を非常に手間どらすれば、それだけ主力との連絡を通じ得る時日が延びるのであるから、有らん限りの手段方法を以てこれが妨害に努力すべきである。上陸地點が頗ぶる不便であつて僅かに貔子窩――金州街道以東を占領して、漸くに足だまり而已を作つた上陸軍に、一聯隊でも一旅團でもよいから地理に熟したる混成の一支隊を編成して、之を攻擊しこれを奇襲するといふ樣に、其上陸掩護隊に向つて此方から働きかけていつた場合には。日軍の困難は非常なものであつて、必死となつて危險なる上陸地點の防衛に力を盡して、進で普蘭店の鐵道破壞をやるといふ樣な、はなれわざをやる餘裕が出樣筈がない。斯くして充分に日本軍の上陸を妨げて時日の遷延に勉めて、其間に於て北方よりの物資兵力の旅順搬入を急行して。さて愈日軍全部が上陸して攻勢を取つて前進を始めたならば、それに觸接しつゝ退却して歩々に其前進を妨げ、百方手段を盡したる後に於て金州半島の咽喉を扼したる、堅

固無双なる南山陣地に退ぞいてこゝに其全力を集めて大に日本軍の南進氣勢を挫き、以て旅順攻圍の一日も遲くなる樣にすべきがフォーク將軍たるものゝ當然の任務であらふと評者は思ふ。

然るに同將軍は其胸中に殆んど何等の成案なくして、金州附近へ茫然として出動したるものらしく。種々なる外國より傳はり來る風説に而已聞きをぢして、柳樹屯や大連や或は渤海岸の營城子やへ、無益に兵力をばらまくことを能事としたばかりで。少しも眼前咫尺に上陸しつゝある第二軍には頓著せず、其方面へは獵兵や騎兵を少しばかり出して遠見をさして置くばかりであつて。難攻不落と大自慢をした舌の根の乾かぬ中に、其南山よりずつと後方の大連の波止場を爆破せんと企だてゝステツセル將軍から至急差止めを喰ふといふ樣な、頗ぶる不得要領なる頓間な退嬰主義而已に傾いて居たのは、果してこれ如何なる理由が其間にあつたかは知れぬが、正に明らかに此フォーク將軍の大凡愚等大腰拔けを發揮したものと看做すが至當であると評者は思ふ。此

樣な大油斷の間に我奥元帥は著々と大困難を排して上陸諸事を完了し、其主力を北方に向はしめたる上に、其第一師團を以てフォーク將軍に對して南進せしめたが。此の場合になつて更に旅順から相當なる兵力の增加も到著して、十三四日頃には步兵約四聯隊、砲兵約四五中隊を其手中に握つたに關せず、漫然として十三里臺子より大和尙山に至る廣大なる正面を占領して、我第一師團の進んで之に迫るを待ち。此の大切な場合に至つても尙ほ且つ無用なる大連や柳樹屯や南山に大なる兵力を構へて、此の大房身附近の陣地に於て、我が第一師團の進來を充分に苦しめ樣といふ策に出でず。第一師團が五月十七日の攻擊の爲めに、十六日にほんの試驗的の威力偵察をやつて見たのを、頗ぶる大なる本攻擊の襲來と誤認して。力を盡して日本軍の進來を抗拒するの策に出でずして、忽ちにして退縮して逃げ出して仕舞たのは實にいはふ樣なき、腰のない腑甲斐ない將軍のやり方ではないか。

戰史の記載する所によるとフォーク少將は、自己の指揮する東狙兵第四師團と、增援として到著した東狙兵第十五聯隊、砲兵三中隊を以て此地を守備して、其一支隊を以て北方に向ひ威力偵察をなすべくステッセル中將から命ぜられて。何等敵も居らぬ三十里堡の方に向つて威力偵察を行ふたが、十四日此の偵察の實行の途中に於て自己の判斷の全く誤れるを覺知して、演習と誤魔かして其行動を中止したといふとであるが。少なしと雖ども若干の騎兵もあり、又騎兵に代るべき少なからざる乘馬獵兵もあることであるから、上陸したる日本軍に對し今少し詳細に敵情に通じて居らねばならぬ筈である。然るに此十四日に於て三十里堡に有力なる敵が居ると考へて、之に向つて威力偵察をやりかけて後に其空虛なるを知り、これを演習にして仕舞てれ隱しをしたといふのが果して事實であつたとすれば、最早これ以上この將軍を追窮するの必要はあるまい。此大切な金州附近に在つて日軍の上陸に付き全責任を以て之を搜索して居りながら、僅か二里か三里の金州北方の三十里堡に敵の在否さへも知らぬ迂濶ものである。其の行動が何れも何等の理由なかり

しは至當である。がそれにしても露軍は實に惜しいことをしたものである、若し少しく機動に富んだる有爲な將軍が此任に當つたならば、五月初めに日軍が上陸を始めた時から油斷なく張家屯附近を監視して、愈〻此所が本上陸點といふ見とめがついたならば。即ち五月の十日以前に於て步兵一聯隊又は一旅團を基幹とする、諸兵聯合の一支隊を此方面に派遣して、無暗矢鱈に上陸軍に向つて妨害を加へたことであらふ。左すれば如何に日軍がこれが爲めに苦惱せしめられたか知れまい。斯くして其の上陸に時日を多く費やさしむるを勉めて、愈〻彼が上陸を終つて前進を始めたならば、此の敵と常に接觸を保つて步々退却し、到る處に其前進を阻碍して退却を續行し。金州東北の陣地に於て少し手强き防禦をして、敵にこれを破るが爲めに又々其の準備に時日を費やさしめて。敵が愈〻眞面目にこれを攻擊して來たならば、適當に見切りを附けて遲れぬ樣に南山陣地に引き揚げて、此所で其有する丈けの全力を盡して、彼の難攻不落の誇稱をして事實實際たらしむる如く堅忍頑强に防禦するのである。多分少しく戰術眼のあいた人が此の金州支隊の指揮をしたならば、以上の如く行動したであらふと思ふ、これ實に決して出來難い程困難なことではない。然るに全然不得要領なることをやつてのけて仕舞たのは、何ぼう露軍の爲めには遺憾千萬殘念至極のことであつたらふ。彼れフォーク少將は戰後本國で軍法會議にかけられ其官職を剝れたが、先づ〳〵それ位の御處分を受けても決して不足はいへまいと思ふ。これに就けても我々軍人たるものは所謂『爲さゞる』と『遲疑する』といふ二大禁物を十二分に戒めて、假初にも此樣な失態をせぬ樣に平素くれ〴〵も注意するのが肝要である。

宿二七里莊ニ

和尙山頭月一痕〇清光如雪滿荒原ニ〇
悠揚吹出胡人笛〇聲在金州城外村ニ

成仁

大正三年五月二十三日印刷
大正三年五月二十六日發行

戰史評論奥附

著者　無名戰士

東京市麹町區平河町四丁目十一番地
發行者　宮本林治

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷者　白土幸力

東京市麹町區平河町
發行所　宮本武林堂
振替東京一〇九一二

不許複製

講兵

第一卷
（十二冊合本）

製本洋製脊金文字
價　一圓四十錢
郵税　内地十二錢
　　外地三十錢

本書ハ前後十二ヶ月ニ亘リ講兵指導各官ノ其懇切ナル指導ニ依リ全軍中最モ熱心ナル百數十名ノ答解者ガ、甲ハ熊本及久留米一帶ノ地方、乙ハ伊丹及茨木ヲ中心トスル地方ニ於テ甲、乙七想定二十四問題ニ對シ變化窮マリナキ攻防ノ術ヲ支隊ヲ用キテ圖上ニ於テ論難研鑽シタルモノニシテ、又難解若ハ誤解シ易キ原則ノ解説及有益ナル質議ノ應答ヲ掲載セリ、以テ應用戰術研究ノ爲メ絶好ノ資料ナリトス。乞フ一本ヲ座右ニ備ヘラレンコトヲ。

發行所　東京市麹町區平河町二一九〇一　振替東京　宮本武林堂

獨露佛日　四國戰鬪原則對照

體裁菊版洋布製
價八拾五錢

本書ハ『講兵』指導諸官ガ、既往一年有半ニ於ケル間研究諸氏ノ提出ニ係ル答解作業ニ就テ、原理原則ノ理解應用上ニ於テ大ニ感ゼラルヽ所アリ、百方考慮ノ末此缺陥ヲ補フベク、公務多端ノ間幾多ノ苦心ト熱誠ヲ籠メテ四ケ國ニ於ケル或ハ操典、或ハ戰術學教程、或ハ戰術教科書、或ハ戰鬪教令中其粹ヲ拔キ、之ヲ各原則毎ニ類集對照セラレタルモノニシテ寔ニ戰術研究上全ク得難キ寶章ナリ。切ニ諸公ノ座右ニ勸ム。

發行所　東京市麹町區平河町二一九〇一　振替東京　宮本武林堂

講兵會校纂　馬城生著　●代金ハ前金ヲ振替口座ヘ拂込ミヲ乞フ

第三版

原則之圖示

第一篇　戰鬪一般ノ要領附諸兵種戰術
第二篇　攻擊ノ部
第三篇　防禦ノ部
第四篇　持久戰、夜戰、追擊、退却ノ部
第五篇　局地戰ノ部

須要ノ問題凡ソ壹百五十ヲ選ミ之ヲ最モ正確ニシテ鮮明ナル三色刷石版印刷ト爲シ其圖示シ難キモノハ註記ヲ以テス

體裁四六版二倍大
製本上等洋布製美本
定價壹圓五拾錢
郵稅內地八錢
外地拾貳錢

戰術ノ研究ニ於テ最モ直覺的理解ヲ得ルハ簡略ナル圖示ニ依ヲ以テ最善最良ノ方法ト爲スハ苟クモ戰術研究ニ志ス人ノ等シク否認シ能ハザル確定ノ事實リ然レドモ文章ヲ以テス戰術書ノ汗牛充棟シ啻ニナラザル反シ未ダ圖示的戰術書ノ隻影ダモ見ハザル抑モ何故ゾ蓋シ其事業ノ容易ナラザルモノアレバナリ著者深ク之ヲ遺憾ト其多年摯實ナル研鑽ト慘澹タル工夫ト成レル本書ヲ『講兵會』ニ提供シ該會ニ於ケル指導官五氏ノ熱心ナル合議的批評ヲ經テ公開シ以テ我軍學界多年ノ渴望ヲ醫セラレタル未曾有ノ一大福音ナリ切ニ愛讀ヲ希フ。

發行所　東京振替　東京市麹町區平河町二ノ一九　東京市麹町區平河町二ノ一九　宮本武林堂

成仁武夫　無名戰士共著　●代金は前金を振替口座へ拂込みを乞ふ

戰史評論

第一卷完　成
第二卷分冊續刊

嚴正なる批評と。壯快なる戰さ物語と。鮮麗なる繪卷物とを兼備せる。世評無類なる

◉第一卷　目次　定州騎兵戰　鴨綠江戰鬪其一　鴨綠江戰鬪其二　南山戰鬪　得利寺戰鬪其一　得利寺戰鬪其二　檜樹林子戰鬪　大要　樣子嶺戰鬪　三塊石山夜襲　萬寶山敗戰

第一卷　價　郵稅　內地二圓　外地二十二錢　分冊一冊二十錢

第二卷　郵稅　十冊前金二圓（無遞送料）

◉第二卷　毎月一回分冊出版但シ第一回ヨリ連續購讀者ニハ第十回目ノモノト共ニ表紙ヲ贈呈ス

公平の前に强敵なく、至誠の向ふ所鬼神も之を避く、萬古不易の戰略戰術の原理と、晝夜兼行の兵器軍事の進歩とを標準として、親疎を論ぜず權貴を憚からず、侃々諤々嚴霜烈日の如き筆鋒を揮ひ、以て日露戰役に對して明快直截なる大結論を與へつゝある、本堂發行の戰史評論は、既に第一卷を完成し、引續き分冊第二卷を刊行しつゝあり。本書が大正二年軍事出版界唯一の發行高を占有し、比肩するものなき盛況を以て第一卷を完成したる如く、此第二卷も亦本年出版界の白眉たるべきは、既に陸軍大學校に一百に近き熱心なる愛讀豫約者を有すると共に、英國大使館を始めとして獨佛其他各國大公使館武官、就中軍事研究の爲め我國在留中の英獨佛等の、武官の發刊期日を待ち兼ねつゝ競ふて之が研究に熱中するに見、又畏くも各武官の宮殿下より毎回御買上の台命を拜しつゝあるに徵しても、本堂が確信して疑はざる所なり。伏して大方の一覽を希ふ

發行所　東京振替　東京市麹町區平河町二ノ一九　東京市麹町區平河町二ノ一九　宮本武林堂

如風居士著　●代金は前金を振替口座へ拂込みを乞ふ

戰史摘例

步兵操典證解

全三冊

總紙數千三百餘頁
引證戰例戰話約六百條
戰鬪實況繪畫六十葉
地圖戰圖大小五十二枚
製本本綴洋布製最美本

價一部　四圓五拾錢　毎冊　壹圓五拾錢　內地郵稅　一部二十錢　毎冊拾貳錢

第一卷綱領第一部　第二卷　戰鬪一般ノ要領、攻擊、防禦、追擊及退却　第三卷　夜戰、持久戰、山地、河川、森林、住民地ノ戰鬪、他兵種ニ對スル步兵ノ動作

我操典の條項は本書によりて頗る易解且つ耽讀手を釋く能はざる好讀物と一變し了れり、即ち其意義を講釋する爲めに、快刀亂麻を絶つ底の筆鋒を揮ひ、更に其理由を證明するが爲めに內外古今多數の戰例就中日露の最新戰役を、最も多く最も適切巧妙に引用し、一々不動如山の大鐵案を下し、一見其原則のよりて生ずる所以の根原を知得せしむる而已ならず、內外有名な戰畫の尤物多數を網羅して一層讀者の興味感激を甚深ならしめんと勉めたる我日本は勿論殆ど世界萬國にも其比類を見ざる良著と稱する躊躇せず、果せる哉本書を一讀せ、當時の英國大使館武官ソマーヴィール氏、獨國大使館武官ベルネ井ツ男爵及佛國大使館武官ベルタン大尉は何れも大賛辭を贈りて、著者が多大の勞力に酬いられたり、寔に必讀の最好著なり。切に愛讀を冀ふ。

發行所　東京市麹町區平河町　振替東京一〇一九〇二　宮本武林堂

豫告　六月刊行　戰史評論　第十六回（饒陽邊門附近の防戰）

戰史評論第十四回中正誤

一六九頁中「長谷川戍吉少佐（現中佐）」は「故長谷川戍吉少佐」の誤りにつき訂正す

大正三年六月（驛陽邊門附近防戰）

戰史評論

大正
3. 7. 7
內交

宮本武林堂發行

戰史評論

成仁武夫補
無名戰士評

第十六回　鏧陽邊門附近の防戰

第一軍は鴨綠江の戰勝後漸次其軍を進めて、鳳凰城附近に其三個師團を集結して前進の準備に熱中して居たが。これと同時に敵は其東部兵團の主力を分水嶺附近に置きて、我が此の第一軍と相對峙せしめて居ると共に、其多數なる騎兵を利用して遠く我が右側に派遣し、我が軍情を搜索せしむると同時に第一軍の右側を脅威せんとして。時は正に五月の二十四日鏧陽邊門の方からレンネンカンフ少將の指揮する騎兵約千五百は、我が第十二師團の右翼に間近き大堡から西小堡附近まで侵入して來て、頻りに我が軍の右側を危險な

らしめるに努めたのである

此の鬚陽邊門から西小堡附近まで侵入して來た敵騎兵の爲めに、直接には軍の右翼にある第十二師團の右側が頗ぶる油斷出來ぬのみか。間接にはずつと其東北に派遣してある寬甸を守れる吉田中佐の後備兵より成る支隊と軍との間は、殆んど此の敵騎の爲めに遮斷せられて少なからざる危險を感ぜざるを得ざる情況を呈して來た。然るに黑木軍司令官の計畫する所に於ては、軍が更に鳳凰城から遼陽方面に前進するに方つては、必ず其一部を以て賽馬集街道を前進せしめて、敵の分水嶺附近にあるものゝ左側背に迫らせ樣といふ考案であつたので。それが爲には賽馬集又は鬚陽邊門に、豫かじめ多量の糧秣を集積するの必要ありと考へて居た場合であつたから、此我が右翼に對する敵騎の脅威的動作を擊攘して、我が右側を安全にすると共に、更に前進に方つて必要なる糧秣を賽馬集街道上に集積せしめんとして。こゝに第十二師團より一部隊を此の方面に派遣することになつて、其派遣の任に當つたのは

誰れあらふ當時歩兵第十二旅團長たりし佐々木直少將(現中將)であつたが。同少將は五月二十六日に此の命令を受けて歩兵第十四聯隊と騎兵一中隊(二小隊欠)砲兵一大隊(一中隊欠)工兵一小隊、衞生隊半部、歩砲彈藥半縱列及糧食半縱列を率ゐて、五月二十八日迄には鬚陽邊門を占領して軍の右側を掩護すべく命ぜられたのであるが。此の命令を下したる五月二十六日に於て黑木軍司令官は、昨廿五日鬚陽邊門に約四千の敵騎兵が居り、又同地から鳳凰城に通ずる街道上の太平嶺には砲八門あるものゝ如き敵情を、諜者の言によりて承知することが出來たので。或は佐々木支隊の兵力が少な過ぎはせぬかといふ杞憂を起して、其砲兵二中隊を一大隊に增加すると共に、在寬甸の吉田中佐の支隊の主力をも同時に鬚陽邊門に向つて進ましめて、佐々木支隊と協力してこれを占領せしめんと計畫した。

然るに吉田中佐の後備歩兵第四聯隊の一部に騎兵若干砲兵一中隊を混成したる支隊は、二十八日佐々木支隊より早く鬚陽邊門に迫り、僅かに佐々木支

隊の騎兵が同地南方大甸子門附近に到著するかせぬ頃に於て、殆んど獨力を以て甕陽邊門を占領してくれたので。途中鐵佛寺で一泊したる佐々木支隊は、骨を折らずに甕陽邊門を所命の五月二十八日に易々と占領して、此所に第一軍の右側を掩護すると共に、大に地方の車馬を徵發して例の前進準備の糧秣を、同地東方約一里半の車古嚕跑に盛に集積し始めたのである。

此前後に於て敵は依然として遠方に退ぞかず、賽馬集附近に其主力を置いて頻々と所々方々から甕陽邊門を窺がはんとし、且つ進んで師團主力との交通をも危殆に陷らしめんとする有樣なるを以て。毎日小企圖の敵襲に惱まされ其警戒の煩冗なるに堪へない景況となりかけた佐々木少將は。思ひ切つて一度前進して賽馬集に居る敵の騎兵に大打擊を與へて、これを遠方に遁逃退避せしめて、以て此の煩雜極まる警戒の勞を避ける樣に工夫するが最大急務であると考たので。六月四日に於て直屬長官たる第十二師團長に對して、賽馬集を攻擊して敵を遠く擊攘し、更に甕陽邊門に歸つて前任務を續行せんとするの意見具申をしたのであつた。然るに師團長は大にこれに贊同の意を表して認可を與へ、且つ軍司令官もこれを利用して丁度此時運動を起さんとする、淺田支隊の岫巖方面への行動を秘せんとしたので大にこれに同意してくれて、第十二師團長に命令する所があつたので。同師團長は佐々木少將に向つて六月七日を以て該敵騎を攻擊し、八日は一日賽馬集に駐まるべき旨の師團命令を、六月五日即ち意見具申の翌日に下したのである。そこで佐々木少將は六月七日に於て豫定の通り甕陽邊門より賽馬集に前進して、思の儘に該地の敵を擊破してこれを遠く北方に掃攘し、同夜は同地南方に宿營して翌八日騎兵を放つて敵の退却方向を搜索せしめたる後、師團長の希望の通り八日一日を此他に過ごして、翌九日賽馬集を出發して同日午後二時に甕陽邊門に歸還し、同地に於て依然前任務を繼續して軍右側の掩護と、糧秣の集積とを晝夜油斷なく續行して、六月中旬頃に至つては支那車輛一千餘を徵發し得て、師團に對する十日量の糧秣を車古嚕跑に集積し得た。

敵の騎兵が遙かに迂回して我が軍の右側を脅威するに方り、我が其右側を掩護する爲めに遠く佐々木支隊を鏖陽邊門に遣はして、軍に全く右顧の患なからしめたる黑木將軍の此處置は適當である而已か。單に此の有力の支隊を其敵騎の見張り番人而已に無益に使用せずして、軍將來の前進に方り一部を分進せしむべき此の賽馬集街道の一地點に、糧秣集積の任務をも兼ねしめたのは實に一擧兩得の策であつて、此の佐々木支隊の派遣は確かに頗ぶる機宜に適したる巧妙なるやり方であつたと評者は思ふ。又六月の七日に於て警戒の煩を避ける爲めに賽馬集攻擊を企てたる、佐々木少將の意見具申も申分なき決心であつて。其意見具申を利用して丁度此時岫巖の方へ赴援せしめんとしつゝあつたる、淺田支隊の行動を全く敵に秘する樣に巧みに應用したる黑木將軍の帷幄の運籌畫策は、他に餘りに類例のない頗ぶる巧妙を極めたる作戰の指導のし方であつて。爲めに敵は全く此の淺田支隊が第一軍から岫巖方面に分派されたることを、其當分の間は少しも知らなんだらしいのであつて、

これ等の諸行動これ等の諸計畫は一として評者の稱賛に價すべからざるものはないと思ふ。斯く其計畫が頗ぶる巧妙に實行せられたので右側の掩護も適當に確になり、又希望の通り其糧秣の集積も著々として奏效したのである。

前にも述べた如く此の鏖陽邊門は、稍〻遠く我が第一軍から離れて右方二日行程の地にあるのであるから、前述の如く一度大に敵の騎兵を擊攘閉息せしめたものゝ、敵は多數の騎兵を利用してなほ懲りずまに頻りと此の方面に出沒するので、何時如何なる方面から不意の襲擊を蒙むるかも知れぬ情況であつた。からして佐々木支隊は其警戒も頗ぶる常規と異なつたものであるのみか、多くの場合敵の大兵力が進來すべしと豫察し得る方向は、矢張賽馬集に通ずる本街道の外にないと考へたる佐々木少將は。鏖陽邊門の西方王家堡子北方高地より王家堡子を經て、左方大甸子門に至る間に防禦陣地を選定して、これに堅固なる防禦工事を施こして防備をさ〳〵怠る所なく、且つ其前哨の如きも非常に愼重なもので所謂野營前哨式を用ひて、全く四方八面に向つて

警戒線を設けたのである。即ち其の佐々木支隊の警戒のし方を一つこゝて研究して見樣と思ふが、戰史には其委細が記載してないけれども第一卷の附圖第八に就いて見ると、大略其前哨警戒の方式が知れると思ふから、これを標準として此の警戒を研究することにし樣と思ふ。鬱陽邊門は四方八面に警戒をして居たのは事實であるけれども、勿論主要なる敵方としては矢張り寨馬集の方に重きを置き、此方面を主要なる前哨地區としたのはいふ迄もないのである。

防禦陣地の研究は跡と回しにして後に此地の防戰の研究と共にすることにして、さて今から此地に於ける前哨の警戒に就て研究の歩を進めるが、佐々木少將は寨馬集方面に對する主要なる前哨地區を二分して、其右方を一前哨本隊に負擔せしめ、前哨中隊を韓家堡子に出して、新開嶺奈馬嶺兩道を監視せしめて、其前哨本隊を劉家堡子附近に置き。更に其左方を一前哨本隊に受け持たしめて、其前哨中隊を三岔子溝附近に出して、潘家堡子溪谷に通ずる

道路を主として監視せしめて、黄家堡子及其附近に前哨本隊を位置せしめた。勿論これは六月十八日敵が大に其兵力を寨馬集に集めつゝあるの報に接し、それを軍に報告した爲めに師團から增援が來た後の配備であるから、此の强大になりつゝある敵に對して主として警戒すべき方面に二前哨本隊を備へて嚴重に警戒したのは先づ〳〵至當といふてもよいのであつて、これで多少有力なる敵が襲來しても支隊が充分に其豫定陣地へ就くの時間を得るに懸念はないと思ふが。此の六月二十日到著した歩兵第四十七聯隊の旅團長の手に戻つて來る迄は、佐々木支隊の歩兵は小倉の第十四聯隊一個聯隊に過ぎぬのであるから、若しその場合にも附圖第八の樣な配備をして居たとすれば、それは大なる過まりたる警戒のし方であると思ふ。がそれは戰史の上には何等の記載もないことであるから多分此の增援の來る迄は、黄家堡子附近に一個大隊を進めて、それを前哨本隊として此の前哨本隊をして韓家堡子方面も、亦た潘家堡子溪谷方面も共に監視せしめて居たものと推定する。以上の推定に

して誤まりなしとすれば此の主要なる敵方面に對する警戒は充分である、が併しこゝで評者が一言したいと云ふことは、此の場合に於ける警戒はたしかに充分ではあるが、過ぎたるはなほ及ばざるが如しと孔夫子が子貢を戒めたる如く。一體此の佐々木支隊の警戒は餘りに充分に過ぎはせぬかと思ふ、陣中要務令第百三十四に『(前略)警戒ハ敵軍ニ近ヅクニ從ヒ益〻之ヲ嚴ニスルヲ緊要トス』とあり、又『前哨ハ敵ノ小企圖ヲ排除シ眞面目ノ攻擊ニ對シテハ之ヲ抗拒シテ休止ノ軍隊ニ戰鬪準備(中略)ヲ整フルノ時間ヲ與ヘ』と掲げてありする所から考へると、速力偉大なる敵騎兵を相手としてそれが餘り遠くない賽馬集に集合しつゝあるのであるから、隨分と大なる兵力を用ひて警戒するがよいとは思ふものゝ、同令第百三十八に

『前哨ハ常ニ完全ナル戰備ヲ整ヘ敵襲ニ對シテハ全力ヲ竭シテ抗戰セザル可カラズ』

とある所から考へて見るといふと、前哨に當つた部隊は全力を盡して警戒の任に就かねばならぬのはいふ迄もあるまい。然る時に於てはこれが一日か二日のことであれば兎に角、この先何日間敵と相對峙せねばならぬか知れぬ此の場合に於て、全歩兵の三分の一に殆んど徹宵不寢番をする程に骨の折れる、前哨の任務を負はしめるといふことは、評者は頗ぶる無益に兵力を疲憊せしむるの過失に近くはあるまいかと思ふ。二日置きに一晝夜眠むらぬ樣な勤務を課せられては、如何に體力の强健なものでも一ヶ月も其樣な狀態が繼續すれば、必ず神經衰弱性を惹起するは免れ能はぬ數であらふ。果して然りとすれば此の樣な支隊が此樣な大兵力を前哨に用ゆるのは警戒としては元より申分はないが、兵力愛惜の點からいふて見ると確かに一つの過失たるを免れない。評者の考を以てすれば騎兵も一中隊附屬せられてあることであるから其騎兵を以て奈馬嶺、新開岑、潘家堡子溪谷等の、主要なる敵に通ずる道路を遠く搜索警戒せしめて。さて前哨に任ずる歩兵部隊は可成兵力を減少して、それに全力を盡して嚴に警戒の任に當らしめるがよいと思ふ。即ち歩兵一大隊

を黄家堡子地方無名廟のある高地附近に占位せしめて、一前哨中隊を韓家堡子方面の警戒に當て。他の一前哨中隊を三岔子溝方面の警戒に當てゝ、陣中要務令第百三十八の『(前略)前哨各部隊ハ常ニ所要ノ工事ヲ爲シ且ツ各部隊間ニ通信連絡ノ設備ヲ爲スコト必要ナリ』とある原則を遵奉し、前哨中隊も前哨本隊も堅固に所要の工事を其陣地に施こして。其前方に出したる騎兵並に前哨及び支隊本隊との間には、爲し得る限り通信を迅速ならしむる爲めに傳騎、遞騎、記號、信號又は電話等を以て相連絡するに勉めたならば、一大隊を以て警戒の任に當らせても確かに現在二大隊で守つて居た警戒面は、評者の考では確實且つ嚴密に負擔し得たてあらふと思ふ。況んや此場合は鬚陽邊門西方には既に數日前より防禦工事が構築せられて、支隊豫定の陣地は堅固に出來あがつて居る而已か、其陣地と支隊の宿營地とは何れも二千米突以内てあるから、警急集合をすれば四十分乃至一時間の後には全兵力を陣地に就かしめられるのてある。此樣に後方の準備も整頓して居る以上は無益に大なる前哨

を設くるの必要は少しも認めぬ。又當時此前哨兩本隊ともに其警戒に任じたのは一前哨中隊てあつた、左すれば一前哨本隊から二中隊を出して警戒せしめたのと、其警戒に於ては何の相違もないてはないか。或は支隊が陣地に就き戰備を整ふる迄敵を拒止する爲めに大兵力の前哨が必要てあるといふかも知れぬが、それが爲には遠く騎兵を出して新開岺又は奈馬嶺等の要點を占めさして居れば、少なくも一時間位前には敵襲の報告は支隊長の手に到著する筈てある。左すれば工事に據れる一大隊の前哨が一里以上距だゝれる前哨の位置に於て頑强に抗拒し、力及ばざるに至つて歩々退却しつゝ敵の前進を妨碍してさがつてくる間には、餘程裕長に構へて行列式に陣地に就いても、決して間に合はぬといふ樣な不意な襲擊に出合ふ懸念はない筈である。何れにしても本防禦陣地たる鬚陽邊門西方まで、前哨は退却せしめねばならぬものとすれば、我が本陣地前に大なる兵力を展開して退却しつゝ陣地に就くといふのは、志氣の上からも實際防禦戰鬪の上からも頗ぶる不利てあると思ふ。

斯く論じ來つたならば此の場合に於て二前哨區を設けたる警戒は過大にして確かに餘りに用心深かきに過ぎて、却て無益に兵力を疲憊せしむるの誹謗に遭ふも一言の申開きもあるまいと思ふ。啻にそれ而已ではないまだ〳〵此の支隊の用心深きに過ぎた警戒法は、單に一方敵に對する主要なる方面而已ではなく、北方約二里の近家堡子方面の警戒に一中隊と、同じく同距離の柏林川に警戒の爲めに一中隊を用ひて居る而已か、東は車古嚕跑東方白洛斜子溝にも一中隊の警戒兵を出して居る。即ち此の佐々木支隊は二大隊と三中隊約支隊の歩兵二分の一を警戒の爲めに用ひて居る、斯の如きは如何に用心深いとはいふものゝ程度をはづれたゆき方である、實に石橋兩杖以上のやり方であると評者は思ふ。永く敵と相對して此の鐵陽邊門を守備して軍の右側を掩護すると共に、其前進の爲めに糧秣の集積を任務とする此の支隊は、其此處を守るべき時日の長かるべきは想像し難くないことであつて。其長時日間の勤務に當るべき支隊が、斯く程度以外に過大な警戒法を取つた日には、敵と戰を交ゆるに至らずして疲勞の爲めに忽ち兵力を損耗せしめるは目前である。上番下番、上番下番と一晝夜置きに前哨に當てられる程に勤務が繁劇では、他人は知らず他國人は元より存ぜぬが評者などの使用したる日本の兵隊では、到底一週間とも其健康を保つて勤務することは出來ぬと思ふ。失禮なる申分の樣ではあるが兎角此の佐々木將軍は萬事に付て餘りに用心に過ぎはせぬか?、此前哨のこと而已に限らず此將軍の戰鬪のやり方には、常に此用心深か過ぎるといふ弊がなかつたか?、評者は『否々決して然らず』とこの疑問に對して左なき所以を辯明するの材料を有せずして、却て其用心深きに失するの材料の多くを提供するの自由を有するを遺憾とするものである。但し陣中要務令第百八十五の第二項に

『敵ニ接近シ永ク相對峙スルトキハ一層警戒ヲ嚴ニシ前哨線ハ相連絡シテ空隙ナキヲ要シ云々』

とあるではないかといふ人もあるであらふが、それは大に場合が違ふのであ

つて陣中要務令が戰鬪準備前哨といふものゝ中に、前掲の如き條項を設けたといふのはいふ迄もなく、沙河の對陣とか又は旅順の要塞前哨とかの如く常に敵と咫尺の間に相對峙して、我情況も頗ぶる詳細に敵に知られて居る樣な場合のことで。よしや敵は近くに居るといふと雖ども其主力は十里内外の遠方に居り、敵の出沒變幻極まりなしとはいふものゝ、決して油斷も隙きもならぬといふ危急に瀕して居る情況ではないのであるから。今掲げたる條項を以て此の場合を律するのは間違ひてある。況んや此の場合に我と相對するものは多くは敵の騎兵である、場合は少し違ふけれども陣中要務令第百三十九には

『敵軍ト未ダ甚シク接近セズ主トシテ敵ノ騎兵ニ對スル顧慮アルニ過ギザル情況ニ於テ行軍ヨリ宿營ニ移リ翌日更ニ行軍ヲ繼續セントスル軍隊ハ單簡ナル方法ニ依リ警戒セバ可ナリ』

とある通り、此支隊は移動するのではないけれども、其相對する敵は確に此

の條の示すと同樣なる敵の騎兵であるから、決して戰鬪準備の前哨を設けて最嚴重なる警戒を爲すべき場合でない。としたならば其支隊の主力たるべき歩兵の二分の一に近い兵力を全く警戒に用ひ盡すといふのは不穩當である、固より前哨に當つたといふても前哨本隊の如きは休めもすれば寢られもする、からして疲勞の極々甚だしいのは陣中要務令第百七十三の第三項に

『小哨ニ在ル者ハ夜間睡眠セザルヲ本則トス』

と規定せられたる所の小哨の外はさして疲勞する筈がないといふものもあらふ。けれども『自分は前哨に任ぜられた』といふ一事唯それだけても責任を重んずる軍人は、決してをち〳〵と眠むることの出來るものでない、自分の油斷が全支隊の死活問題に大關係があるといふことを眞面目に自覺して居る以上は、よしや後方遙かなる前哨本隊にあつて安眠し得る場合でも、心の中には少しの隙も油斷もこしらへて置くことは出來ぬのが當然である。からしていふ迄もなく歩哨や小哨よりは樂であつても其疲勞は決して僅少なもので

ないのである。然らば此の場合外に致し方があるか行軍前哨では餘りに簡略に過ぎる樣であるし、それかといふて戰鬪準備前哨としては餘りに手重も過ぎるとすれば、如何なる方法を以て警戒するがよいかといふと、陣中要務令第百三十六に曰く

『前哨ノ任務ヲ盡ス爲メ採ルベキ方法ハ情況ニ應ジ定ムベキモノニシテ百般ノ時機ニ適用シ得ベキ法則ヲ一定シ難シ故ニ前哨ヲ設クル毎ニ部署、隸屬ノ關係、勤務ノ方法等凡テ其時ノ景況ニ從ヒテ定メザル可カラズ』

此の一條で明白に其場合に應ずる方法の如何を、一に指揮官其人の考に任せてあるのを知ることが出來樣。而して評者は前にも述べたる如く一前哨本隊を以て警戒せしめてそれで不充分なことはないと考へる。これは主なる敵のある西北方面の警戒に對する評者の意見であるが、それでは他の方面はといふとこれも隨分惜しげもなく兵力が徒費せられて居ると自分は思ふ。即ち重大なる任務の一たる車古嚕跑に既に師團十日に近い糧秣を積んだとしたならば、此所に一中隊の直接守備兵を配置して、其大切なる糧秣の保護に任ずると共に此方面の警戒をも兼ねしめたのは至當であるが。柏林川、近家堡子の北方面へ歩兵二個中隊を用ひたのは頗る兵力の濫用であるといはねばならぬ。評者の考では此所には至急の報告を呈する爲に、傳騎一二騎を附屬したる一小隊内外の獨立の小哨を遠く配置して、それで十分に此の方面の警戒は出來ると考へる。或は今少し簡略にすれば南部柏林川附近に一小隊を配置し、それから絶へず斥候を北部柏林川及近家堡子の方向へ派遣するか、或は下士の長たる二斥候を此の兩地に停止せしめて、急射擊等を以て大敵の襲來を報ぜしめても危險を豫防するに足ると思ふ。であるから評者の考案の如くすれば、西方面黄家堡子附近に一前哨本隊と、北方面近家堡子、柏林川に各一小隊、東方車古嚕跑附近に一中隊を配置すれば十分であるので。斯くすれば警戒の爲めには約一大隊半を用ゆれば足ることになるから、全歩兵の約四分の一を使用するので、四日目に一日の寢ず番は決して樂といふことはないが、過度な

る疲勞を兵隊の身體健康に迄及ぼすには至らぬ。左すればよしや一ヶ月二ヶ月半年に渉るとも、此の地の警戒を少しも倦怠せしめず勉勵して勤めさせられ樣。餘事の樣ではあるが餘りに警戒の配備が無益に嚴重に過ぎる樣に感じたので、陣中要務令の新に發布せられたる今日此頃、少しく此點の研究に付て筆を走らせて見た迄である。からして評者の考案も固より的確に實際には中つて居るまいと思ふが、併し附圖第八に於けるが如き支隊の力に相應せぬ樣な佐々木將軍の警戒配備は、評者ならずとも何人もこれを否認するに躊躇するものはあるまいと自分は信ずるのである。

さて少しくお話があと戻りをする樣であるが、佐々木少將は去る五月二十八日から步兵一聯隊、騎兵一中隊、砲兵一大隊、工兵一小隊其の他衞生隊、糧、彈縱列等の一部を率ゐて、靉陽邊門に滯留して任務の達成に盡瘁して居たが、餘りに敵の近所に出沒するのが五月蠅さいので堪へ切れず、六月七日、八日、九日と三日掛りで賽馬集の敵を掃蕩したので、其の後は少しく此の小企圖の敵騎の

出沒は減じたか。九日賽馬集を棄てゝ豫定の如く靉陽邊門に歸還すると共に、敵は再び同地附近に進入し來りて六月中旬には、其兵力が步兵約四千、騎兵約二千、砲八門位は確かに居るとの評判であつたが。六月十八日信ずべき土民の言によれば昨夕即ち十七日夜、敵の步騎兵約五千、砲八門は賽馬集に進來し、現に其一部は新開岺西麓の長山子、及近き下潘家堡子の溪谷に現出したのを見たので。敵の活動が少しく活潑になりかけて來た傾向を察したる佐々木少將は猶豫することなく、右の情報を直に軍司令官に呈出するに至たのである。

現在の狀況に於て此の敵情は左して危險と認むべき程のものではない、佐々木技隊もかつ〳〵これと相對峙するに足るべき兵力は有して居る。けれども著しく此方面から騎兵を以て脅威せられた場合には、右側が危險である爲めに軍は現在の地から前進することが頗ぶる困難である而已か、佐々木支隊と第十二師團の間には二日行程の距離があり、その上に大切なる糧秣即ち前進の爲めの非常に大切なる準備の糧秣が師團十日分も積んである。若し敵が

多くの騎兵を持つて居るのを利用して、急に靈陽邊門を强襲する樣なことが有つたとしたならば、それこそ實に今迄の苦心慘憺たる計畫は全く水泡畫餅に屬するのである。深謀にして遠慮なる黑木將軍何として此所に氣の付かぬ筈があらふや。今現在受領したる敵情報告では未だ佐々木少將に增援を與ふるには餘りに早過ぎる樣ではあるが、若し萬一の變があつては千仞の功を一簣に缺くの虞があるので、直に增援の命令を第十二師團長に下した、其增援すべき兵力は步兵一聯隊、騎兵若干、工兵一中隊であつた。

此場合何人も少し過早であると思ふたに相違ない此の增援の派遣を、決然として果斷に思ひ切つて出發を命じたる黑木第一軍司令官の處置は、頗ぶる適當なるものであつて實に全在滿洲軍の作戰の上から見ると、非常にこれが有效無比であつたのは事實であつて、敵は此の方面から我右側を脅威して我第一軍の北進を逡巡せしめ樣として、レンネンカンフ、グレゴフ、リユバウイン、マルタノフなど稱する、自稱一人當千の露軍の騎兵諸將軍の指揮する大騎兵團を、常に此の方面に行動せしめて我が北進の右側を窺がはせ樣としたのであつて。騎兵の素質極めて不良にして且つ其數極めて微弱なる我軍に於ては、此右側にある露軍の大騎兵集團が如何に目の上の大啖瘤であつたかはいふ迄もあるまい。今や第一軍は大孤山に上陸したる川村師團と、普蘭店方面にある第二軍と遠く相策應して、西北遼陽を目標に前進を起さんとして、各軍司令部と大本營との間に其交涉を重ねて居る所であるから。萬一にも此の第一軍の右側に敵が侵入した爲めに、此の第一軍が立ずくみになるといふ樣な失態を生じたとしたならば、單に第一軍の不利のみには止まらぬのであつて、全日本軍の作戰計畫の上に大錯誤を來たすべきは瞭然たるものである。然るに今前面の敵に對しては少しも兵力を要する場合でないのに、右側佐々木支隊の方面には兎に角優勢の敵の進來を報じて居るのであるから、過早ではあるが萬一の變を豫防する爲めに、これに增援を派遣したのは流石に黑木大將である。歷戰數度の經驗の效果は此樣な場合に現はれて來るのであつて、此

の一英斷は後に非常なる利益を第一軍の作戰の上に持ち來したのである。評者は此の增援の頗ぶる機宜に適したるを稱贊するに於て、少しも其溢美に近い贊辭か決して媚辭でも諛言でもない、全く誠心誠意から出たものであることを信ずるものである。

此の增援隊は歩兵第四十七聯隊と騎兵十騎及び工兵第三中隊(一小隊は既に佐々木支隊に在り)であつて。相原大佐これを率ゐて六月十九日趙家堡子の第十二師團宿營地を出發して、途中一泊の上四月二十日を以て鬚陽邊門に到著して佐々木少將の指揮下には入つたが、此の增援を得たる佐々木支隊は實に左の如き頗ぶる有力なる混成旅團となつたのである。即ち

歩兵第十二旅團全部
　今村大佐の指揮する歩兵第十四聯隊(小倉)
　相原大佐の指揮する歩兵第四十七聯隊(城野)
騎兵第十二聯隊第三中隊
砲兵第十二聯隊第一大隊
工兵第十二聯隊第三中隊
衛生隊半部

といふ殆んど完全なる混成旅團が成立して、これが指揮官たる人は古るい軍人の中では戰術家として高名なる佐々木直少將であるから、此の方面で確かに一仕事やることが出來る樣になつて來たのであるが。此の增援が二十日に到著すると相前後して賽馬集の方の敵情も益〻切迫するといふ模樣であるので、前に既に述べたる如き嚴重に過ぐる程な警戒の配備を採ると共に、鬚陽邊門西方に於て鬚河を跨いで兩方に堅固にして且つ巧妙なる防禦陣地を構成した。それが大略完成して先づこれで一と安心これなれば百萬の敵も恐るゝに足らずと、佐々木少將少しく心を休めんとして居た二十二日の午前十一時過、忽ち敵騎進來の飛報は同少將の耳朶を打つに至つたのであつた。

此時の右翼前哨地區の前哨司令官は、歩兵第十四聯隊第三大隊長志波今朝

一少佐(現大佐)であつて、彼は其本隊を劉家堡子附近に置き、其第十二中隊を韓家堡子に出して、奈馬峯及新開峯より賽馬集に通ずる主要道路を嚴重に警戒して、遠く新開峯上には騎兵を出して敵の進來を急報すべく頗ぶる油斷なく警戒して居たが、其第一の報告は

『敵騎一百新開峯ヲ越エ前進ス後續部隊ノ有無不明ナリ』

といふのであつたが。佐々木少將は此の報告を志波前哨司令官から受け取つて、これ決して小企圖の前哨騷がしではあるまいと思ふて居ると、それから稍〻一時間を經たる午後零時十五分更に第二回の報告が到著した

『敵ノ兵力ハ步騎合セテ約五百ニシテ前進ヲ續行セリ

大隊ハ劉家堡子北方高地端ヨリ同村西北端ニ亘ル陣地ヲ占メテ對戰ス』

といふ時機頗ぶる切迫したる報告であつたので、必ず斯くあるべしと豫想して心がまへして居た佐々木支隊長は、直ちに瀝陽邊門南方の豫定の警急集合所たる畑地に諸隊の集合を急令して。其の集合も頗ぶる速に出來終るや否や志波前哨方面には非常に烈しき銃聲が起つたので、午後零時三十分諸隊を豫定の防禦陣地に就かしむべく命令して。賽馬集に通ずる本街道を以て陣地を區劃し、本道の北なる右翼地區を步兵第十四聯隊に負擔せしめて、其指揮を今村大佐(現中將)に受け持たしめ。其南方なる左翼地區はこれを椙原大佐の步兵第四十七聯隊に占領せしめて、其砲兵は本道直南側に一中隊と、其他の二中隊はこれを瀝河南方大甸子門西方の高地上に配置した。

右翼前哨たりし志波少佐は陣中要務令第百四十二の

『前哨ヲ配置スルニハ敵方ニ通ズル主要ナル道路ヲ守備スル外敵ノ接近容易ナル地區及我軍ノ情況ヲ觀察シ得ル地點ヲ守備スルヲ要ス』

とある原則を其儘に遵守して、韓家堡子に前哨第十二中隊を出して、此所て賽馬集に通ずる主要道路二條を嚴重に守備し。更に其本道上遠く騎兵を新開峯の上まて進めて、敵の接近を早く知り得ると共に我軍の情況を、容易に敵から窺はれぬ樣にして居たのは、大に評者の意を得て居る處置と思ふ。而し

て愈〻敵が新開嶺を越へて進來するに當つては、此の前進せしめたる騎兵が在つた爲めに敵の接近を逸早く支隊に知らせることが出來たと共に、前哨本隊も非常に早く其準備をなすを得た。それから同令第百四十三の第二項の

『前哨本隊ハ前哨ノ豫備ニシテ敵襲ニ際シ前哨中隊ヲ增援シ要スレバ之ヲ收容スルモノトス之ガ爲メ通常主要ナル道路ノ近傍ニシテ交通便利ナル地點ニ位置スルモノトス』

とある規定に準據して劉家堡子附近に在つて其部隊を休憩せしめて居たので敵襲の報を得るや否や進んで其西北方にある、最も此方面で防禦に適當なる線を占めて。此所で前哨中隊を收容して敵の騎兵が、新開嶺の隘路口から進出して靉河の渡場にかゝる所を、猛烈に射擊して其前進を妨碍抗拒し。以て本支隊の豫定陣地に就くの時間の餘裕を與へんと努力したのは、是又最も適當なる處置であつて、所謂模範的なる前哨本隊の敵襲に應じ方であつたと思ふ。但しこゝに一言するのは舊野外要務令では前哨本隊と前哨中隊の間に前

哨の抗抵線を選定するのを通常としたが、今度の陣中要務令は前に掲げたる如く、『前哨本隊ハ前哨ノ豫備ニシテ』と明示したる通り、敵襲に當つては通常前哨中隊を增援するを立前とした。からして通常の場合には前哨中隊の線を以て敵を抗拒するのが普通となつたのである。これは少しく前の野外要務令とは其たて前に相違があるから、序に一言此場合に於て諸君に御注意申し上げて置く次第である。閑話休題志波前哨大隊は其三個中隊を、劉家堡子北方から西北端に亘る間に展開したのは、彼れ此れ午前十一時三十分少し過ぎてあつたが、零時二十分には韓家堡子に出してあつた前哨第十二中隊は敵の壓迫に堪へずして退却して來たから、右の陣地に在る三中隊を以て巧にこれを收容して。此中隊は此所に停止せしむることなく此の大隊が更に本防禦線に退くには、まだこれから一里以上の道程があるのであるから、一駈けりに退却して仕舞ふことは困難であり、且つそれでは支隊の戰鬪準備が出來ぬかも知れぬから。此の前哨中隊たりし第十二中隊には其退却すべき一里程の道

程の中央なる、南荒地西方なる無名廟の西北に亘る陣地を占領して、大隊の退却收容に任ずべく命令して。一歩も此所に止めず其足て右の陣地まで退却させたが、此の志波大隊長の處置に就ても申分は何人もいふまいと自分は思ふ。

この時に志波大隊の前面に現出した敵兵は、歩兵が約一大隊位と騎兵が一聯隊程であつて、其後方には歩兵が約一聯隊續行するが如き有樣であつたので。該大隊は此の劉家堡子の附近て極力これを抗拒して支隊の陣地占領を容易ならしめんと努めて居た。一方左翼前哨として此大隊の左に連絡して、三岔子溝附近に前哨第五中隊を配置し、例の潘家堡子隘路口を扼して居たる、歩兵第四十七聯隊の第二大隊たる、稲村新六少佐(現大佐)の指揮する右翼前哨本隊は。敵が韓家堡子の方面から進出したのを知ると同時に、更に其一部隊を潘家堡子の西方に進めて此方からの敵の侵入を警戒せしめて。さて其全力を三岔子溝より西北に向て延長せる山の稜線上に展開して、我が志波大隊に

對して進來する敵の右側に向て猛烈なる大斜射を浴せたので。敵は志波大隊と稲村大隊から十字火を被むるの位置に立ち、容易に前進をすることの出來ぬ窮地に陥つたのである。此の稲村大隊の敵に對する處置は最も適當であつたと自分は思ふ。然るに此の稲村大隊は頗ぶる有利なる此地にあつて十分に敵を苦しめて、右翼前哨が南荒地附近に退ぞいたる第十二中隊から收容されて、其附近て陣地を占めて一防戰やるまて現位置を守りて動かず、其後志波大隊の掩護によりて大甸子門方面に正面を避けて退却し、さて鬚河南方高地の砲兵陣地の前に占位して、志波大隊が南荒地から本陣地内へ退却するのを左側方から射撃を以て掩護すれば、それが極めて理想的で最も適當であつたと評者は思ふのてあるが、右の通りに兩前哨の打合はせが出來て居らなんだものと見へて。午後一時半頃に志波大隊の前哨中隊たりし第十二中隊が南荒地へ向つて、大隊の收容陣地を占めんとして急いて退却するのを見たる稲村少佐は、これを以て志波大隊全部の退却とても思ふたのてあらふ。輕率にも

形勝なる三岔子溝西北の高地線を惜しげもなく打ち棄てゝ、本陣地左翼に當る靉河の軍橋西方の河原の方へ向つて、我本陣地の正面前をずん〳〵と退却したが、評者は此の退却は少しく時機が早かつたといふに躊躇せぬのである。此の稲村前哨本隊から見れば志波前哨本隊は、殆んど一里近くも敵方に進出して居るのである、である以上は兩前哨が協力しつゝ歩々退却する爲めには、如何にしても此の稲村前哨本隊は、志波大隊が自分の守れる三岔子溝西北高地より後方まで、悉皆其隊を退却せしめた後でなければ退却すべきものであるまいと思ふ。況んや此の稲村大隊の陣地たる全く志波大隊に追躡せんとする敵の右側を斜射し得べき、最も都合よき要害堅固なる瞰制陣地である而已ならず。これが退却に當つては頭道溝の方に道をとれば、少し遠く迂回はするが聊かも本陣地の正面を塞がぬ樣に退却し得るのであり、よしそれまでの大迂回をせずとも靉河の南岸に沿ふて退却すれば、我が本陣地の歩兵砲兵から收容されることが出來る而已か、決して其正面前を妨碍するの患はないの

てあるから。此場合志波大隊が本道を退却して敵が之を追躡せんとするのを、十二分に此の高地上から瞰制的斜射を浴せて敵に大損害を與へたる後、例の頭道溝の道か又は其東にある黄家堡子から少し西に迂回して、大甸子門に通ずる點線の道路の通ずる谷合か又は靉河の南岸に沿ふて、一氣に大甸子門北方河原の豫定位置へ退却するが至當であつた。然るに稲村大隊は少しも右翼前哨の都合などには頓著せずして、過早に退却をして仕舞たのは自分は頗ぶる遺憾であつたと思ふ。もとよりそれが爲めに志波大隊が大困難をしたといふ樣な、大なる不都合は生じなかつたからよい樣なものゝ。此の大隊の退却と共に敵が志波大隊の左側へ侵入する樣になつたならば、志波大隊の退却は非常に困難であつたに相違ない。幸に敵が逡巡して居る中に兩大隊とも速に退却し得たからよいとはいふものゝ、これは實に稲村大隊の不注意であることは爭はれぬ事實である。戰史の記載する所によると稲村大隊は午後二時半に於て本陣地の左翼に退却をして居るが、志波大隊はそれより一時間の後即

ち午後三時半に於て、始めて本陣地の右翼後に退却して豫備となつたとある。これ實に其行動が全然反對であつて、自分は稲村大隊の方が是非とも志波大隊より後に本陣地内に退却するが至當である、斯くなくては兩前哨の協同動作が不充分であると思ふのである。實際其場の景況は如何にあつたかは知らぬけれども戰史の上に於て見た所では、稲村大隊の退却は確かにまだ少しも其必要に迫られて居らぬのに、隣りの志波大隊を見棄てゝずん〳〵お先へ御免を蒙つた樣な傾向が見へる、これ實に餘りに面白くない無情なやり方であると自分は思ふ。自分は志波大佐とも二昔程前同隊に居つて知り合であるし、又稲村大佐とは特に親しき間柄であるから、何れに愛憎を爲し又何れの爲めにいふのでもないが、確かに此の場合の稲村少佐の退却は、實以てはやまつたるやり方であつたといふを憚らぬ。若しこれが爲めに志波大隊が散々に敵の急追を受けて、本陣地の右翼へなだれかゝるといふ樣なことになつたと假定したならば、其責任は果して何人が負ふべきであらふか、いふ迄もなく必

ず此の稲村大隊の過早の退却が、其當の失敗の責任者とならねばならぬのは何人も否認するを得まい。幸にして事なく無難に退却したから構はない樣なものゝ、戰術上の立場からは充分これを非難して少しも支障はないと信ずるのは決して自分而已ではあるまい。

その上に稲村大隊が其退路を王家堡子方向に取つたのも至當でない、元來前哨なるものは敵の進來を歩々防禦して其後方部隊に戰備を整頓せしむるの時間を與へると共に、其正面を巧に避けて本陣地の射撃を妨碍せぬ樣に、一翼を迂回して其後方に集合すべきものである以上は。此場合此の稲村大隊が左翼陣地の中央に當る王家堡子を目標として退却したのは、頗ぶる拙ないやり方であると自分は思ふ。但し前にも度々いふ通り此の大隊が少し過早に退却した爲めに、此の不當な退路の選定方もさして本陣地の戰鬪を妨げるには至らなんだが。若しも評者がいふ樣に三岔子溝に於て右翼前哨の收容をなして此の稲村大隊が最後に退却する樣にしたとして、現在の退路を取つたな

らば非常に本陣地左翼の射撃を妨碍したに相違ない。て自分の考では此時稻村大隊第六中隊の主力の退却したる、頭道溝から大甸子門に通ずる山逕をとるのは餘りに迂回に過ぎて、本陣地の戰機に遲れるの虞がないともいへぬから黄家堡子の西方から溪谷を傳て大甸子門の砲兵陣地の後方に通ずる、あの點線路を退却したならば適當であつたらふと思ふ。蓋しこれなれば距離も王家堡子を經るものと大なる差のない上に、立派に本陣地の正面を避けることが出來る。但し樵路の樣な山逕であるから行進は隨分困難であらふが、去りとて高山峻嶺といふ程度のものではないから非常なる困難もあるまいし、本陣地の歩砲兵からは十二分の射撃を以て、此の退却を掩護し得るといふものであるから、其退却も比較的に難儀でない而已か、約二千米突餘を退ぞけば後に第二中隊の一部が占領して居た鞍部がある、あの鞍部を東に越へさえすればしめたもの、全く敵の射撃を受けぬことになる。て自分は稻村大隊の退路としてはこれが最も適當であつたと思ふ。若しも此の道路が險惡不充分で

あつたならば、陣中要務令第百八十九にも『道標ヲ設ケ交通路ヲ開ク等所要ノ設備ヲ爲スコトヲ怠ル可カラズ』とある通り、速に其道路を修繕して退却を容易ならしむる樣準備して置くがよいのである。此條文は決して村落や森林に限つて示したのではないから、これに準すべき山地の如きは最も其交通路に意を用ゆるの必要を忘れてはならぬのである。先づ前哨に對する評者の苦情はこれ位で切りあげて、更に今度は前に一寸揭げはしたが、まだ詳細に論究して居ない所の、本陣地に就て研究の歩を進めることにし樣と考へる。

瓊陽邊門西方の佐々木支隊の本陣地は、右翼を內勾門子西方に聳立する高地脈に託して、本街道以北に今村歩兵第十四聯隊を配置し、前哨たる志波大隊は其東方の溪谷中に集合して、右翼地區の豫備隊となる豫定であり。更に其左翼は本街道より左方約二千餘米突に亘る、大甸子門高地上までを占領して、稻原歩兵第四十七聯隊がこれに居り、其第二大隊たる稻村左翼前哨は豫定は如何なる都合であつたか知らぬが、此時は王家堡子を經て退却して、大

甸子門東北の軍橋の傍の川原の中に集合し、後に本道の直き左側の塹壕を占領したのであるが。要するにこれも靈河の右に一大隊靈河の左大甸子門の高地に一大隊を配布して。他の一大隊を其後方に豫備とする考てあつたらしい。而して歩兵は前述の如く兩地區の指揮官たる兩聯隊長に全部を依託して、旅團長は一兵の豫備も貯へなんだらしいのであつて、これは歩兵操典第一部第二百一に

『聯隊ハ他隊ノ援助ヲ計算スルコトナク自力ヲ以テ戰鬪ヲ終始セザルベカラザル場合多キヲ以テ云々』

とあり更に同第二百十一に

『旅團ニ豫備隊ヲ置クベキヤ何レノ聯隊ヨリ幾何ノ部隊ヲ取ルベキヤハ狀況ニ應ジテ定ムベキモノトス』

と明示してある通り普通一般の場合には、旅團に於ては聯隊を並列して戰はしめて豫備を控置せぬのが立前てあつて、其狀況の如何によりて要すればこれを控置するものとしてあるのであつて。聯隊以下の如く必らず豫備隊を備へねばならぬ次第のものではないが、併し佛國操典第三百三に於て『聯隊及旅團ニシテ獨立セシ時ハ常ニ豫備隊ヲ貯存シ其一部ハ最後マデ控置スルヲ要ス』とある通り、此場合の如きは幾分の豫備隊を旅團長が掌握して居た方が萬事に就て都合がよい樣に評者は考へる。戰史の文面の上ては旅團の豫備隊は全く置いてない樣に見へるが、併し附圖第八に就いて研究して見ると歩兵第十四聯隊の第一大隊は、其第一、第二兩中隊を北方面の警戒に派遣して、殘餘は二中隊しかないのであるが、それが少し他の各大隊と離れて靈陽邊門西方の直き川の西岸に位置して居るが。あれは或は旅團の豫備であつたかも知れぬ。左すれば評者は頗ぶる適當な配備であると思ふ、即ち本道の右翼に當る地區は其正面が極めて狹いので、それを一大隊で受け持たせて他の一大隊を其豫備として。さて半部を北方の警戒に用ひた爲めに半端になつて第三、第四の兩中隊しか殘つて居らぬ、此の第十四聯隊の第一大隊を旅團の豫備としたもの

とすれば、先づ適當と評するを得ると思ふが、併しそのことは戰史に記載してあるのでないから全く評者の想像に過ぎぬ。元來旅團は二個の聯隊より成立して居るから、當然豫備を置くべきものでないのが立前で、獨逸の步兵操典第四百七十一にも『旅團ハ唯例外ノ場合ノミ三區分ヲナス爲メニ豫備隊ヲ控置スルニ方リ屢〻建制ヲ分割スルノ已ムヲ得ザルニ至ル』と示してあるが、つまり普通は豫備を置かず狀況によりてこれを設くるのが本筋であるといふ人が多い。が併し實際に於いては旅團の豫備隊が非常な功を奏した實例は、日清、北清、日露の三戰役を通じて甚だ少なくない。若しも旅團長が全く豫備を持たぬとした場合には、一度戰鬪命令を下したる以上は全く兩聯隊の協同動作に委任して、如何なる場合にも自分の意志の如く其計畫を變轉せしむることは頗ぶる難事となるべきが當然である。幾分の豫備を握つて居ればそれを何れかに加へて戰鬪の局面を變轉せしむるの手段方法も運らせるが、手中一兵を擁せざるに至つては萬一の場合、自己の思ひ通りに戰況を指導してゆくこ

とは殆んど不可能である。兩聯隊長は戰鬪命令で委任せられた任務に向つて、各自の部下を使用して仕舞ふのは當然である。其の樣な場合に豫想通りに敵がやつてくれゝば文句はないが、戰場のことは多くは豫想以外の出來事に出會し易いものである。さあ其樣な場合に一兵も旅團長が持たぬとなると、唯命令を下して其應變の處置を聯隊長に命ずる而已であるから、果して自分の思ひ通に急場の凌ぎを巧に付けて呉れるか否かは到底保證することは出來まい。此樣な不意なる狀況は常に戰場に於て生じ易いものであるとして見ると、自分は旅團も必ず幾分の豫備を置くべきを立前として置く方が至當ではあるまいかと考へるが。左すれば編制の上までも改正を及ぼさねばならぬ次第であつて、今日の我步兵操典に於ては必ずこれを置かねばならぬとは規定してないから、佐々木少將閣下が一兵も持たなんだ樣に戰史に見へても、これは決して同閣下の處置が至當を缺いたといふべきでは毛頭あるまいが。評者は前述の理由のもとに此の場合一大隊若しくは少なくも二中隊位は、旅團長が

自身に握つて居らねば全く萬事に都合がよくないと考へるのである。

砲兵は其第一中隊を中央に當る本道直左側に放列を布かしめ、其主力たる第二、第三中隊を大甸子門西方高地上に布列せしめて、此方からは遠く韓家堡子の方まで瞰制して射擊の出來る樣に構へさせ、前面に現出する敵兵に向つて十字形に猛烈なる砲擊を加へ得る樣に計畫したのは頗ぶる予の意を得たものである。此の砲兵の配置に就ては評者は此場合これ以上の置き方はなからふと思ふ。さて斯く論じて來て見ると此の支隊の防禦陣地は相當に堅固であつて且つ至當に占領せられて居るが、細かいことをいへば左翼地區たる椙原大佐の歩兵の配備は自分には非常に不思議に思はれる點が少なくない。何故なれば最初の配備では第一大隊を靉河の南の高地に、第三大隊を本道左側の塹壕に據らしめて。稲村大隊が前哨から還つて來たならば、それを軍橋附近の中央後に置いて、左右何れの大隊にも直に赴援し得られる如くする考てあつたらしく見へるが。附圖の上で見ると非常にこれが亂雜なものとなつて仕

舞て、稲村大隊の退却に際し迂路を取つたる第六中隊の二小隊と第二、第三、第四中隊が大甸子門の砲兵の附近を占領し。本道左側の塹壕は第七、第八兩中隊がこれを占めて其後方には、砲兵第一中隊の後方に第三大隊の一中隊即ち車古嚕跑の守備隊缺けたものが居り。其すぐ左方靉河の三叉點の傍に第一中隊と第五中隊と第六中隊の一小隊が、一かたまりになつて豫備の形を成して居るが、これは甚だしく建制などに頓著せぬやり方をせられたもので。若しも此の後に於て攻勢にても轉ずるとしたならば、此樣な混淆したる配備は爲めに其運動に少なからざる遲滯を來さしめずには置くまい。元よりそれも時機が切迫して出來ぬ場合は止むを得ぬが、此場合の如きは確かにそれ位の整理は充分可能てあつたのてある。唯々僅少なる部隊入れかへの勞動を省かんとして、大隊の混淆を其儘にしたのてあつて、これは決して喜ぶべき現象てない姑息なるやり方と評者は思ふ。て今改めて更に此の配備の全體を圖上に就て一見すると、頗ぶる奇異に感ずる事があるといふのは左右兩地區共に、其